

平成 19 年度環境省中部環境パートナーシップオフィス

運営業務報告書（7－9月期）

2007 年 10 月 30 日

特定非営利活動法人 ボランタリーネイバーズ

EPO 中部事業報告（2007年7月）

【平成19年度7月事業報告】

平成19年度中部環境パートナーシップオフィス運営業務（7月）は、通常業務に加え、半期に一度の運営協議会の準備、事業推考のための具体的準備に入った。

【7月事業報告】

7月 1日	エネルギー環境教育フォーラム IN 東海	新海・鶴飼・宇野
7月 3日 *	安城市 ESD 検討会議 日本環境経営大賞授与式 東邦ガス(株)環境・社会報告書打ち合わせ ESD-T 講座企画会	新海 鶴飼 鶴飼 新海 桜井・宇野・新海
7月 4日	中部電力(株)環境学習キット発送作業	宇野・新海
7月 5日	ワールドコラボフェスタ打ち合わせ	新海・宇野
7月 6日 *	ブレ講座「市民社会を実現するコーディネーターとは」	桜井・新海・宇野・鶴飼
7月 7日 *	市民社会コーディネーター会議	桜井・新海・宇野・鶴飼
7月11日	中部経済同友会研究会	鶴飼・新海
7月12日	名古屋市モノづくり文化交流拠点構想検討会議 愛知県協働ワークショップ「地球温暖化防止活動について」	新海 新海
7月13日 *	なごや環境大学「志」講座 なごや環境大学共育講座審査会	宇野 鶴飼 新海
7月14日 *	ユニー(株)なごや環境大学講座	新海・宇野・桜井
7月18日 *	Panasonic NPO サポートファンド説明会	新海・鶴飼
7月19日 *	ESD-T 担い手会議	桜井・宇野・新海
7月24日 *	EPO 中部運営協議会	全スタッフ

*報告を掲載しています。

【8月事業予定】

8月 1日	中部電力(株)と三重県・EPO中部打ち合わせ	新海・鶴飼
8月 3日	ユニー(株)環境学習 石川	新海・宇野
8月 4日	ユニー(株)環境学習 福井	新海・宇野
8月 6日	環境教育リーダー研修 長野打合せ	新海
8月 9日	ESD-T 会議	桜井・宇野・新海
8月18日	ユニー(株)環境学習 長野	新海・宇野
8月24日	春日井 ESD プロジェクトワークショップ	新海・桜井
8月25日	ユニー(株)なごや環境大学講座	新海・宇野・桜井
8月27-29日	環境教育研修リーダー講座 長野	新海
8月30日	アサザ基金視察	新海・鶴飼
8月31日	なごや環境大学「志」講座	宇野 鶴飼

○今後の検討事項

- *運営協議会の議論をへて、下半期何を実現するか、プロジェクト・事業の整理
- *運営協議会がどうあるべきか、役割などを明確にし、かつ内部評価の評価軸の設定をし、運営協議会としてすべき事業を決定する
- *運営協議会のメンバーニーズにあった事業展開の検討
- *運営協議会内でのプロジェクトベースによる小チーム制の検討。

【中部環境パートナーシップオフィス 7月月報】

7 月		来館者数 (相談・問合せ)	電話 (相談・問合せ)	相談・問合せ内容	スタッフ数
1	日				0.5
2	月				
3	火	9(5)	12(10)	東邦ガスステークホルダー会議 安城 ESD ミーティング 日本環境経営大賞 志講座事前ミーティング ESD-T 担い手会議	4
4	水	12(7)	10(8)	中電エコポイント事業エコキット発送	4
5	木	5(4)	8(7)	ワールドコラボフェスタ打合せ	3
6	金	18(15)	11(8)	ユニー講座第2回の下見 プレコーディネーター会議	4
7	土	1(0)	2(0)	コーディネーター会議	4
8	日				
9	月				
10	火	7(6)	15(10)		4
11	水	4(3)	17(8)	住友とのミーティング	4
12	木	8(7)	12(9)	ものづくり委員会 中京大学とのミーティング ワールドコラボフェスタ打合せ 地球温暖化ワークショップ	3
13	金	12(10)	8(5)	なごや環境大学審査会 志講座第2回	4
14	土	0(0)	2(0)	ユニー講座第2回	4
15	日				
16	月				
17	火	6(5)	12(6)		4
18	水	10(5)	7(5)	Panasonic ファンド説明会	4
19	木	15(8)	8(4)	千頭先生との打合せ ESD-T 担い手会議	4
20	金	6(4)	10(7)	ユニーお店探検隊北陸下見	3
21	土	1(1)	5(3)		3
22	日				
23	月				2
24	火	15(10)	8(7)	2007 年度前期運営協議会	4
25	水	5(4)	13(10)		3
26	木	6(3)	9(5)		2
27	金	8(5)	7(6)	リコー中部ミーティング	2
28	土	1(0)	0(0)		1
29	日				
30	月				
31	火	15(10)	18(14)		3
合計 平均		164 名/21 日 7.81/日	194 件,		73.5 人 3.5 人/21 日

ホームページアクセス数：16,136 件

【中部地区の環境関連団体の基礎資料の収集・管理】

＊7月期に収集した資料 行政関連：31種 企業関連：12種 NPO関連：18種 その他：1種 計：62件

タイトル	年度	発行	備考
緑と水の通信 第91号	2007	ナチュラリスト敦賀 緑と水の会	A4 6P 日本語 2007 発行
東海丘陵要素植物～郷土の宝の植物たち～	2007	豊田市自然観察の森	A4 4P 日本語 2007 発行
豊かな森林を未来にのこそう。	2007	森林施業 NPO 法人森林の風	A4 1P 日本語 2007 発行
森林（もり）の楽校	2007	特定非営利活動法人 JUON NETWORK	A3 ポスター1P 日本語 2007 発行
生物多様性まつり 2007	2007	環境省生物多様性センター	A4 1P 日本語 2007 発行
伊勢湾水利環境実験センター一般公開	2007	国土交通省 中部地方整備局 名古屋港湾空港技術調査事務所	A4 1P 日本語 2007 発行
アクアワールド水郷 パークセンター	2007	アクアワールド水郷 パークセンター	A4 三つ折 1P 日本語 2007 発行
JWRC PROFILE	2007	財団法人自然環境研究センター	A4 14P 日本語 2007 発行
平成 19 年度生物分類技能検定	2007	財団法人自然環境研究センター	A4 三つ折 1P 日本語 2007 発行
STAFFING SERVICE for Nature Conservation	2007	財団法人自然環境研究センター	A4 4P 日本語 2007 発行
砂漠化進む大地とやさしき内モンゴルの人々に出会う旅	2007	日中韓環境教育協力会・内モンゴルプロジェクト	A4 1P 日本語 2007 発行
「第2回全国こども地球環境シンポジウム」募集案内	2007	NPO エコバンク	A4 1P 日本語 2007 発行
こどもエコクラブニュース 2007 No.68 春号	2007	環境省総合環境政策局環境教育推進室 こどもエコクラブ全国事務局（財団法人 日本環境協会）	A5 24P 日本語 2007 発行
こどもエコクラブニュース 2007 No.69 夏号	2007	環境省総合環境政策局環境教育推進室 こどもエコクラブ全国事務局（財団法人 日本環境協会）	A5 24P 日本語 2007 発行
JEC こどもエコクラブ 2007 年メンバー手帳	2007	環境省	A5 28P 日本語 2007 発行
こどもエコクラブ 応援マニュアル	2007	環境省	A4 14P 日本語 2007 発行
こどもエコクラブ サポートーズニュース 2007 春号	2007	環境省	A4 4P 日本語 2007 発行
こどもエコクラブ サポートーズニュース 2007 夏号	2007	環境省	A4 4P 日本語 2007 発行
こどもエコクラブ 全国フェスティバル in よこすか 報告書	2007	環境省総合環境政策局環境教育推進室	A4 22P 日本語 2007.3 発行
エコロジカルあくしょん大作戦！	2007	環境省	A4 4P 日本語 2007 発行
自然しらべ2007	2007	日本自然保護協会	B5 4P 日本語 2007 発行

こどもエコクラブ パートナースHIPプログラムに参加してみよう！	2007	こどもエコクラブ全国事務局（財団法人 日本環境協会）	A4 1P 日本語 2007 発行
地球となかよし メッセージ 2006 作品集	2007	教育出版株式会社	A5 32P 日本語 2007 発行
地球となかよし メッセージ 2007 作品募集	2007	教育出版株式会社	A4 1P 日本語 2007 発行
「電池」を使って環境教育をしませんか？	2007	三洋電機株式会社	A4 1P 日本語 2007 発行
第 16 回ドラえもん 自然はともだちコンテスト作品大募集！！	2007	株式会社小学館・財団法人世界自然保護基金ジャパン	B5 1P 日本語 2007 発行
第 3 回 HAND IN HAND アジアの子どもたちの秋の植樹祭	2007	HAND IN HAND 実行委員会	A4 1P 日本語 2007 発行
参加者募集！製油所見学と環境学習	2007	新日本石油	A4 1P 日本語 2007 発行
第 7 回「牛乳紙パックで『遊ぶ学ぶ』コンクール」＜応募要領＞	2007	「牛乳紙パックで『遊ぶ学ぶ』コンクール」実行委員会	A4 6P 日本語 2007 発行
エコロジーの「かんきょうの詩」	2007	キリンビール株式会社	A4 4P 日本語 2007 発行
「環境危機時計」って知ってる？	2007	財団法人旭硝子財団	A2 ポスター1P 日本語 2007 発行
こどもエコクラブ全国一斉活動 きみもエコロジカルアクション大作戦！に協力してね！	2007	環境省	A2 ポスター1P 日本語 2007 発行
プロジェクト・ワイルド体験で ハスの実採り	2007	アクアワールド水郷 パークセンター	A4 三つ折 1P 日本語 2007 発行
環境教育リーダー研修基礎講座	2007	環境省、文部科学省	A4 1P 日本語 2007 発行
8～11 月パークセンター 自然体験	2007	アクアワールド水郷 パークセンター	A4 三つ折 1P 日本語 2007 発行
環境教育指導者養成講座	2007	アクアワールド水郷 パークセンター	A4 三つ折 1P 日本語 2007 発行
イベント案内 ハスの花の季節です。	2007	アクアワールド水郷 パークセンター	A4 4P 日本語 2007 発行
環境教育プログラム	2007	アクアワールド水郷 パークセンター	A4 8P 日本語 2007 発行
平成 19 年度アクアワールド水郷 パークセンター体験工房	2007	アクアワールド水郷 パークセンター	A4 8P 日本語 2007 発行
eco-T エコット 通信	2007	eco-T エコット 豊田市環境学習施設	A4 4P 日本語 2008 発行
まちの達人 活動推進事業 参加者募集	2007	愛知県・NPO 法人ボランタリーネイバーズ	A4 4P 日本語 2007 発行
エコライフ川柳募集中！	2007	愛知県環境部大気環境課地球温暖化対策室温暖化対策グループ	A4 1P 日本語 2007 発行
雨水の有効活用と建物緑化！	2007	NPO 法人雨水利用と緑化を進める会	A4 1P 日本語 2007 発行
がらぼうだより	2007	NPO 法人ガラ紡愛好会	B4 1P 日本語 2007 発行
地域からつくる ESD ESD-J 活動報告書	2007	特定非営利活動法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議	A4 205P 日本語 2007 発行

第2回ため池シンポジウム in あいち	2007	第2回ため池シンポジウム実行委員会	A4 1P 日本語 2007 発行
デコ通 デンソーエコポイント制度ニュースレター	2007	株式会社デンソー総務部	A4 8P 日本語 2007 発行
やってみよう！環境ボランティア	2007	地球環境パートナーシッププラザ	B5 24P 日本語 2007 発行
EPO TOHOKU 東北環境パートナーシップオフィス	2007	環境省東北環境パートナーシップオフィス	A4 三つ折 1P 日本語 2007 発行
TOHOKU EPO 通信 vol.2	2007	環境省東北環境パートナーシップオフィス	A4 6P 日本語 2007 発行
「ボランティアって何だろう」	2007	(特定) ボラみみより情報局	A4 1P 日本語 2007 発行
国際交流フォトコンテスト作品募集「見つけよう！あなたと世界のつながり」	2007	財団法人愛知県国際交流協会	A4 1P 日本語 2007 発行
みなさまのご支援が必要です 仲間と一緒に新しい未来を創っていきませんか	2007	特定非営利活動法人ソムニード	A4 4P 日本語 2007 発行
ソムニード夏のイベント情報	2007	特定非営利活動法人ソムニード	A5 1P 日本語 2007 発行
東京の環境 2007	2007	東京都	A4 61P 日本語 2007 発行
くいしんぼうグループ活動報告書	2007	なごや環境塾修了生 くいしんぼうグループ	A4 30P 日本語 2007.6 発行
環境・社会報告書 2007	2007	愛三工業株式会社	A4 30P 日本語 2007.6 発行
環境報告書 2007	2007	中部ガス株式会社	A4 24P 日本語 2007.6 発行
環境報告書 2007 地球のためにできること簡易版	2007	中部ガス株式会社	A4 8P 日本語 2007.6 発行
社会・環境報告書 2007	2007	豊田合成株式会社	A4 50P 日本語 2007.6 発行
CSR REPORT 2007 中部電力 CSR 報告書	2007	中部電力株式会社	A4 74P 日本語 2007.7 発行
日経エコロジー eco August2007	2007	日経 BP 社	A4 134P 日本語 2007.7.8 発行

【主な事業報告】

●第5回 日本環境経営大賞表彰式・受賞記念講演会

日時：2007年7月3日（火）

場所：三重県津市鳥羽町700 ホテルグリーンパーク津 6F

主催：日本環境経営大賞表彰委員会、三重県

共催：企業環境ネットワーク・みえ、みえ・グリーン購入倶楽部

1. 日本環境経営大賞の主旨

「持続可能な社会の構築」を目指し、「環境経営の発展」、さらには、「環境文化の創造」を目的として、事業規模の大小や業種・業態にかかわらず、全国の企業（事業所）、NPO、学校、病院などのあらゆる組織体の環境経営の取り組みの中から、優れた成果をあげているものを顕彰する。

2. プログラム

13:00 開会、三重県知事挨拶

13:05 表彰授与式

環境経営部門

環境経営パール大賞：(株)リコー

環境経営優勝賞：イオン(株)環境・社会貢献部・NEC フィールディング(株)・(株)島津製作所・
鈴鹿富士ゼロックス(株)・(株)八十二銀行・栃木県立宇都宮工業高等学校

環境価値創造部門

環境価値創造パール大賞：(株)市瀬、王子製紙(株)、(株)ゼファー、(株)ジャパンエナジー

環境プロジェクト賞：学校法人愛農学園農業学校・信州省エネパトロール隊・新日本石油(株)・(株)長谷エアネシス
富士フィルム(株)・大和信用金庫

環境連携賞：

- ・(株)尾鍋組・NPO 法人地域開発研究機構・(株)百五銀行・ビィック(株)・シードエージェンシー(株)
- ・環境ネットワークくまもと、ソニーセミコンダクタ九州(株)熊本テクノロジーセンター、白川中流域土地改良区協議会
- ・楽しい(株)、デザイナーフーズ(株)、下郷農業協同組合、(株)海水化学研究所、(株)エコ・エナジー、北九州電話サービス(有)、知的障害者授産施設あざみ園、NPO 北九州ピオトープ・ネットワーク研究会、北九州市立大学国際環境工学部松本研究室

13:25 受賞コメント発表

14:25 審査講評：日本環境経営大賞表彰委員会委員長（東京大学生産技術研究所教授） 山本 良一氏

14:40 受賞者記念写真撮影・休憩

15:00 受賞記念講演会

株式会社リコー 取締役専務執行役員 酒井 清氏

株式会社市瀬 取締役社長 市瀬 泰一郎氏

16:05 交流会

17:30 閉会



3. 所見

今回で5回目を向かえる日本環境経営大賞では、パール大賞2件、環境経営部門6件、環境価値創造部門9件が受賞した。

環境経営パール大賞を受賞した㈱リコーでは、持続可能な社会のために向けて2050年までに事業活動全体の環境負荷を8分の1に削減することを目指すバックカスティングがあり、問題があるからこそ社員全員参加で実効性のある活動が重要で、だからこそ環境保全活動・経済価値創出のレベルを上げる環境経営の深化が必要だというコンセプトが明確に打ち出されている。その背景の中で、製品をめぐる資源循環を目指し、各種の対策がとられている。

環境価値創造パール大賞を受賞した㈱市瀬では、森林が抱える問題の中で、企業・製紙メーカーと紙流通・森側、NPOが連携をして環境・社会・経済の利益が生まれる循環型の取り組みを実施している。さらに森林認証制度や林野庁の運動等を絡ませて、“3.9ペーパー”という一つのパッケージ化をしてムーブメントを起こしている動きである。

環境保全や環境経営発展について、市民や企業、行政などの主体が各自の取り組みでは飽和状態が見られる中で、地域内外で手を取り合い、実践的に成果を挙げている企業が多くみられた。地域のリソースがうまく絡み合い、人や仕事、お金がよい循環を描いていく、そんなモデルがこれからの社会の一つの指針になってきていると感じる。

●市民社会コーディネーター講座プレ講座「市民社会を実現するコーディネーターとは」

日時：7月6日（金）夜 19:00～20:45

場所：EPO 中部

参加者人数：15 名

ゲスト：森 良さん（NPO 法人 エコ・コミュニケーションセンター）

ねらい

市民社会におけるコーディネーターとは何か、について実践者から話を聞き、コーディネーターについての考えを整理し、課題を見出す

プログラム

- 19:00ー19:05 あいさつ、講師の紹介
- 19:05ー19:40 参加者自己紹介&参加動機の共有
- 19:40ー20:10 講義「市民社会を実現するコーディネーターとは」
- 20:10ー20:30 グループディスカッション&発表&コメント
- 20:30ー20:45 各自の課題&今後の実践記入&発表

自己紹介ー参加動機

- ・知人の紹介により知り、コーディネーターってなんだろうと思った。
- ・コーディネーターは何をする人か現状を知りたい。役割を洗い出す。
- ・NPO 業界で必要なことだと思うけど苦手な分野だから。
- ・市民社会のコーディネートとは何かを知りたい。
- ・「つながり」を生む役割がまだしっくりこない。
- ・対等な関係作りが簡単なようで難しい。
- ・合意形成をどうつくっていくのか。
- ・森良さんにお会いしたかった。
- ・地域エコメディアのしくみづくりや人材との出会いに期待して。
- ・ボランティアと組織の関わり方に活かしたい。
- ・コーディネーターのポイントをつかみたい。
（上手なファシリテートとは？）
- ・大学の研修やサークルの運営を良くしていくための参考としたい。
- ・環境に興味があるため。



講義「市民社会を実現するコーディネーターとは」 森 良氏

〈コーディネーターとは対等にすること〉

最初に参加者の方の参加動機をお聞きし、どのような方が参加しているのかを知ることができて良かったです。これで焦点を合わせて話しをすることができます。コーディネーターというのは、自分が得た結論を勝手に一方的に話す人ではないということは、はっきりしています。しっかり相手のことを掴まないとコーディネートできないですよね。例えば A さん B さん C さんという人がいて、A さん B さん C さんは何を考えているのかを知る。同じテーブルを囲んで何かやりたいということは一致しているのだけど、それぞれ意見が違うんだよというとき、そこにコーディネーターが必要です。コーディネートという英語を辞書で引いてみると、最初にあった意味は、**対等にすること**ということ。これはただつなぐ、ただ調整するのではないです。違う意見や違う立場の人を対等にすることです。これがコーディネートの本質です。これは難しい。対等にす

るといっても、今の世の中は対等でないですから。力の大きさが違う、持っている資源が違う。力のあるところにお金も人も集まるのです。グローバル大企業、多国籍企業には人が集まって、どんどん他の企業を吸収合併していつている。そういうところには人もお金も情報も集まります。ところが、名も無い一人の市民はお金も無い、情報も無いのです。そういうめちゃくちゃなアンバランスを非対称な関係といいます。今のグローバル社会の中ではこのような非対象な関係者が向かい合うことが頻繁に起きている。それでコーディネーターがその間に入って、両者を対等にしなければいけない。これはすごく難しいことですよね。大変なことだけどこれをやっていくと市民社会ができてくる。私は市民社会という言葉に上下のない**水平なイメージ**を持っています。みんなが横に自由に行ったり来たりできる水平なつながり。そのためには今からやらなくてはならない。持続可能な社会は遠い未来にあるのではなくて、今から始まっている。私たちの関係を対等にし、水平にしておすという作業をみんなが行っていくことの中から生まれてくるのだと思います。今ここに、私たちの**人間関係の中に持続可能な社会が生まれつつある**、という風に考えていますね。

「市民社会は、助け合い、持続可能性、東アジア共同体」

私が市民社会ということでイメージしていることは3つあります。一つは今言った、助け合う、対等で水平な社会。それから持続可能な社会。それから連日ニュースにもなっている EU のやり方。EU のやり方は非常に上手ですね。私が注目しているのは、彼らはアメリカのようにグローバル企業を野放図にするのではなくて、グローバル企業の行動や貿易に対して規制をかけようとしていることです。それをやらない限り環境はよくなりません。貧困も解決できない。EU はなんとか知恵を絞って規制をかけようとしているということです。日本の企業がスタンダードにしようとしている基準、ISO、有害物質規制などは全部 EU から来ている。今の貿易の問題点は、貿易自体にあるのではなくて、貿易を野放図にしてしまったことです。それが環境破壊や貧困を生み出しているわけです。そこを解決しなければいけない。ここに EU の知恵があり、たくさん学ばなければならないと思っています。私たちは AU を目指したい。これはアジア同盟ですね。アジアという規模で平等互恵な平和を築いていくためのしくみが必要だと思っています。歴史認識が共通基盤になくてならないけれど、それも協働作業をやる中からしか生まれない。私は日中韓環境教育協力会という NGO をやっています。今日は、この NGO がおこなっている内モンゴルエコツアーのチラシを持ってきました。日中韓の環境教育をやっている人が集まっています、協力しあっています。日中韓の協力は国のレベルでもやっているようですが、国とは関係なく市民同士の連帯でやっています。そういう市民の連帯が先行して AU、アジア共同体は生まれてくるのだらうと思っています。私が実現したい市民社会のイメージをもう一度まとめると**助け合う社会、持続可能な社会、東アジア共同体**です。そこで必要になってくるのがみんなを対等にしていくコーディネーターなんですね。今私が言ったような市民社会のお題目はみんな言葉では賛成すると思いますが、考え方や作り方は違ってくると思うのでそれを調整する対等なラウンドテーブルが必要になってきます。ここまでは市民社会は何かという大きな枠組みについてお話をしました。

〈コミュニティエンパワメント〉

ここからはコーディネーターが具体的に何をするかについてお話しします。資料をもらってください。ここにコーディネーターの仕事というので3つ書かせてもらいました。一つはコミュニティエンパワメント、二つ目はパートナーシップのコーディネイト、三つ目は社会サービスの需給コーディネイトです。これを簡単にご説明します。

コミュニティエンパワメントは私の団体がミッションにしているテーマです。

「学びから参加へ」というタイトルで今から6年位前に書いた本があります。この本では、一人ひとり力量をつけることによって、**地域が自分達のことを自分達で決められる自己決定の力をつける**、という意味でコミュニティエンパワメントという言葉を使っています。環境問題、貧困問題、人権問題などは、地域の人々が自分達で決められないことから問題が起きているのだと思っています。

例えばダムのような巨大開発が進められるときに、その地域の人たちは全くあずかり知らないところで計画が決められる。そして月日が流れ、いきなり立ち退かされる。いきなりそういうことが起きるわけです。地域の人々がちゃんと調査でき、発言権があり、決めることが出来るならばそういうことにはならないでしょう。実際中国ではそういう事例があります。ある

川の流域にダム建設の話が持ち上がったときに、中国の NGO が流域の住民をエンパワメントして、一緒に調査をしよう、環境アセスメントをしよう持ちかけました。政府の人も含めて住民たちと実行し、それによって政府に提言をおこない、ダム建設を中止させたという事例があります。これは中国の ESD の実践事例として紹介されました。このような事例にみられることを私はコミュニティエンパワメントと考えています。これは NGO がコーディネーター役になって、住民と政府を拮抗させて、問題を解決させたというわかりやすいコーディネイトの好事例です。これからはこういうことがあちこちで必要になってくる。それほどドラスチックなことでもなくても地域で毎日そういうことが起きているのではと思います。住民が自分達の置かれている状況を知らない。自分達の地域がどういう地域なのか、どういう環境なのかよく知らないために、発言できない、文句だけは出てくるということがあります。

日本は市民社会が遅れています。その理由のひとつは**個の確立がなされていない**。どうして毎年 3 万人もの人が自殺しなければいけないのか、非常に不幸な社会。自分の人生や幸福よりも組織の都合によって自殺せざるをえないというのは大変不幸なことです。オルフレンが「人間を幸せにしない日本というシステム」という本を書いています、まさにそのとおり。人が個人として自由に発言したり、行動したりすることに対して寛容に認められないという社会なのですね。これは会社対個人でなくて、家庭の中でも起きている。家庭内暴力、こどもに対する虐待がまさにそうです。人と人の水平なコミュニケーションをどうやって築いていけるのか、人間関係の一番基礎の部分から私たちはやりなおしていかなければいけないという課題を背負っているのです。

政治的な問題から家庭の問題まで、水平なコミュニケーションをつくり、人の話を聴き、そのポイントを掴んでそれを深めていって何をしたいのかをはっきりさせていく。そういうプロセスをみんなでつくっていく。一人ひとり弱いのでなかなか自分の思っていることを言えなかったり、伝えられなかったりする人が圧倒的に多いわけです。そういう人の話に耳を傾け、話をきき、思いをカタチにしていく役割の人が必要だということです。個人や団体が力量をつけて自己決定していくことを、自治体が政策として実施するくらいでないと日本の社会は変わらないのではないかと思います。環境学習とは普及啓発するものではありません。環境学習とはコミュニティエンパワメントすることです。先ほどの中国の事例のようなことをみんながやる必要があるということです。



〈コミュニティでのパートナーシップのコーディネイト〉

協働については既にも色々とお聞きになることも多いと思いますので、課題について簡単にお話します。それは広いエリアでのパートナーシップというのは問題にされているけれども、狭いコミュニティでのパートナーシップは問題にされていないということです。例えば、自分達のまちの商店街の人、自治会の人、自治体、そして自分達で、駅前放置自転車問題をなんとかしようと考えたとします。さらに自転車問題に取り組むだけでなく自転車を活用して CO2 を減らそうと考えるとき、当事者がラウンドテーブルをつくって話し合わなくては一步も進まないですね。コミュニティでこそ、違うセクターのパートナーシップが今求められているのではないかと思います。行政・企業・市民という希望のトライアングルを具体的なコミュニティの中でこそきちんと作っていく必要があるかなと思います。自由に対等に話せる円卓会議が区とか市というレベルだけでなく地域でもない。コミュニティでのパートナーシップが大きな問題になっていると思います。

〈コミュニティ・ケアのしくみと人材養成〉

これは本当に深刻になってくると思います。例えば、最近障害者はどんどんまちに出ようと、言われています。身体障害も精神障害もアルコール患者の方もどんどん地域にでてくるとき、その人たちが地域で共に生きられるためにはコミュニティで

ケアすることが必要になってきます。ところがそのケアする仕組みはまだできていません。担い手も十分ではありません。非常に足りない。例えば板橋区では地域福祉活動計画を作っていて問題がでてきました。板橋は木造密集地帯、阪神大震災のような規模の地震がおきれば大変な被害が起きることが予想される。そこには一人暮らしの独居老人、重度障害者、自分で避難できない人がたくさん住んでいます。このような災害弱者を出さない防災のしくみが必要です。このようにコミュニティでケアの仕組みを必要としている人がたくさんいる。その人たちのニーズに応えるケアの仕組みや担い手を育ててはいけません。それが社会サービスの需給です。今は需給アンバランスです。需給アンバランスを解決して、だれがどうやって仕組みをつくり人材を要請するかなどをおこなうコーディネーターが必要です。大変なことが起きてしまう前にやっていかなくてはいい。

〈地域で活動するコーディネーター〉

私が考える、市民社会をつくっていくコーディネーターとはコミュニティーワーカー、地域で働く人としてのコーディネーターです。そのためにどういう仕組みが必要なのは、「ひとをつなぎ、ちいきをつむぐ」というタイトルの配布資料をご覧ください。お供え型人作りシステムというお供えのような絵をみてください。一番下の一番大きいところが、自分では話を出来ない人や話を聞いて欲しい人です。この人達の話をしっかり聴く人が必要です。そういった人を縁側カウンセラー、傾聴カウンセラーといいます。今はお年寄りの話を聞くという役割でしか使われていませんが、もっと広く考えて、縁側カウンセラーと名付けました。それからみんなが自由に来て話ができる縁側のようなところがあって、話したいことを話しましょうとなって話が盛り上がる。話が盛り上がってこういうことがやりたいね、となったときにサロンのようなところではやるのが難しいので、やりたい気持ちがある人が集まってワークショップを行う必要がありますね。ワークショップという課題解決をするところではファシリテーターが必要です。ファシリテーターはみんなが言っていることに対してつつこみをいれる、鋭い質問をいれるのです。そうすると自分の考えが深くなる、みんなの討論がより深くなる、そういうプロセスです。ファシリテーターは一言で言えば問う役割をする人です。ワークショップからいくつかプロジェクトがうまれてくる。そうした時にこういった役所の窓口があるよ、こういった資金源があるよ、といって円卓会議の場をしつらえていくことができるのがコーディネーターです。人を対等にして出会わせてつなぐ役割の人。このお供えにみられるように一番下が一番多い。上に行くと数が少なくなるので生態系ピラミッドのようなカタチになっています。これを私は4月から実践しています。夢みたいな事ではなくてできています。いろいろなことが重なってこれができ始めているのですね。

〈地域のことは地域で解決、出番だ講座〉

最後にお配りした資料にはお供え型人作りシステムが地域で展開するとどうなるかというイメージ図があります。3年前からあちこちの地域で、こんなことをやりたいという思いをカタチにするワークショップをやっています。これからは自分の出番だということで、出番だ講座という名前だったり、地域デビュー講座という名前だったりします。地域の人がこれまでやってきたこととか得意なことを活かして、何か地域の役に立つようなことをしたいと思っている方はいっぱいいるのです。それが思っているだけになっているので、きっかけと、思いをカタチにする具体的な手助けをするのがこのワークショップです。15、6人集まって、3時間×4回やるのですが、そうすると、3つか4つのグループができます。みんな面白いことを始めています。例えば、あるお母さんは自分の台所を開放して余り物でおかずをつくるイージーキッチンというサークルをはじめました。そこに紅茶コーディネーターという人が現れて紅茶を淹れたりします。いろんなことをやりたいグループができて活動を始めています。例えば池袋の駅前にある銀行の前の放置自転車を片付けたいと言い出した人がいます。銀行に来る人もいるだろうから半分はプランターを置いて自転車がおけないようにする。半分は簡易駐輪機をつくって自転車が駐輪できるようにして30分以上時間が経つと有料になるというものを開発しようというものです。これを商店街や駅の人と協力しておこないたいというアイデアを出した人がいました。ここにコーディネーターが登場して、駅長さんや、商店街の会長さんに呼びかけ、出会いの場をつくり、どうやってその問題を解決していくか考えることになります。放置自転車をなんとかしようとみんなが考える。ここからコーディネーターの活動が始まるのです。

〈地域サロンからはじまる地域の自治〉

これからだんだんつくっていきたいのが地域サロンです。うちの事務所はみらい館大明という廃校の中にあるんですけど、近くに坂下商店街というのがあります。この間、会長さんの所に行ったら、空き店舗が3軒くらいあるよということで、そこに地域サロンをつくるといいんじゃないのという話をしています。この空き店舗で地域サロンを開催するためには、さきほど言ったお話が聞ける人が必要です。そこで聴く人を養成しようというのでコミュニティーワーカー養成講座をおこないました。4月から6月まで10回で2万5千円の講座を10名の方が受講終了しました。出番だ講座や地域サロンでおおいに活躍してもらいたいと思います。これまでのように行政が決めて町内会や自治会を通して下におろしていくというシステムじゃない、地域から自分たちの問題を解決するという新しい今までと全く違う自治体のシステムをつくることになります。これから豊島区でモデルをつくりたいと思っています。これで私の話を終わります。

●森さんの講義を聞いての感想をグループで交換しました。どんな話がでたでしょう・・・

「つながり」をうむコーディネーターの役割がしっくりこない。

理念は納得したが、実践のかたちになっていることに驚いた。

中国の実例、NGOの真の働き、行政の巻き込み方を知って驚き、参考になった。

コーディネーターは平等に参加するルールをつくる役割がある。

お供え型人作りシステムの他にも議会など地域を代表するシステムがある。

イージーキッチンのようなたまたまできたシステムで派生して人脈が広がって行くのは面白い。

中部リサイクル運動市民の会でも行政と企業と市民が円卓会議をひらいているという紹介があった。

コーディネーターは難しい。ただつながりだけではないのではないか。

コーディネーターは町のなかにもいる。

課題がでてきてつなぐのがコーディネーター。

人口千人の地域では何人くらいコーディネーターがいるといいのか。

地域でワークショップをおこなうときにファシリテーターをしているが、プロジェクトが実際に動き出すときには関わる
ことがないのでフラストレーションになる。退職後にやりたい。

行政の思いだけにはさせたくない。

市民社会コーディネーターは職業として成り立つか。

コーディネーターのもうひとつ上があるような気がする。

地域の住民がコーディネーターやファシリテーターやカウンセラーをやっていくことが重要ではないか

●参加者との意見交換

森さん：コーディネーターの役割についての議論と、コーディネーターは食えるのかというのが二大テーマですね。役割については参加者の方が面白いことを言っていましたね。

参加者：つながりだけでなく、なにが生み出す、新しいものをつくり出すという役割があるということです。出会うだけでなく強みや特徴を活かして、何ができるのか考える、出会った先にどうするかアイデアが肝心だと考えました。

森さん：そうですね。ただの調整ではないのですね。

参加者：問題解決までやると気持ちがいいのだけだね。

森さん：職業として成り立つかというのはまさにこれからチャレンすね。現在、「想いを形にする」学びと参加のしくみづくりの事業を文部科学省にNPO支援事業に提出しています。通るかどうかわからない。とりあえずこれからスタート。地域サロンで話を聴く人になんらかの対価をつくれるといいと思います。地域でコミュニティファンドをつくる、地域で事業をおこしてコーディネーターを食わせるなど自分達で設定しないといけないですね。

●市民社会コーディネーターの課題は何か→その課題を解決するためにできることは何？

- ・労働組合が各団体とのパイプを通して行政や企業、組合員、地域、名古屋 NGO センターなどのコーディネーター的役割をすることができるかも。→組合内ではトップダウンなので、水平性の確保が必要。
- ・他の地域での経験を共有するための情報や縁側が少ない。
→その解決には発信力のあるコーディネーターのネットワークをつくっていく。
- ・他の人のやりたいことを引き出してあげること。
→卒業した大学のオーストラリア研修が中心になっている学生を中心にしてどう学生・OB に呼びかけていけるか。
- ・もっと足の不自由な人が自由に行き来できる場所を設ける。→自分からボランティアで動こう、呼びかけよう。
- ・コーディネーターの役割など地域の現状を調べ、洗い出し、育成していく。→まずは小さな地域で仕組みを実践してみる。
- ・いろいろな立場の人の思っていることを理解して人をつなげること。
- ・個人や団体（NPO）の力が弱い。→ボランティアが自信、実感をもてるような提案をする
- ・企業と市民・NPO とのエンゲージメント。まちづくりを基盤とした環境、自然問題の解決や予防策。
→コーディネーター役として、つながりづくりと問題解決まで地域への奉仕、実践、市との協業。ESD などグローバルな視点、全体からのエンパワメント強化。パートナーシップのコーディネート充実。
- ・きっかけがないところに、コミュニティサロンや集まりをもって進めていくこと。思いが強く立場の異なる人々をどう対等にしていくか。
→問題になっていることを可視化する。お互いを知る、知ろうとするような仕掛けをする。
- ・コーディネーターが職業として成り立つかどうか。
→ファシリテーターやコーディネーター能力が高い価値で認められるしくみ、企てをつくる。または政策としてとりあげられること。

地域の中に、集まり話し合うきっかけをつくる。でも気軽に集える場所をつくるには何ができるだろう。

自分の課題はまだわからない。→仲間と協力してさがしていく。

所 見

参加者から市民社会コーディネーターの課題だと思うことと、そのためにできることを発表していただき、講座の終了時間となりました。今回の参加者の方は、問題意識が高く、現場で実践している方が多いと感じました。協働やパートナーシップで促進しようとあちこちで言われるようになったものの、それは一体何のためか、当事者同士が力を出し合う先にあるものが今日の講座ではっきりみえてきたと思います。それはより効率的効果的に物事を運ぶためとか、市民参加のアリバイをつくるためではなく、地域自治、市民社会の創造につながっています。このためにつながるので。コーディネートとは対等性をつくること、そのためのしくみをつくること、市民の声を聴く人を育てること、実験実践における課題はいろいろと示されました。私たち一人ひとりが今日考えた、自分にできることを実行して市民社会への道をひろげていきたいと思います。

●市民社会コーディネーター会議

日時：7月7日（土）10:00～17:00（受付 9:30～）

場所：名古屋 YWCA 105 号室

ゲスト：小山 淳子さん（NPO 法人 コミュニティ・コーディネーターズ・タンク CoCoT）

森 良さん（NPO 法人 エコ・コミュニケーション）

対象：中部の NGONPO 行政セクターで活躍する 30、40 代のコーディネーター

参加費：1000 円

参加者：15 名

【開催主旨】

現代社会は急速に変化し多様化が進んでいます。人々がつながって地域をよくしよう、地域の課題を地域の力で解決していこうという取り組みが盛んになり、市民社会をつくる視点をもったコーディネーターの役割が要になっています。今回の会議は中部圏で主として NPO セクターを中心に活躍されている方に実行委員として関わっていただき、地域に求められるコーディネーターの役割機能を明確にすること、コーディネーターの社会的意義・価値を提示することを目的に実施しました。

【プログラム】

- 10:00-10:10 主催者あいさつ ゲスト紹介
- 10:10-10:50 I 全国コーディネートカアップ研修会報告
- 10:50-12:00 II セッション1:参加者の課題抽出ワークショップ（自己紹介兼）
- 12:00-13:00 昼食休憩
- 13:00-14:00 III セッション2:小山氏発題「私の考えるコーディネーターの役割と社会的価値」
- 14:00-14:15 質疑応答&ティーブレイク
- 14:15-16:30 IV セッション3:「私たちの考えるコーディネーターの役割と社会的価値」
- 16:30-17:00 発表 まとめ ゲストコメント
- 17:00 終了

【ゲストプロフィール】

小山 淳子さん NPO 法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク CoCoT 副代表理事

まつど市民活動サポートセンター指定管理者センター長

十代の居場所をつくる「アルトの会」代表。十代の子どもの居場所「ジャンク広場」を開催

《コーディネーターとしての職歴》

2002 年 6 月～03 年 10 月

松戸市パートナーシップ検討委員会検討委員として、松戸市のパートナーシップの拠点「まつど市民活動サポートセンター」の設置に関わる。

2003 年 4 月 まつど市民活動サポートセンターのコーディネーターとして勤務。

2004 年 9 月～05 年 3 月

平成 16 年度内閣府市民活動モデル調査研究事業 ワーキングチーム事務局

平成 16 年度内閣府市民活動モデル調査研究事業を受託し、「参加と協働」をテーマ

松戸市内 64 団体にヒアリング調査を実施、行政と市民活動団体等とのパートナーシップを推進するための方策を提言。この調査データを松戸市パートナーシップ条例の基礎データとして、条例案策定委員会に提供。

2004 年 11 月～2006 年 2 月 松戸市パートナーシップ条例案策定委員会事務局。

*2007 年 7 月協働のまちづくり条例として制定される

2005 年 4 月 まつど市民活動サポートセンター チーフコーディネーター
2006 年 5 月 NPO 法人コミュニティ・コーディネーターズ・タンク CoCoT 設立
2007 年 4 月 まつど市民活動サポートセンターの管理運営を指定管理者として受託
2007 年 5 月 文部科学省「青少年の意欲向上に関わる調査研究事業」を受託
現在、行政・大学・NPO による実行委員会形式の調査研究を実施している。

森 良さん 学びと参加をつなぐコーディネーター NPO 法人エコ・コミュニケーション ECOM 主宰
「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議（ESD-J）理事

子どもたちの自然教室のボランティアリーダーを 10 年、環境教育・環境まちづくり・市民参加を応援する NPO を 11 年実践。現在、日本とアジアの地域でのコーディネーターの育成に力を注ぐ。

主な著書 『新版ファシリテーター入門』（ECOM、1997）

『コミュニティ・エンパワメント ー学びから参加へ』（ECOM、2001）

『しぜんあそび・なかまあそび』（フレーベル館、2004） 他

共著 『「総合的な学習の時間」はコワくない！』（ECOM、2001）

【プログラム】

I 全国コーディネートカアップ研修会報告

●森良さんの話

〈ボランティアのおもしろさに出会う〉

なぜ、これをどうしてもやりたいと思ったのかをお話する前に、まず、私自身の歩みをお話したいと思います。私がエココミュニケーションセンターを始めたのは今から 14 年前の 1993 年です。その前は何をやっていたのかというと、こどもたちの自然教室のボランティアリーダーをサラリーマンをしながら 10 年ほどやっていました。そのときのボランティアのしかたというのがとても気に入っていました。知床自然教室といって、北海道斜里町と自然保護協会が共催でやっていました。自然保護協会が自然教室のボランティアの面倒をみていました。自然保護協会のやり方は全てボランティアまかせでした。みなさん自分達で企画して自分達で運営してやってください、ミーティングの場所だけお貸ししますというので、一切口出ししないやり方です。自分達で企画をたてて 1 年間かけて実行していく。たった夏の 10 日間の出来事ですけれど、一年間かけて準備するんですね。研修も自分達でやっていました。私が初めてやったボランティアで、すっかりはまりました。これは面白い、こういう世界があるのかと思いました。その時に彼らは何も言わなかったけれど、ボランティアってこういうことなんだと教えてくれたと感謝しています。つまり今言われてやるボランティアは、お手伝いとしてのボランティアが非常に蔓延しているのではないかと思います。そうじゃなくて自分達で企画して自分達で運営する。奇しくもそのときの仲間が「ボランティアは一人ひとりが社長だ」と言っていて、なるほどと思いました。



〈環境教育から市民が力をつけるコミュニティエンパワメントへ〉

その後環境教育を仕事でやるようになりました。仕事として始めたときにミッションが変わりました。最初は環境教育を地域や学校に普及していくためにエココミュニケーションセンターをつくりました。ところが地域に普及を始めると、これは環境教育という入り口やテーマが大事なのではなくて、それによって地域の市民が自分達で地域の環境のことを知り、解決していく力をつけていく、いわゆるエンパワメントのほうが大事じゃないかと思いました。これからはエンパワメントを主眼にしてやっていこうと思いました。ただ講座の講師がやりたいのではない、講座を通して市民が力をつけていく、そこに焦点を当てようと思いました。志木市で環境大学講座をやった時に市民の反応をみて心からそう思ったのです。そこでミッションが環境教育からコミュニティエンパワメントにぐーっとシフトしました。ひとりひとりの力や地域の力をつけることを通して地域の人が地域の問題を解決していく力、自己決定する力をつけていく、そういうコミュニティエンパワメントに向けて、自分の全ての活動をやっていくことにしました。

〈コーディネーターの力をつける〉

具体的には市民のイニシアチブにおけるローカルアジェンダ 21 策定とか、環境まちづくりを推進してきました。そこからまたどんどんシフトしていった地域の資源や人を活用した持続可能なまちづくりに進みました。市民参加といってもそれを担える市民は限られています。最近、韓国の自治体と日本の自治体を比較したのですが、韓国の自治体は 240 くらいあります。そのうち 200 の自治体が市民や企業と一緒にローカルアジェンダ 21 を策定してローカルアジェンダ 21 という団体と一緒に推進しています。市役所がほとんどその予算をだしています。そういう面では韓国はずっと進んでいる。日本の自治体でそういうことをやっているところは限られています。環境基本計画はりっぱなものがあるけれどみんな絵に描いたもちで、誰がどうやるのか全然わからない。活動すればするほどコミュニティエンパワメントが重要だと痛感しています。ボトムアップでコミュニティから問題を解決していく力をつけていくときに必要なのはコーディネーターなのですね。

地域の人はどうやって行政とか企業など立場の違う人と渡りをつけて自分達の思いを実現していったらいいか、コーディネーターの介在なしでは実現はしないと思います。コミュニティエンパワメントを企画して推進するのもコーディネーターでないと出来ないと思います。本来は自治体に政策としてやってもらいたいと思っているのですが、それを提案して実行するコーディネーターがいないと出来ない。何よりも昨年私がやりたいと思った最大の理由は、コーディネーターという肩書きを持っている人はいっぱいいるけれど、その人にそういう力はあるのかな、心もとないなと思ったからです。コーディネーターを仕事としている人に力量をつけてほしいと思ってコーディネートカアップ全国研究集会を開催しました。

●小山淳子さんのお話

『協働』に社会の動きの変化を感じた〉

私はもともと森さんのように NPO だとか市民活動とかボランティア活動とかに一生懸命長い年月かけて関わってきた人間ではありません。実は 2002 年に松戸市がパートナーシップ検討委員会というのを設置して広く市民に公募をかけるまで私はほとんどそういう世界とは無縁でした。主婦として生協活動に関わったり、PTA の活動に関わったり、地域活動に関わったりはしましたが、自分のやっていることを格別 NPO だとか市民活動とかに整理して考えることはありませんでした。私の仕事は家庭教師でした。どちらかというと今の社会の価値観をそのまま受け入れて、どれだけ子どもを上手に育てて偏差値を上げていい学校に行かせるかということを請け負う仕事をしていたのです。自分が若いときは、子どもがよい学校へ行けば報酬があがるし、成果がはっきりわかる仕事だったので面白かったのですが、やりながらだんだんずれを感じるようになりました。本来私が子どもに与えたかったものと、親が期待するものと、社会の制度との間にたって自己矛盾に陥るようになりました。私は一体何を仕事にしているのだろうかとすごく悩んでいるときにパートナーシップ検討委員会の委嘱の広報が出たのです。私が何にひっかかったかという「協働」という言葉です。そもそもパートナーシップも NPO 法も知らなかったのですが、協力の協に働くと書き表している。「きょうどう」といえば共同風呂の共同、協同組合の協同しか知らなかったで、こういう字の協働があるのだと広報をみて思ったのです。教えるのが仕事の人間なので協働という言葉をいろいろ調べているときに、社会の動きがすごく変わってきているなと感じました。それで私は協働について小論を書いて松戸市に提出したところ、松戸市は私を検討委員にいてくれたのです。パートナーシップ検討委員は定員が 25 名でしたが、ふたを開けてみたら、60 名いた。松戸市は公募で市民が定員の 25 名が来るとは夢にも思っていませんでした。ところが 60 名が応募して、松戸市は 60 名の人を 25 名に落とすのではなく、全部受け入れることにしました。60 名に委嘱した検討委員はほとんど長年ボランティア活動をやったり、社会福祉協議会のボラセンに関わっていたり、あるいは市が設置した様々なまちづくり関係のネットワークに関わっている人たちでした。なんのしがらみもなかったのは、現在 NPO 法人コミュニティーコーディネーターズタスクの代表を務める川瀬さんと私の二人だけでした。

〈コーディネーターの役割〉

松戸市がパートナーシップの拠点として、松戸市民活動サポートセンターを設置するということで、私と川瀬さんはサポートセンターの将来を考えるワーキングチームに入りました。理念を語る委員はすごくたくさんいたのに、本当に民営化のプロセスをとる提言書を出す段になったらみんないなくなりました。最後に残ったのは私と川瀬さん二人だけでした。私と川瀬さんは、

最初は公設公営で設置して 3 年後には民営化しよう、という提言書を松戸市に出しました。そのとき私はこれを本当に担おう、やるべきだと思い家庭教師の仕事をやめ、サポートセンターのコーディネーターとして松戸市役所の臨時の臨時職員になりました。時給は 780 円でした。その前に私は時給 6000 円とっていたのですが、780 円になりました。松戸市は貸館業務をおこなう際、受付のおばさんというよりはコーディネーターという名前の方がカッコいいだろう、という位の発想で、コーディネーターという名前をつけてくれました。私たちに何か権限を与えることはなく、何か能力があるとか、何か提案するとかなど夢にも思っていませんでした。ところが私たちは、私と 3 人仲間がいたのですが、松戸市が期待するようなことではないことをどんどん提案したので、正規職員から、「臨時職員にそんなこと言われる筋合いはない」と言われいつもバトルになりました。そのなかでパートナーシップの拠点にするのだったらこうあるべきだということを考えました。そして、それをどんなカタチだったら伝えていけるのだろうか、どうしたらみんなが動いて社会の歯車が回り始めるのだろうかとか常に考えていました。実際にこの 4 月からサポートセンター指定管理者として事業を受託して民営化しました。その過程の中で、松戸市が考えていた、にっこり笑って情報提供をする「受付のおばさん」をカッコよく言い換えたコーディネーター像と、サポートセンターを民営化していくことを極めて政治的政策的なことを実現していくことを担う人としてのコーディネーター像は、すごく乖離していた。この乖離していたものを埋めていくためにはどうしたらいいかと、いつも考え続け、逆に問われ続けながら仕事をしていました。プロフィールになぜ自分の経歴を長々と書いたかというみなさんに参考にして欲しかったからです。780 円でコーディネーターを始めて、パートのおばさんが内閣府に 300 万の調査研究事業の企画書を出すなんてありえない！と役所で言われながら、内容は私が作成し、提出者は上司の名前で、予算は上司につけてもらうなど、やりとりしながら企画書を作成しました。その過程の中でコーディネーターはどんな仕事をしていったらいいのか、どんな社会的役割があるのか、職業としてどのようにみんなに認知してもらえば食べていけるだけの仕事になるのかということを常に問われ続けました。私がこういう過程を辿って、ここにいるのだということをプロフィールに書いた変遷を辿ればみなさんにわかってもらえると思いました。これはどういうことだろうとか、どのようなプロセスを踏んでこうなっていくのだろうかとか思われた方も多いと思いますが、今日は個人的というよりも社会的に精査されたお話をしたいと思います。

Ⅱ セッション1：コーディネート現状インタビュー：課題を抽出・お互いに知り合う

参加者の経験や課題を知り合うために、二人一組でインタビューしあい、インタビュー後、インタビュー用紙をご本人の手元に渡し、自己紹介した。

あなたのコーディネートを教えてください

- おなまえ
- コーディネート名
- 何と何をコーディネートされましたか
- 生み出したこと、成果は？
- 苦労したこと、課題は？



○参加者から抽出された課題

- ・ 伝える力をつける 伝わる人になる。
- ・ 一般の人に伝わるのはどんな言葉か。
- ・ もっと多くの人に伝えたいがどうしたらいいか。
- ・ 地域の人に住んでいるこのまちの良さや環境をどのように伝えていけばいいか。
- ・ 参加者の深い潜在的なニーズを把握して場作りに活かすこと。
- ・ つながりをどのように維持して、しっかりしたネットワークにしていけるか。
- ・ 仲間の中ではつながりができてきたので、一般の人とのつながりをつくる。
- ・ 何かしたいのだけど何をしたらいいかわからない学生に何を提供したらいいか。



- ・ 地域の人に呼びかけて、地域の人と一緒に何かすること。
- ・ つながる相手にお互いにとってのメリットを落とし込むこと。
- ・ 総合学習出前講座の講師派遣でお互いにメリットのあるマッチング。
- ・ 顧客の満足とアリの的な話し合いをいかに楽しい創造的な合意形成の場にできるか。
- ・ 自分たちの学びあい、励ましあい、育ちあいがあたりまえになる組織づくり。
- ・ やりっぱなしではなくて、ふりかえり、反省から次につなげるサイクルがあたりまえになる。

Ⅲ 小山さんの発題「私の考えるコーディネーターの役割と社会的価値」

〈コーディネーターの機能〉

まつど市民活動サポートセンターは市民活動の中間支援組織です。だれをどんなふうに支援しているのかといいますと、まずは個人の方。窓口に見える人の話を聴いて、ニーズを汲み取り、その人のスキルアップ、自己実現につなげることです。次に団体支援があります。この団体支援では、今行政側が市民活動支援センターといっていっぱい建てているところは、この団体支援がすごく多いですね。支援内容は、例えば助成金の出し方とか、あなたの NPO は事業計画書が立てられて、書けていますかというものがほとんどです。支援センターがよく NPO 支援講座を打ちますが、それは組織評価のための支援、コーディネーションだと考えています。ここでは、例えば、採用権とか予算権、予算案件というようなお金を握って何かを決めていく、判断する力が働くことが必要になります。つまり、内輪だけの話だったら、別に喧嘩しても何してもかまわないんですけど、よそのうちの話をしていないといけなくなるので、何かしらの裁量権を持った人間が責任を持って何かしていくという場面に入ってきて、それはもっと政治的な要素を含んでいる。例えば、松戸の市民活動サポートセンターは、アカの集まりだぞ、と言われていました。アカという表現がとても昔懐かしく感じますが、でも、そのようにアカだったら、ひょっとしたら相手は黄色か黒か白かは知りませんが、そのような拮抗する勢力があるわけですね。それは単純にお金とか執行権とかの話ではなくて、これは政策的な政治的な思想信念とか、あるいは経営、経済バランスというところに影響されながら動いていく。このような場面で実際にコーディネーターをやっている人というのは私もなかなかお見かけしたことはないし、実際にやっている人がいたら是非お話を聞いてみたいと思います。ただ、ここの場面にいるとそういう要素を持って社会は動いているんだな、経済は動いているのんだな、政治は動いているんだな、ということを感じさせられることが時々あります。今お話したのが、私がいままでやってきた中でコーディネーターの中間支援組織の中の基本的なことを整理して考えている場面です。



〈コーディネートのプロセス〉

今までの話で皆さんが日常的に感じられることと、とても乖離している、別世界の話というふうに感じられる方はいらっしゃるいませんか？自分が毎日困っていることにはとても繋がっていかないと感じられる方もみえると思います。私は日常的には、例えば「こんにちは、うちの子供が不登校で困っていて、どうしたらいいか相談してくれる NPO とか、不登校の NPO 紹介してくれる？」と言ってやってくる人に対応したりしているわけです。じゃあ何故こういうことを考えるかという、今皆さんが日常的にすごく自分が悩んでいることをどのように普遍化されて、概念化されて、社会に返していけるかということを考えているからなのです。コーディネーションのプロセスというものを、ちょっと考えてみたいと思います。

先ほどお話したように個人に対応するいろいろな事例がたくさん積み重なってきます。例えば、自分は退職したけれどせっかくこんなスキルを持っているのだから社会に返していきたいとか、私はこういう悩みをもっているから協力してくれる NPO を知りたいとか、私は環境に対してどうしてもこういう思いを持っているのだけど誰かと連携してできないか、とかなどの事例がたくさんサポートセンターのようなところに溜まっていくわけです。この事例がどんどん溜まっていったら、ひとつの抽出されたものが、見えてくると思うのです。ひとつの事例が積み重なった、モデルのようなものが見えてくるのです。この抽出されたもの、単純に事例 1、事例 2、事例 3 と整理されてきたものを、今度は私達がそれをもう少し一般的な言葉で、整理して概念化していきます。そしてこの概念化したものをどこに持っていくかというと、行政とかに政策として提案するのです。比喩

的にいえば、コーディネーターは日常的に食べたり飲んだりするのと同じようにここにいる。私達が食べたり飲んだりしたものが、栄養になって、ここにひとつの人間を形成する。体が形成されて、その中に頭の中に概念として知識として思いとして作られていく。それが制度や仕組みになって反映していく。このような流れを、コーディネーターというのは自分の中に持っている。というのが、私がイメージする協働のコーディネーター。まちづくりコミュニティの、コーディネーターのイメージなわけです。

〈一人ひとりの思いを社会に表現する〉

このチラシは松戸でやっている「レッツ体験」という中学生から大学生向けの、ボランティア体験講座です。このボランティア体験講座は、実は文科省に評価されて、調査研究事業としてファシリテーション、コミュニケーション能力アップの調査研究事業として、300万円の予算がつきました。それはなぜだと思われますか。ボランティア体験講座って、もう世間に、日本全国いっぱいあると思います。それなのになぜ、調査研究事業として300万円予算がついたかという、これを私たちは丁寧に企画しました。「学校で先生が単位を取るのに受けて来いって言うから、高校入試に便利になるって言うから、行って来い、って先生に言われました」といってやってくる中学生や高校生、「教職の過程で単位取らなきゃいけないから」といってくる大学生と私たちはまず面談をします。150人もいますので、結構大変です。FAXや電話では受け付けません。FAXや電話がかかってきたら、「あなたがボランティアを本当にしたいのだったら、ちゃんとここに来て、あなたがやりたいことを私たちにきちんと口で伝えて、それから相談しよう」と言います。それで面談をします。そして、子どもたちが行きたいところが見えて来たら、今度はマッチングします。マッチングをするときに体を使ったワークショップをみんなでやります。ここで、子どもたちは「自分が何か?」ということを見つけてきます。絵の具やクレヨンを使って色で表現したり、歌を歌ったり、踊ったり体を使って表現することで、自分が考えていることを全部、五感を使って表現させます。そして自己開示が出来るようになった後に、団体のプレゼンテーションに来て、マッチングします。その時に、子どもたちはもう既に自己開示が出来るようになっているので、団体のところに行って「自分はこのボランティアに興味を持っているから、いついつ行ってもいいですか」みたいなことが、ちゃんと出来るようになっていきます。実際にボランティア体験をした後、振り返りの会をします。振り返りの会をやる時には、今度は自分の体験を絵日記にして書いてもらいます。文章と言葉で表現させて、ワークショップでみんなが描いたものを集めて、この中に、私達が表現したかった社会、表現したかったもの、目指したものはなんだったのかということを、概念化させます。ここから先は、コーディネーターの仕事です。それを松戸市に次世代支援育成事業としてどのように提言するかがコーディネーターの仕事です。この活動を通して青少年が、生きる意欲をどのように持ってきたかということを出して、政策に持っていくことを提言するところまでいったから、文科省は予算をつけてくれたのだと私は思っております。コーディネーターの仕事は、ひとりひとりを対象として大切にしながら、その大切にすることが社会にとって、あるいは地域にとって、影響をもたらしていきます、どのような成果を得ていきます、ということを、きちんと誰にでも分かる表現にして、政策の中に入れ込んでいくこと。これが今、私がサポートセンターでやっているコーディネーターの仕事です。

●質問タイム

Q：松戸×学生×ボランティア、というのは、松戸という地域に住む学生さんと、一般の市民のボランティアさんを対象という意味ですか？それとも学生さんを対象に、ボランティアの組織の協力でやる施設体験という意味ですか？

A：たぶんそんなに深くは考えていませんが、「レッツ体験」という学生がボランティアをするというプログラムには、ステークホルダーが4つあると考えています。1つは、業者ですね。それから、参加者の学生ですね。それから、受け入れ団体のNPO。それから、4つめが企画するサポートセンター。この四者がこの「レッツ体験」という事業のステークホルダーと考えて、今5つめに地域を入れようか入れまいかということを、議論しています。それはなぜかという、この「レッツ体験」の側面は、学生がボランティアに参加するという単純な話だけではなく、ひとつはNPOとかボランティアについて意識のあるモチベーションの高い学生を受け入れられるだけの体力を持ったNPOを育てる。目的を持った人にきちんと成果を返せるような、能力を持ったNPOを育てていくというのがひとつにはあるんです。もうひとつはさっきも言ったように松戸市が、将来松戸を担っていく世代をどのように育てていくかを考えていく、ということがあります。私たちはそれをどのように仕掛けていくか。それをボランティアというキーワードで考えていきたいと思います。そのチラシは松戸×学

生×ボランティア、「レッツ体験」と20代の若いスタッフが作ったチラシですが、そういった思いがその中に入っていたのだと思います。この絵は、不登校の女の子が、私が個人的にやっている十代の居場所のジャンク広場に遊びに来た時に描いてくれた絵をチラシにしたものです。

Q：この300万の事業支援のほかに松戸市からのお金も当然貰っていますよね。これは松戸市を通して国の方へ申請してお金を取るということですか？

A：この、ぱりとしたチラシの方が300万の研究事業で、こちらはもともとある松戸市の予算30万の事業ですね。成果を抽出して報告書を書くというところに300万予算がついているのは私が申請しました。生涯学習に強い大学と、「レッツ体験」ですと受け入れ団体になってくれている団体の人たちと、それから行政、教育委員会とか全部根回しして、実行委員会形式を作って、文科省にかけあいました。

Q：最初に申請して1回目でゲットしたとか、そういう感じですか？

A：あの、まあ向こうも可能性があると思ったら、ちょっとずついろんなこと言ってくるから、それに合わせて少しずつ少しずつ変わっていくことはありますけど、一応一回の申請です。私は民間の助成金なかなか取れなません。国の助成金は割と2、3回取ったことがあります。

Q：民間の助成金の方が難しいのですか？審査は。

A：民間の助成金はこんな「レッツ体験」みたいな成果がはっきり分からないようなものには予算がつかないんです。これ、だって何やっているか分からないじゃないですか。150人の子どもがそろそろボランティアやって、「あー楽しかった」って参加証貰って帰るだけの話なのだから。なにをやっているか分からないから、なかなか予算はつきません。

Q：最後に振り返りの会をやって、今のお話の中で、それぞれがやったことの発表の報告だけじゃなくて、どんな社会を作りたいと、その体験を通して思ったか、ってということもやるのですか？

A：そうです。

Q：それを、2時間位でやれるのですか？

A：最初のオリエンテーションで自己開示させる時に、あなたが、例えば「松戸は今どんな色ですか？」って、画用紙に色を塗らせるのですね。そうしたらみんな、灰色だとかなんか汚い色を塗ります。次に「あなたが松戸に関わったら、どんな色になりますか？」って言って聞くと、ばら色とか虹色とかすごく綺麗な色を描くのですね。そこで「あなたはそこで何を起こしたの？」というようなことを子どもたちと話し合っ、その年その年でいろんなことをします。去年は「ボランティア語大辞典」をみんなで作りしました。これはボランティアをして、一番大切だと自分が思うことばから順に、辞典を作っていきますよ、というものです。それをオリエンテーションの3時間でやります。だから子どもは、ボランティアってそういうものだ、と、導入のところで叩き込まれています。だから振り返りの会の時には今度は「本当に行ったらどうだったの？」そうすると、社会との関わりの中でボランティアがあるのだともうインプットされているので、ただ単に自分が笑顔で楽しかったっていうだけじゃないところを広げていく、子どもにこっちから働きかけていくのです。2時間で出来るかっていう話ですけど、だんだんと私たちも上手になりましたというところですよ。

Q：子どもと言いましたが、僕最初大学生だと思いましたがもっと低い学年の人も入っているのですか？

A：ごめんなさい、私がついつい、子どもって言っちゃうんです。中学生から20代、30代もたまにいますけど。指定管理業務として、松戸市からオーダーされている事業と、これが事業を拡大するために指定管理者としてのNPOが取ってきた事業です。事業の考え方が2つあります。1つは中間支援組織のココットとしての経営基盤を築き上げていくとか、社会的評価を上げていく、事業の実績を上げていく、その中で私たちコーディネーターのスキルを上げていくというのが1つあります。それから、もう1つは自分たちが思いを持ってやっていく。こんなにいいことをやっているのだからみんなにも知って欲しいといくら思っても、こんないいことをやっているのだから、みんな分かってよ！といくら声を大にしても、分かっただけない訳です。それをどのようにきちんと論理的に整理してみなさんに分かっていただけるようにしていくか、という作業をしていく。概念化する、あるいは普遍化していく作業をしていく。この2つの視点から事業を拡大していくと考えています。コーディネーターはそのように先を読みながら、コマを振っていくというのも大切なことだと思っています。

●小山さんからのコメント

〈コーディネーターが職業として社会にデビューするには〉

最後に自分がこういう仕事をしながら思うことは、官民の協働のコーディネーターがどうやって職業として確立するのか？ということです。私は、医者も昔は職業として確立しなかったと思うのです。きっと、昔は占い師と同じレベルの話だったと思うのです。医者が職業として確立するにはおそらく優秀な医者が何人も出てきて、人をたくさん助けるという事例が積み重なって、その中から、本来医者が持つべき職能というものがきちんと整理され、職能をつけるためのカリキュラムが立ち上がった。そのステップを踏んで、1つは医者という職業が確立したと思うのです。そこで、国家試験というゲートをきちんと付けて、お墨付きを付けるというふうになったと思います。コーディネーターには今はそのようなものが全然ないですね。誰がコーディネーターという肩書きを名刺に刷り込んで配っても、誰も文句を言わない世界です。だから、ひとつは医者が職業として確立したプロセスを踏んだように、コーディネーターの職業もそのようにやっていかなくていけないと思います。だから一番に私が思うことは、自分たちの行動様式とか、ものの発想の仕方とか、あるいは事例とかをきちんと積み上げて検証していくってことが、すごく大切なことだと思います。それで、そこから抽出されていく必要な能力とか、社会的にバックアップしていかなくてはいけない条件だとかを、整理していった職制として確立するのだと思うのです。今の段階ではとてもそういうレベルには達していない。じゃあ、達してないココットが実は20代の人を3人も雇っています。この人たちは一体じゃあ、先行きどうなるのか読めない職業に就かせていてあなたどうするのよ、と考えると夜、寝られなくなります。

〈事業性のあるNPOを育てる〉

今私が考えているのは、事業性のあるNPOを育てていくということだと思っています。組織の中でファンドレイジングをきちんとやっていかなくてはと思っています。単純に会員による会費制と寄付だとか考えないで、どこからどのようにお金を取ってくるかという資金繰り、組織の資金立てを、きちんと考えていく。それをまずやっていくことの出来る、NPOを育てていくことで、事業性のあるNPOが1つ育っていく。事業性のあるNPOが育つと、風が吹けば桶屋が儲かるみたいな話ですけど、お金が回るようになる。仕事が出来てくる。すると職業としてのコーディネーターが活躍する場面が出てくる、見えてくるのではないかな、と考えています。

〈コーディネーターの必要性〉

今NPO法人のココットが何をしているかですけど、行政からコーディネーターという仕事を作らせることを必死で働きかけしています。協働条例とか、協働ガイドラインとかもあちこちの自治体作っていますよね？その場面にコーディネーション機能を持った人が、専門職として付かなきゃいけない。行政の中にも、NPO側からも、企業セクターからも、ありとあらゆるところからそういう人が出てこなきゃいけない、ということを行政の中に徹底的に言い続ける。NPOではなくても、コンサルティング会社のコーディネーターでもいいと思います。行政職の中にコーディネーターを育ててもいい。とにかくいろんなバックグラウンドを持った人たちがいっぱいいろんな形でコーディネーション機能が専門的になっていく人を育てていく。それをするによってそれはどういう機能を持つかっていうことを、みんなが肌身を持って知るようになる。この人がいたら便利だと感じるようになる。そこで初めて職業としての必要性っていうことを、みんなが感じてくれるようになると思っています。今はせつせと松戸市に、「コーディネーターがいないから困っているのよ！」とことあるごとに言うことにして、報告書は何でも最後は「コーディネーターがいたらよかったね」という話にしています。全部そのように意図して刷り込んでいる。その代わり責任持ってやります。そうして職業として浮き立たせていくということを、いつも一生懸命努力しています。

〈コーディネーターという専門性〉

大切なことは自分を安く売らない。時給780円で売って、失敗したって本当に心の底から思っています。780円でこの仕事ができるんだと思われてしまった。それを払拭させるのは、本当に大変なことです。1回できてしまった事実を消すことはとても大変です。コーディネーターという専門性についた値段が、地域にちゃんとどのように返されていくかとか、組織の中でどんなふうに回されているかということが、皆さんによく分かるように透明性を持って情報公開をしていく。こういういったこと

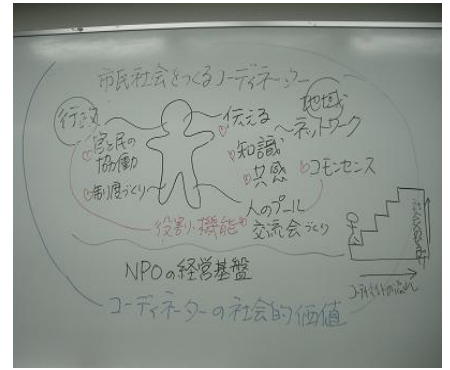
をきちんとやることはすごく大切なことだと思います。まあでも、どんなに高く売っても買ってくれませんけどね。

Ⅳ. セッション3. 提案作成「私たちの考えるコーディネーターの定義と社会的価値」

●ワーク1. コーディネーターの課題を考える

出された課題

- ・ まちづくり NPO 経営基盤をつくるにはどうしたらいいか。
- ・ 官と民の協働コーディネーターはどうしたら仕事として成り立つか。
- ・ 協働のまちづくりを協働で進めるために、市は地域市民や企業と一緒に制度をつくる。
- ・ コーディネーターは関わった地域や活動に関わり続ける必要があるのだろうか。
- ・ 地域の人に安全について正しい知識を持ってもらうこと。
- ・ ボランティア活動している人の思いをどう広く共感してもらえるように打ち出せるか。
- ・ 地域づくりの講座などに参加する人を増やすための取り組み。
- ・ 協働の成果には内部の成果と外部の評価が必要。
- ・ コーディネートをすすめるために、どこに、どんな要素があるかを知ることが必要。
- ・ キーパーソンがいないと困る。責任を持つ核がいないと動かない。
- ・ 人の集まりは様々な要因で変化していくがこれに対応するにはどうするか。
- ・ みんなの力が出てくるような考え方や・姿勢を共有すること。
- ・ 関わった人みんなが自分で行き方や環境のことを考えて行動できるようにすることが大切。
- ・ つながった人たちのネットワークをより強くしていくことが必要。



●ワーク2. 「これがみんなが考えるコーディネーターだ！」

参加者の経験から出された考えやゲストのお話から、コーディネーターの中に新しい価値を生み出す触媒役となりコンセンサスを創出しそれを継続していく機能があるという認識が生まれました。このことをふまえ、①コーディネーターとは〇〇だ ②そのためには〇〇が必要である、という意見をだしあい、社会に向けてどのような提案ができるかを話し合いました。二つのグループに分かれ、これをメンバーで共有しました。

〈コーディネーターとは〇〇だ。そのためには〇〇が必要である〉

- ・ コーディネーターとは個人の思いを社会に表現するひとである。そのためには職業化が必要である。
- ・ コーディネーターとは編集力によって動きを創り出すひとである。そのためには、一人ひとりが文脈を読み、創り出す創造力を持つことだ。
- ・ コーディネーターとは料理人だ。そのためにはセンスが必要である。
- ・ コーディネーターとはコーディネートすることでみんなのコーディネート力を引き出す人。
- ・ コーディネーターとはカスミ（霞：夢・思い・これから生まれるもの）を売る人だ！そのためにはカスミを買わせるために実体化することが必要
- ・ コーディネーターとは料理空間だ。そのためには素材、調味料、味付け、いれもの、味を知りシェフが創作しなければならない。

自分の好みの味や料理方法と自分以外の公の評価を理解することが必要である。お店の社会的位置づけを考えて人気店として（一般化）提供！！

- ・ コーディネーターは二人を同時にその気にさせる人、ファシリテーター。そのためには理想を語れること（コーヒーの味）、二人の好みを知っていること（立場など）、その人自身理想をもち、信頼されていること
- ・ コーディネーターとは、凸凹を洗練させる人。そのためには経験と知識と人のつながり（情報を持っている人・組織）が必要
- ・ コーディネーターはすきまをうめて社会をつくりなおす役割（編集力、成果を出す、センス、交渉力、盾になるなど）である。

そのためにはどこにすきまがあるのかを見つける。そのための素材を見つけ、いろいろなうめ方を想像しながらうめるプロセスをいろんな人とつくっていく。そして食べていかなければならない。

- ・コーディネーターはいろいろな人の思いや行動をある方向性にまとめ、次の展開を示す人、人たちのこと。
- ・コーディネーターとは持続可能な地球社会をつくる人である。そのためには必要な資源を確保すること。国内外・あらゆる境界を超えて協働することも必要。
- ・コーディネーターとは、自己決定力を奪われに苦しんでいる人がいなくなる社会をつくる人である。そのためには、お互いに助け合うことできるコーディネーターの存在の認識が必要。

〈グループ発表「コーディネーターとはこういうものだ！」〉

「免許皆伝！ガイドブック」作成グループ

市民社会を創造するためにコーディネーターをとして働こうとする人に役立つようなものが必要だということで、小山さんのお話にあったプロセスを辿って、ガイドブックをつくることにしました。構想の段階で時間切れでしたので継続して作成編集作業をおこない年内完成を目指そうということになりました。

【コーディネーターガイドブック（発行：コーディネーターズファンド）】

まえがき：この本は世のため人のため幸せな社会をつくるためにがんばっている全ての人に捧げる手順書である

第1章：個人のコーディネートプロセス

- 1) 想いを聞き取る 2) ニーズの明確化・・・

ゴール) 個人の主体性をもち自立して幸せに生きる

第2章：団体内のコーディネートプロセス

- 1) 現状把握と評価

- 2) ミッションとプロセスの明確化

～マーケティング（社会の中でのニーズを探る）～企画とプレゼン

- 3) 団体内での情報共有

ゴール) メンバーが力を発揮し、団体が元気になる

第3章 団体間の団体内のコーディネートプロセス

- 1) 各団体の強み弱み分析 ゴール：1+1=10（社会貢献）

第4章：異セクター間のコーディネートプロセス

ゴール：政策提言！！新しい価値観の創造

第5章：コーディネートプロセスを支えるマネジメント

- 1) スキルの確立 2) 実績評価

ゴール) コーディネーターの職能化 目指そう食べられるコーディネーター！！



「コーディネーターの存在を顕在化させる！グループ」

〈市民社会の構成図〉

コーディネーターにどんな存在かということを様々な角度から議論しました。そこで、出てきた意見をまとめて図式化しました。真ん中に、社会の資源や問題、価値などの情報があり、その情報を引き出し顕在化させることを促進する役割としてファシリテーターがいます。ファシリテーターが引き出したものから問題を解決するために必要な人々をつなぐ役割がコーディネーターです。このことを企画立案しや資金やスタッフなどを調達して実現に導く役割を担うプロデューサーがいます。この全体の調和により市民社会が実現します。

〈対等性、相互理解による合意形成〉

社会を構成するものとして、市民、NPO、行政、専門家、情報などのセクターがあります。コーディネーターとこの各セクターとの間には相互の働きかけが必要です。コーディネーターは自分が行うコーディネーションとはどのようなものか、どのよ

うな力を発揮でき何を実現するのかということを示します。それに対して、各セクターはコーディネーターに対して、どのような役割や機能を期待しているか、そのセクターの持っている文化や状況はどうなっているかなどをコーディネーターに伝えます。こうしてお互いのことをよく理解しあうことが大切です。こうしてコーディネーターは多様で多元な価値観や思考法や言語などを翻訳し、情報を整理し、わかりやすく共通に理解できるものを提示します。コーディネーターによって、異セクターは共通の言葉で対等に議論することができます。それによって合意形成が促進され協働による市民社会が成立します。

〈感謝のフィードバックで社会認知を図ろう〉

コーディネーターは今までの社会の枠組みの中だけでは解決できない問題を変えていくための仕組みの核として位置づけられます。今までも困難な状況に希望の兆しを感じられるとき、その陰にはコーディネーターの働きがありました。しかしコーディネーターは表にでないため、実際に関与していない人たち、一般社会にはその存在は知られることがありません。これもコーディネーターが社会的に認知されない原因のひとつとなっています。そこで、成果や評価の中にコーディネーターの存在についての項目を設け、コーディネーターがいてよかったのであれば、感謝の意を、外部に向けても表現していく機会を増やしていきましょう。コーディネーターさんがいてよかった！コーディネーターさんありがとう！というフレーズを目に、耳にすることで、社会の認知が深まることでしょう。



【最後に～ゲストのコメント】

発表であったコーディネーターガイドブックは役割や機能をはっきりさせていく上で、面白い取り組みだと思います。ワーキンググループなどをつくり、ぜひ完成し出版させるといい。このようにコーディネーター同士が集まる場をつくり、お互いに支えあう場ができることも大切です。今回のような取り組みは 1 回で終わらせず、今後も継続しておこなっていき、東京と名古屋の地域間でも交流を促進し連携を図り、コーディネーターの社会的地位を確立させていきましょう。

担当者所見

コーディネートに特化して情報共有・意見交換をし、かなり深い気づきがあったように思う。普段忙しさの中で、役割や社会的意義を見失いがちなコーディネーターにとって、ある種同じような状況にある人たち集まり、課題を共有し、普遍化する作業は不可欠だと感じた。またそのことを社会に提示する動きの必要性を再確認した。EPO 中部のような組織がこのような動きをリーディングする役割をもつと思う。いかに継続させていくかが一番の課題であるが、今回の気づきや成果を活かした継続できるしくみを検討していきたい。

●持続可能な社会な社会をつくる 若手の「志」に学ぶ vol.2

第2回 【ボランティアを通して地域を見る！―角谷文子さんに聞く―】

■概要

日時	2007 年 7 月 1 3 日（金） 19:00～20:45
会場	環境省中部環境パートナーシップオフィス
ゲスト	角谷 文子（NPO 法人ボラみみより情報局事務局）
聞き手	岩尾 憲治（NPO 法人ボランタリーネイバーズ）
参加者数	12 名

■ねらいと全体の流れ

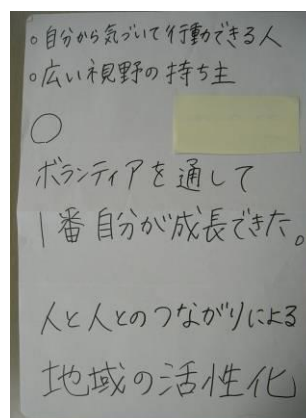
『自分は無力じゃない。動くことで社会が変わっていく可能性がある。一人ひとりが自主的に行動していく、参加型の社会にしていきたい。そのためにも、一人ひとりが動いていけることを広めたい。』そのことを伝えるために、前半に、まず参加者がイメージする「ボランティア」について話していただき、その後ゲストの角谷文子さんから、HISTORY（歴史）やその時々思い、角谷さんの考える「ボランティア」を同トークセッションを行った。後半は、まず角谷さんに志と角谷さんの考える『ボランティア』が広まった社会を伺い、その後に参加者のみなさんの考える理想の社会像を話していただいた。

■ワーク①「皆さんがイメージする『ボランティア』ってどんな人？」*****

『ボランティア』について見つめなおすため、角谷さんの考える『ボランティア』を聞く前に、参加者自身『ボランティア』をどう捉えているかを振り返った。

<進め方>

- ①A3 の紙の 3 分の 1 に自分がイメージする『ボランティア』を書く。
- ②自己紹介を含め、イメージするボランティアを発表する。



<参加者のイメージする『ボランティア』>

- ・ 自分から気づいて行動できる人。広い視野の持ち主。
- ・ 出会った方：定年退職後時間があり、その時間を自分の時間というよりも社会とつながる時間として使いたいという思いからボランティアをしている。
- ・ 「何でもやる」意欲のある人。
- ・ 出会った方：「自分のまちの稲作が有機米になったらいい」との思いから、手作業で有機米づくりを始めた方。
- ・ 出会った方：自分の得意な“歌”で老人を元気付けたいという思いから、老人施設を周って歌っている方。
- ・ 人とのつながりを大切に人。つながりをのばせる人。（8 年前）

- ・ 人、セクターを繋ぐ人
- ・ 自分の成長
- ・ 時間のある方がやる
- ・ アフリカなどの飢餓に取り組む
- ・ 公園の清掃など
- ・ 自分だけでなく周りが見える
- ・ ボランティアをやったことない。自分は楽しい事をしている。ボランティアは見返りを求めるイメージ。「ボランティア」という言葉に抵抗がある。
- ・ 活動の目的に気づき、動き出している方。

■角谷さんトークセッション①「角谷さんの HISTORY、ボランティア感」*****

<大学生時代>

大学は外国語大学で、個性的な友人が多かったのですが、「外国が好き」「語学が学びたい」など方向性が似ている人の中で大学生活を送っていると、いろんなことが学べないのじゃないかという危機感を覚えました。

JICA で1ヶ月間日本に途上国の方が来る制度があり、その中で1日だけ観光するボランティアを募集していて、そこに友達に誘われ行ってみたんですね。ボランティアをしたいという思いではなくて、なんだか面白そうだったのと、アフリカ、中南米など普通の生活で出会えない人たちに会えるとことに興味を抱いて参加しました。実際にパプアニューギニア、ボニューアーズ、ナミビア、ポリビアなどいろいろな世界の人と交流することができたのですが、ある時ナミビアの研修生に言われたんです。「あなた方は私たちの国にもっと援助すべきだ」と。当時国際協力に興味があり勉強していたので、面と向かって言われたときに何も言えなくて、すごくショックだったんですね。それを言われたことに対するショックと、すぐに返事が言えないという2つのショックでした。日本も援助してるし、ODA もやっているし、日本だって景気悪いし、といういい訳のような言葉は思い浮かんだんですけど、面と向かって切実に言われて、何も返すことができなかったのです。このことが、これまで歩んできた原点になっています。

面白いから始めたボランティアですが、自分ができることをできる範囲で大学時代から企業時代も継続してやっていました。その中で大学3年生のときに蜜にボランティア活動をしたいなと思って調べ始めました。語学を学んでいたことと国際交流に興味があったことから、国際交流で探して京都 YMCA を見つけました。実はもう一つ、自分のやりたいことにもっと近い団体があったんですけど、私の家から行くのに3回乗り返して1時間半かかるんです。ボランティアをするには継続したいという思いがあったので、すごく興味があるけど遠い団体とちょっと興味があって近い団体ということで、私は京都 YMCA を選んでボランティアをはじめました。

数ヶ月後の欠席したミーティングでなぜか副代表という立場に決まっていたという恐ろしい事態で、ボランティアコーディネートをせざるを得ない状況になりました。京都 YMCA のボランティアは、国際ボランティアリーダー会と言って、京都 YMCA に併設である日本語学校に在籍している韓国人や中国人の留学生との交流プログラムだったり、募金のプログラムだったり、いろいろな企画を自分たちで企画して実施していく YMCA の中にあるボランティアグループでした。そこでボランティアコーディネートをしたんですけど正直大変でした。

毎週金曜日のミーティングに向け学生や社会人のメンバーとがががが連絡をとり、もう一人の副代表とミーティングのためのミーティングをやっていました。募金啓発のポスターを作った時には2週間毎日通っていました。後から思うと、ここでの経験が後々この仕事も含め役になったのかなあという気がします。

大学時代 JICA のボランティアをしながら京都 YMCA のボランティアに関わることで、自分が知らなかった世界を多く知ることができました。もともと国際協力に興味があったんですが、どちらかというとテレビや本だけの知識で、実際に会ったりすることが普通の生活ではなかったんです。ボランティアを通じていろいろな人たちに会うことで、多様な価値観や文化をほんとに体感することができました。

大学 3,4 年の時にもう一つ「国連大学グローバルセミナー」に参加しました。これはグローバル化や地球規模の問題に対して話し合う2泊3日の合宿なんですけど、さまざまな分野を学んでいる仲間と出会うことで、一つの物事に対して自分の考えてほんとにちっぽけなもので、立場が違うだけでいろんな感じ方、価値観があるんだなということを発見しました。

<企業時代>

地元は碧南ですが、就職は横浜でしました。企業で3年弱働いたんですけど、仕事が非常にハードで終電ばかりの毎日を送っていました。終電なのに仕事が終わらない状態で、家で仕事をしたり、週末も仕事をする日々が3年弱続きました。けれども、大学時代ボランティアをされていて、楽しいこと、いろんな人と出会えること、いろんなことが知れるということを分かっていたので、入社して半年くらいしたらボランティアしたいと思いました。ただ、横浜にまったく知り合いがいなかったんで、どこでボランティアを探したらよいかわからなかったんですね。でもし



たいな、したいなと思っていて、たまたま JICA 横浜に行ったときに神奈川開発教育セミナーのチラシを見て、面白そうだなと思い参加したところ、在日外国人の子どもたちと日本人の子どもたちがキャンプで交流する企画を主にやっているエスニックジャパンという団体に出会うことができました。当時私がボランティアをやりたいと思ったのは、会社だけでは嫌だとか、会社とは違う居場所がほしいなどネガティブな思いもあったんですけどね。

この団体は、在日外国人と呼ばれる外国籍のメンバーが半数、日本人が半数いる団体で、ボランティアをしたいと思ったというよりも、巻き込まれたという方が正解です。どちらかというと活動内容よりもそこで活動している人に興味を持ち、1回しか行っていないのにメンバーの2次会に呼ばれて行きました。そのようにしてエスニックジャパンという団体に関わるようになっていきました。

それまで国際協力ということで勉強してきたんですけど、日本にある国際協力、在日外国人の問題、難民の問題は全くといっていいほど知らず、興味も正直なくて、在日外国人がいるのは知っていても、実態はどうかは知りませんでした。私が友達として彼らと付き合うようになったことと、夏に行った外国籍と日本の子どもたち向けのキャンプの中にクルド人の難民の兄弟がいたことで、「日本にも難民がいるんだ」ということを始めて知りました。それは私にとってほんとに大きな出来事でした。

キャンプで出会ったクルド人の難民は、カザンゲランケというんですけども、3年前の夏に国連大学前で72日間の座り込みをして難民認定を求めています。72日間暑い中座り込みをしたけど家族の要求が通らなくて、結果的に2005年1月19日に、友人がトルコに強制送還されてしまったんです。実はボラみみの面接日だったんですが、面接の前に数時間ネットカフェで泣きながら情報収集をしていました。そんな形で、難民が日本にいることを始めて知って、日本の抱えている問題、冷たい状況を知ることができました。

ボランティアは楽しみながらやっていたんですけど、それ以外にも国際協力の講座やインディアリテラシーの講座を受けることで、広報に興味湧いたんですね。もっとみんなに広く伝えるいい方法はないだろうか、もっと共感してもらえる広報をしたらもっと国際協力や他の問題にも興味をもってもらえるのではないかと思い、広報がしたくなりました。

<NPO 時代>

広報の仕事がしたいと思ってネットや友人を頼っていろいろ探しました。東京にいようか、愛知に戻ろうか悩んでいましたが、祖母の体調が思わしくないことなどがあって愛知に帰ることにしました。実は愛知に帰ってくるまでボラみみを知らなかったんです。ボランティア情報誌があるというのはすごいと思ったんですけど、ボラみみの存在は地元に戻ってから知りました。ではなんで採用されたのかとか、ボラみみを知ったのかと聞かれると思うんですけど、会社を辞めたときに、今、愛知でも活躍しているコミュニティーユースバンク MOMO の木村さんとたまたま出あって、「絶対ピッタリだからおいでよ」と言われて行ったところ、当時なごや NPO ボランティアセンターの職員をしていた大江さんと会いまして、名古屋で就職活動をしようと思っていることを伝えました。その次の日に電話がかかってきて、ボラみみというところが職員を募集しているよ、と言われたんで

すね。「ボラみみて何？」って思いながら調べていたんですけど、ちょうど同時期に別の友人からもボラみみの就職情報が飛んできて、2人から来るのは何か縁があるのかなと思いました。ボランティアって面白そう、広報の仕事できるんだあ、営業の経験を活かせるんだと思ったんです。けれどもそこに書いてある面接日が用事があったんですね。だめもとで「違う日だったら面接受けれます」とメールを送ったんですね。そしたら幸い調整いただけて、面接を受けてボラみみでめでたく働くことになったんです。

けれども、今まで企業で働いていたときは営業職でしたので、電話がじゃんじゃんになって、フロアも広くてというのが当たり前だったんですけども、ボラみみは、NPO プラザなごやという古い雑居ビルの中に事務所を構えていて、その小ささにびっくりしました。ここでやっていけるかなと最初にほんとに不安になりました。勤務初日はそのように職場の状況を見てまずびっくりして、2日目に一人にされたんですね。私の前任者は週に3、4日の勤務だったので、彼女も上司もいなくて一人にされたんです。その時ファックスの用紙が切れたんですね。どこにあるかも分からずアタフタしていたら、たまたまベテランのボランティアスタッフが来て一緒に探して下さってめでたく見つかったんですけど、ほんとに最初の一週間、私はここで働き続けるんだろうかと思うくらい不安な日々でした。

電話も全然ならないし、静かだし、人も来ないことがあるし、ほんとに不安だったんですけど、幸いなことに、ボラみみではボランティアスタッフが80名いて、いろんな人が毎日事務所で作業したり、会議にいられているので、徐々にギャップを自分の中で埋めながら仕事をしました。

ボラみみにいるボランティアスタッフは高校生から70歳の方までいるんですね。思いも、ボランティアしたきっかけも、ボラみみに対する熱意もバラバラという中で、コーディネートをしながらか業務をしていかなければいけないので、難しさを実感すると共に、自分の未熟さを日々感じています。

今だから言える話ですが、頻繁に来てくれるスタッフが「仕事ありますか？」と聞いてくれるんですね。ある時はいいんですが、「ない」というのがどうしても言えなくて、ない時はスタッフに渡す仕事を作ったりして、自分がどんどん苦しくなるといいう状況を何回か繰り返していました。あと、「コミュニケーションは大切だ」とってどの本にも書いてあるんですけど、コミュニケーションを取らなきゃと思って忙しい時は忙しさで取れないこともしばしばありました。いらっしゃった方が上司と話しているときは仕事をしよう、話を聞くとときはしっかり聞こう、聞けないときは後にしてちゃんと断ろうということなどを勝手にルールを決めて心がけるようにしたら、多少は状況はよくなった感じでした。

ボラみみを通じて、毎日いろんなボランティア情報を見ているんですけども、自分がいかに視野が狭かったかということを感じさせられました。国際という分野が一番興味があるので、なぜボラみみにいるのかとよく聞かれるんですが、国際分野を歩ひいた目で、客観的なところで見なかったのもあるんですね。それまでは海外にばかり目が向いていて、日本や地域のことも振り返らない状況でしたが、ボラみみを始めてから、地域に興味湧いたというか、地域と向き合うようになりました。

岩尾さん：最初にみなさんにイメージするボランティアを話していただきましたが、角谷さんがイメージするボランティアとは？

ボランティア活動により、さまざまな立場や職種や年齢の人と出会うことができました。普段出会えない人と出会えるというのが大きな魅力なのかなと思います。

あともう一つは、結果的になんですけども、ボランティアを通じて、自分の知らなかった社会問題を知ることができたことが挙げられます。例えばテレビや本や新聞で読んだ情報ではなくて、実体験として知ることができました。例えば地域の問題、難民の問題、途上国の問題などの社会問題を解決しようとしてやってきたことは一度もないんですけども、結果的に社会問題、地域を知ることができたということがあげれると思います。



＜角谷さんのボランティア感（「すみボラ」と命名）＞

- ・ 普段出会えない人と出会える。
- ・ ボランティアを通じて、地域などの社会問題に気づいた。

- ＜角谷さんのボランティア感（「すみボラ」と命名）＞
- ・ 普段出会えない人と出会える。
 - ・ ボランティアを通じて、地域などの社会問題に気づいた。

■ 質疑應答 * * * * *

Q:大学を卒業してどういう企業に入りましたか？

A:半導体の商社に入りました。

Q:ボラみみは毎月5日締め切りで発効日はいつ？

A:毎月 1 日です。毎月 25 日に発送作業を行い、お店や図書館や公共施設などに配達と郵送させていただいています。

Q:フリーペーパーの費用検出は？

A: ボラみみは無料で配付しています。費用については非常に苦しいです。現在の収入で挙げさせていただきますと、まずなごや NPO ボランティアセンターの管理運営を協働で行っています。また、ボラみみの中の広告も一つの収入となっています。あと、会員寄付も常に募集しています。賛同していただいた方々から会費や寄付を頂いて収入としています。そのほかには、以前ですと Yahoo(株)と提携して情報を有償で提供させていただいたり、講演や講師をさせていただいた収入があります。

Q:エスニックジャパンのような在日外国人のための団体は愛知にありますか？

A:私を知っていることが全てではありませんが、2つ紹介させていただきます。1つ目は多文化共生サークル smile で、在日外国人の方とイベントを開いたり、ゲストとしてお招きして講座を開いたりしています。外国人医療センターは、外国人のための無料医療相談会を月に1回行っています。エスニックジャパンでの活動と全く同じ活動は愛知では出会っていません。在日外国人向けの日本語教室の団体は多くあると思います。

Q:さまざまな社会問題をボラみみで伝えていると思いますが、伝わっているという手ごたえはありますか？

A: 私たちはボランティアを知って行動してほしいという思いで、ポラミみを毎月 1 万部発行して 680 箇所まで現在配付しています。ポラミみを見て団体に問い合わせたり、ボランティアに参加した人たちであったりということを考えていますと、手ごたえは感じています。もちろんすべての団体に問い合わせがあって参加者数があるわけではないですけど、多いところだと 20 名以上の問い合わせや、10 名以上の参加があることを、掲載団体へのアンケートから知ることができます。ただ、まだまだボランティアが不足しているという声を聞きますので、より読者が見やすいような、ボランティアしたい人とボランティアを必要としている団体をつなげるような冊子作りであったり、団体としての活動を行っていかねばならないと感じています。

Q:変な人、わがままな人がボランティアに多くないですか？どうしていますか？

A: 変な人は主観によると思うのでいろいろあると思うのですが、自己主張が強すぎる人が来たことはあります。その時は丁寧にお願いさせていただきました。人が入ってくることによって和が乱れたり、活動がうまくいかなかったりということが少なからずあると思います。とことんコミュニケーションして、それでもダメならお断りしてもいいのではないかなと思います。

Q:コーディネートの難しさについてもう少し具体的に。

A:職員 2 名でボランティアスタッフ 80 名で、スタッフすべてをコーディネートすることはあきらめています。ボランティアスタッフは 4 人から 10 人ほどのチームで動いているんですけども、自分でやった方が手間もなく早くできることもあるし、話好きなスタッフがいて、ずっと聞きたいんですけど、仕事が進まないということがあります。コミュニケーションをとるのは大切だと言うところで日々悩んでいます。また、80 人いると気が合わない人もいるので、そこをコーディネートするのが難しいと感じています。

■角谷さんトークセッション②「角谷さんの描く社会像」*****

岩尾さん：いろんなボランティアがあるので、角谷さんのボランティア像・ボランティア感を「すみボラ」と名付けさせていた
だいて、みなさんの持っているものと、「すみボラ」と比較しながら話を聞いていただければと思います。

<今の志キーワード>

新事業の立ち上げ 私の団体で今月から、個人ボランティアのマッチングシステムという、インターネット上で個人と団体を繋ぐという事業を始めるんですけど、いかにスムーズに多くの人を巻き込んでやるかが一つの志かなと思っています。多くの人にボランティア活動を始めきっかけができればいいなと思っています。

ボランティアを身近に 仕事でもそうですけど、個人としての思いとしてもです。ボランティアをすることで多くの人と出会えたと思うし、ボランティアをすることで知った社会問題や地域の問題がすごく自分を生長させてくれていると思うので、どんどんボランティアを身近にしていきたいなと思っています。

広報を極める 完全に個人的なこととして、自分のライフワークとしてずっと広報に携わっていきたいと思っています。それは自分の「知ることによって行動できた」という体験が自分の中で貴重な体験として多くありますので、自分は一生広報をやりたいと思っています。

知る⇒行動する⇒伝える これが一番言いたいことです。問題って知らないと、考えたり行動したりできないと思うんですね。まずは知ることだと思っているので、私は周りの人たちに発信することをもっとやりたいと思っています。エスニックジャパンで、自分が難民の問題を知ったことで、友達が強制送還をされそうになったときに、署名活動という一つの行動をして、どんどん周りに伝えました。そういうサイクルを自分でもっと早く回せるような人になりたいというのが、今一番強く思っている私の志になります。

<私のモットー>

出会いは必然 すごい勝手ですが出会った人すべて運命の人と思っているんですね。今この場ににいるのも出会いの連続でいるんですけど、それを偶然と思うのではなくて、必然と思うことで、次の出会いや出会いの連鎖が続いていくのではないかと思います。

ボランティアは自然体 京都 YMCA の苦い経験で、義務感でやらなきゃと思ってやっていると辛くなってきて、でもやらなきゃとなると悪循環に陥ってくと思うので、やっぱり自然体で楽しく自分ができるときにできる範囲でやっていくことが必要じゃないのかなと思います。

足元に種を蒔き続ける 今ボラみみの職員として、事務と広告営業とボランティアコーディネートと雑務をやっているんですけど、広告営業に関していうと、いつも新規開拓をしていないと止まってしまうんですね。出会いでもそうですけど、自分から探しにいったり出会いの種を探していかないと止まってしまうと思うので、足元に種を蒔き続けるということを書きました。

I'm choosing everything 「今この場ににいるのはすべて自分で選んでいるんだよ」ということで、自分のした選択に責任を持ちなさいということなんですね。いろんな選択を経て今ここにいるんですけども、自分のした選択に常に責任を持ちたいなと思います。どんな辛い状況になっても自分のした選択なんだからなんとか乗り越えていかないといけないんだなと思ひ出させてくれる言葉です。

未来は分からないからこそ、価値がある 高校受験の時に塾の先生に言われた言葉で、「もし未来が見えて合格していることが見えたら勉強する？」と聞かれ、たぶん勉強しないと思ったんですね。「じゃあ逆にもし未来が見えて不合格だったら勉強する？」と聞かれ、受からないなら勉強しないと思ったんですね。「未来は分からないからこそ価値があるんだし、だから今がんばらなきゃダメだよ」というメッセージだったんですけども、私はいつも辛いとき、この言葉を自分のモットーとして胸に抱いて前に進むようにしています。

岩尾さん：すみボラが広がった後、目指している社会、どんなものを目指しているのかをお聞きたいと思います。

ボランティアは地域や社会を変えることができる可能性があると思っています。友人が迫害を受けていた国に強制送還をされるかもしれないとなったときに、メールや電話等で必死に署名活動をしました。その時「自分は無力じゃない」と強く思ったんですね。それは間違いかもしれないけども、自分が無力だと思った瞬間に動けなくなってしまうと思ったので、自分は無力じゃなくて、微力なんだ。ほんとにささえな小さな力かもしれないけど、自分が動くことで何か変わるかもしれないと強く思いまして、必死で署名活動を行いました。結果的に友人は強制送還されてしまったんですが、家族は強制送還されずに済みました。私

ができたことはささいなことだったんですけど、それがいっぱい集まれば、社会や地域を変えることができるのではないかと思います。当然ボランティアだけでなく、他のことが地域や社会を変えることも多々あると思っており、ボランティアは社会や地域を変える力を持っているということと思っています。

＜角谷さんの描く社会像＞

- ・自分は無力じゃない。微力だんだ。⇒一人ひとは微力でも集まれば社会をかえられるかも！

■ワーク②『ボランティア』が広がった社会って？ ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「すみボラ」が広がったらどんな社会になるかについて、ここのボランティア像と合わせ考えました。

＜進め方＞

- ① 「すみボラ」に共感する方は、その理由とそれが広がったらどうなるかを書く。「すみボラ」とイメージが違う場合は、違う理由と、自分がイメージするボランティアが広がったらどうなるかを書く。
- ② 書いたことを発表する。

＜参加者のイメージする『ボランティア』が広がった社会＞

	理由	イメージする社会像
「すみボラ」に共感	ボランティアを通して1番自分が成長できた。	人と人とのつながりによる地域の活性化
	もう一つの世界を知り、お互いを認め合える	
	微力+微力+微力+… ⇒無限の可能性（つながりの可能性）	お金がなくなる社会になる…かも？
	実際に社会がそのように変わっているから。	苦しんでいる人が少なくなる。
	「すみボラ」で同った「いろんな人との出会いがある」という意見にも「社会問題にも目の向くようになった」という意見にも同感でした。	普段は違う所属で全く業種の違う仕事に就いていても、ボランティアがいききっかけになるような気がするからです。
	自分は無力でなく微力。有害物質の害、誤解、偏見を知ってしまったら、黙っていられなくなった。知ることの大切さ。	環境が良くなる。健康になる。⇒世の中も人も善くするネットワークができる
	「無力でなく微力」はいい言葉だ。⇒私のモットー入り決定。知ることから全て始まる。ボランティアだけではないと思うが。	
	活動が楽しい。最新、ナマの情報GET	豊かになる。“個人？”“社会？”
	① 広報の価値。＜コミュニケーション＞ ② 未知への興味。＜仮説の楽しみ＞ ③ 先ず動く。変化が大きなムーブメントに。	知恵が集まり、大きな力に。 イチローに負けない事ができる。
「すみボラ」とは違う風に考えて	私は何かを変えるというような事でなく、みんなの“心”が“豊か”になれば良い♪似ているかもしれないけど、もっと“ゆるやか”なイメージがある	・居場所が探さなくても有る。 ・みんながみんなを知っている“まち” ・したい事が出来る。
	ボランティアを通じて地域などの社会問題に気づく人が増えたら、ボランティアの活動時間だけでなく、普段の生活でも行動が変わってくると思う。またその人が周りの人に話をすれば、ボランティアと名前が付かなくても周りの人の行動も変わると思う。	
	① 発明っぽい行動がほしい。 ② 対人関係なくても、部屋で自分だけでも楽しめる。	若い人は何を考えているか？



■まとめ*****

角谷さん：

発表していただいた中にあったんですけど、ボランティアという言葉がなくても何かに気づけば行動につながる、本当にその通りだと思うんですね。私がほんとの理想だと思うのは、ボランティアという言葉がなくなってもお互いに助け合うのが当たり前の自然の状態で社会が回っていくというのが、持続可能な社会だと思います。私は自分の経験からボランティアという言葉にこだわっていますが、ボランティアという言葉でなくても自分が気づいてやっていることが、一人ひとりの力が小さくても、よりよい社会や地域を作っていくんじゃないかと思っています。

<今後の展望>

事務所から現場へ事務作業が多く、なかなか外出できないのが現状ですが、団体とFACE TO FACEでコミュニケーションをとっていきたいという思いと、今後は外へ出て行くぞという宣言でもあるんです。

ボランティアコーディネートを含んだマネジメント力のアップいろんなマネジメントを求められる立場になるので、団体の運営がもっとスムーズに行くようにしたいと思います。

今日の私の話がみなさんの生活で知ること意識したり、ボランティアという言葉に敏感になっていただいたり、自分の力は無力じゃないということを感じていただければほんとにうれしく感じます。今日は本当にありがとうございました。

岩尾さん：

意見の中に、ボランティアでいいことやっていますというのが嫌だということや、自然体という言葉も出てきました。私も他の人にどういう形で言われようといいかなと思っています。自分を中心に考えながら社会のためにもなるといいなと、それこそ続けたいと難しいと思いますので、気軽にやっていきたい。今は仮にボランティアという言葉をつけて表現していますが、そういうのが広がれば、特段ボランティアと言わなくてもいい社会になるんじゃないかな、と講座を通して考えました。今日は本当にありがとうございました。

■所感

ボランティアは、時間のある方がやるイメージであったが、角谷さんの話を聞く中で、ボランティアも社会を変えていく可能性があるということを感じた。ボランティアでなくても会社の中でもどんな立場でも、自分がこういう風だったらいいなという社会を描きながら、進めていくことができるのではないかなと思う。また、他の参加者がイメージされた社会像を聞き、自分の社会像を振り返ることができた。それぞれの社会像を大切にしながら取り組みを進めることや、他の方と共有することも大切だと感じた。

●ユニー(株)提供 お店探検隊インタープリター養成講座(全5回)～ショッピングセンターでの環境学習実践～

企画・運営 なごや環境大学実行委員会 環境省中部環境パートナーシップオフィス

第2回 【フィールド学習】ショッピングセンターでの環境活動を知る～生ごみ堆肥場と店舗の見学～

日 時：2007年7月14日(土) 8:30-17:00

場 所：酵素の里・アピタ松阪三雲店

参加者：受講者15名中10名(一人欠席)(三人受講キャンセル)

ゲスト：百瀬則子さん(ユニー(株)環境部長)、
片野 宣之さん・中西あかねさん((有)三功)、
加藤美奈さん・林由香さん((株)ラグーン)

【スケジュール】

＊オリエンテーション

今日の目的説明

熊沢 豊(なごや環境大学)

＊今講座の説明

新海洋子(EPO 中部)

＊ユニーの取り組みと訪問先企業の紹介

ユニー(株)環境部長 百瀬則子さん

＊ミニレクチャー『環境学習プログラムのツールをつくるノウハウ』

有限会社プランニングオフィス・ラグーン 加藤美奈さん 林由香さん

＊酵素の里

＊生ごみ堆肥づくり等の現場見学

説明 ユニー(株)環境部長 百瀬則子さん

酵素の里(生ごみからの堆肥づくり)

有限会社三功 中西あかねさん 片野 宣之さん

＊昼食(生ごみ堆肥で育てた野菜を食べよう)

＊アピタ松阪三雲店

お店での環境への取り組み現場見学

説明 ユニー(株)環境部長 百瀬則子さん

アピタ松阪三雲店 副店長 さん

＊ふりかえり

【講座の様子】

第2回目の目的は「現場をみる」。より伝わり易い環境学習プログラムをつくるため、ユニー店舗で出されている生ごみの堆肥システムの見学に出かけました。まずはバス移動の際に、ミニレクチャー『環境学習プログラムのツールをつくるノウハウ』を実施。(有)プランニングオフィス・ラグーンのスタッフが、ユニー(株)の依頼を受け、環境教育に取り組み始めた経緯から、環境学習で工夫していること等をお話いただきました。

ラグーンでは、ユニーの環境取り組みや環境学習への思いを「可視化」し、広く一般の方に伝わるよう取り組んでいます。

参加者への「環境教育講座の依頼があったら何をする?」の質問に、「ストーリーを考える」「対象や目的を依頼主に確認する」「一緒に取り組めることを考える」などの意見がでました。大切なことは、まず対象、場所、目的等を聞くことから始め、次に自分たちができること、能力を伝える、つまりお互いを知り合うことから始めることだと話されました。

そして気をつけることとしては、台風の際のリスク回避や、個人情報保護のため個人情報の扱いをあげられました。

また仕事をする上では、様々なソフトが使えるなどツールを増やしておくこと、意外性を突くこと、依頼者のカラーやキャラクターを考えること、発注を適材適所に行うこと、納期の確認、ターゲット・機能にあったデザインにすることなどが重要だと語られました。



三功グループでは、スーパーの食品加工売り場で出た野菜くずや魚くずを回収して堆肥を作り、農家などに堆肥を購入いただき、その堆肥で作った野菜をスーパーで販売するという流れを作り出しています。

まずは、三功グループ酵素の里にて、スーパーから引き取った野菜くず、魚くずを細かくし、木くずや堆肥と混ぜるところを見学し、説明を聞きました。

野菜くず等は届いたその日に混ぜ、腐らないようになっていました。木くずを混ぜていることもあってか、においは全く気になりませんでした。



三功のファーマーでは、野菜くず堆肥で作った野菜や果物を販売していました。みなさん興味津々でした。



次は発酵途中、攪拌作業を行っている堆肥を見て、説明を聞きました。

攪拌し、空気と混ぜて発酵を促します。



発酵保管中の堆肥を見学しました。触ってみるととても温かい。
60℃ほどになっていました。



野菜くずで作られた堆肥で育てられているトマトです。ここのト
マトはすべてユニーが購入することになっており、リサイクルシス
テムが確立しています。



(有)三功の第2リサイクルセンターでは、①産業廃棄物となる紙
くず・廃プラスチックの固形燃料加工、②空き缶リサイクル、③ペ
ットボトルのリサイクルプラスチック原料加工、発泡スチロール減
容を行っています。

みなさん加工された固形燃料を手にとったり、減容された発砲ス
チロールを触ったりしました。



昼食は、野菜くず堆肥で作った野菜と松阪牛のバーベキュー。ユ
ニーの環境学習では、堆肥場・農場見学と収穫された野菜などのバ
ーベキューを食べるプログラムがあり、その時に注意することや作
業の段取り等のお話をお聞きました。



アピタ松坂三雲店では、お店の裏側で取り組まれていること、お客さんと共に取り組んでいることを見学しました。

まずは、お店のバックヤードの見学です。バックヤードでは必要以上に電気をつけておらず、人がいない部屋では電気を消すという習慣が職員の方に身につけていたのが印象的でした。また、分別もリサイクルをしっかりと目的としており、汚れたものとそうでないものも分別されていました。



店舗入り口にある資源回収拠点リサイクルステーションです。ここでは集められた資源の量が掲示されており、消費者との環境コミュニケーションが図られています。

また酒瓶などリターナブルびんの回収もされ、ごみ減量に積極的に取り組まれている様子が見えました。

【講義を聴いた参加者の感想】

- * 現場体験はいろいろな発見がありとてもよかった。得た学びは現場での苦労、現場の思いを知ることができたこと。子ども達にはリサイクルの大切さ、分別の大切さ、また普段口にしてる食べ物について伝えたい。今回の体験を活かしたプログラムづくりがしたい。
- * 各場所・滞在時間は短かったけど、いろいろ見れてよかった。得た学びは時間管理の大切さ、危険回避のための声かけです。子ども達には「バクテリアのおならはくさい！ だけどそれが大切」を伝えたい。
- * 実際に見学してみ、ユニーさんのゴミ分別の徹底ぶりに驚きました。得た学びは「リサイクルシステム!! 分ければ資源!!」。子ども達には「リサイクルシステム!! バクテリアくんの存在。おならのにおい。おいしい野菜を作るには!? 店頭で野菜が並ぶまで」を伝えたい。一人ひとりのリサイクルに対する意識の向上。ゴミ・リサイクル資源の地産地消を期待しています。

●バスの中でのふりかえり 今日の感想と学び

- * トマトがおいしくできるのはバクテリアが働いているからなど分かり易い説明をすることが大切だということ。
- * 発泡トレイなど回収システム化（計量化）することでゴミが減ること。
- * 体験できる喜びを感じた。それを子どもたちに体験してもらいたい。いろいろなところで気軽に参加できるイベントが増えるといい。
- * 企業の努力がよくわかった
- * トマトの堆肥マルチがゴミにならずいいなと思った
- * 周りの人と一緒に伝えることをしていきたい・
- * にわとりがタマゴを産むようになったことに驚いた。子ども達に伝えていきたい。子どもに響くことをしたい。
- * 伝え方がとても大切。「おなら」「うんち」ぱっとみてわかりやすいものもいい。絵だといいのではないだろうか。こどもはおとなっぽいことをするのがすきだからいかせるとよい。

- *わけやすいように、参加しやすいように工夫している取り組みを見ることができた
- *社内への情報提供が徹底されている。熱意がすごい。
- *働いている社員の状況を伝えることも大切
- *社員の意識の高さを感じた。どういうふうにお客さんに伝えていくのがいいのか悩んでいる。お客さんが望んでいないことはできない。全ての原点は「お客さま」。キーワードにしていこう。
- *ダンボールのところで社員が当たり前のように電気を消していたその姿が何気なくてすごいと思った。
- *五感に訴えかけるようなプログラムを考えたい。
- *最初から最後までサイクルの全てを見れてよかった。ユニー店長さんの「困ること」「嬉しいこと」を話してくれたことがよかった。
- *生ゴミー堆肥ーおいしい、という流れがいい。牛糞だったらにおいがすごいけど生ゴミはやさしい。PRをもっとしてもいいのではないか。トイレトペーパーのところにユニーで回収した古紙でつくられています！とか。
- *分ければ資源、分ければ減量、地産地消を子ども達に伝えていきたい。
- *わかりやすい言葉で話しかけることが大切
- *現場を見れて楽しかった。社員の暖かさを感じた。地元の菌で堆肥をすすめているのがよかった。リサイクルとリユースをあわせて伝えられるといいと思う
- *できるだけ多くの人にわかってもらえるような告知の方法が大切。
- *どこの店舗で同じようなプログラムができるようにマニュアルにすることが大切。
- *団体で動くときに、店舗にいる人に迷惑をかけないようにマナーを学ぶことも大切。

【所見】

百聞は一見にしかず。その場の通りでした。1回目のレクチャーを聞いて想像していた生ゴミのリサイクルシステムなどを自分の目で確かめ、企業の積極的な取り組み姿勢と社員の熱心な思いを感じ取ることができました。多くの子ども達にこのような場への参加の機会を増やし、現場でしか体験できない気づきや学びをえてほしいと思います。知識や言葉の伝達だけでなく、自分の目でみて、そこで働いている人の声や考え方を直接聞いて、その場の環境、においや雰囲気を感じ取り、必要性を学び、自分の行動に変えていく。そんな環境学習プログラムを皆さんと一緒に作り、実践していきたいと思いました。

●NPO の組織基盤強化を応援します！募集テーマは環境&子ども Panasonic NPO サポートファンド説明会（名古屋会場）

＜審査員はココをみる！助成をとるコツお伝えします！トークセッション＞

日 時 2007年7月18日（水）15：00～17：00
場 所 なごやボランティア NPO センター集会室
名古屋市中区栄一丁目 23 番 13 号伏見ライフプラザ 12 階
主 催 NPO 法人地球と未来の環境基金（EFF）
なごやボランティア NPO センター/環境省中部環境パートナーシップオフィス
参加者 計 23 名 13 団体

【プログラム】

1. 趣旨説明&参加者紹介 進行：新海洋子（EPO 中部）
2. Panasonic NPO サポートファンド公募要綱について 説明者：古瀬繁範氏【（特活）地球と未来の環境基金（EFF）】
事例に見る NPO 組織の基盤強化（過去の採択事例など）
サポートファンドの考える「NPO 組織の基盤強化」とは
質疑応答（要綱説明および基盤強化について）
3. 申請に当たっての団体個別相談会（質疑応答が終わり次第移行）

1. 趣旨説明&参加者紹介

○企画趣旨説明

- ・特に環境分野での応募件数を増やしたい。（前年応募数 38 件）全国的な応募傾向でも東京一極集中が見られ、地域の団体からの応募を増やしたい。
- ・応募団体の多くが年間財政規模で数千万円もあるような団体が多く、ファンドとしてはこれから組織としてステップアップして行こうという団体にもっと応募して欲しい。
- ・組織基盤強化の助成案件内容として、どんな内容で応募すれば良いかわからないとか、何だか難しそう・・・という問い合わせが毎年寄せられることから、過去の採択事例も含めて本ファンドが考える「組織基盤強化」について伝えたい。
- ・地域で活動する団体の理事、事務局長クラスの方と直接お会いする機会を設け、現在の組織経営でどんな課題を抱えているのか、どのような支援が望まれているのかの生きた声を伺う機会を持つ。

○自己紹介、期待していること、知りたいことをフリップに記入し、発表した

＜出された意見＞

- ・共感が得られる申請書づくりのコツをききたい
- ・助成金をとるコツを知りたい
- ・環境・子ども分野で時間をとってまでこの会場に来る人たちと知り合いになりたい
- ・NPO が受講して、参考なる助成金セミナーとは何かを勉強したい
- ・企画書を比較してどのような点を重点的に評価するか？（ポイントはどこか？）
- ・事務局強化をするためのポイントをききたい
- ・なぜ「子ども」？と「環境」？なのかを知りたい
- ・新しく立ち上げたNPOをこれからどう進めていくことが出来るかを聞きたい etc…

2. Panasonic NPO サポートファンド公募要綱について

○Panasonic NPO サポートファンドの趣旨説明

- ・本助成プログラムの一番の趣旨はNPOの組織基盤強化である。ヘルメットやチェンソーなどの道具としての用途は×であり、

人を育てるための人件費や広報費であれば○。組織基盤強化のための人件費であれば対象となる。

→ 最低限生活ができて、家族が養えるようならなければいい活動ができないし、助成を出す側にとってもいい成果が生まれないと考える。

- ・成果は成長！この助成によってステップアップすることが大きなねらいである。

○事例に見る NPO 組織の基盤強化（過去の採択事例など）

- ・昨年申請総数は環境部門 38 団体、子ども部門 250 団体であった。

○申請書の書き方のコツ

- ・“組織運営上の問題点・課題・原因の分析”、“応募事業内容”の2点が一番の肝である。組織の課題・欠点・短所を分析後、組織のコンセンサスをとって組織基盤の強化につなげる。
- ・あまり思いばかりを伝えようとせずに、読みやすく、分かりやすく記入する。改行して読みやすくするのも審査委員にとっては好評価につながる。
- ・5W1H をしっかりと書く。
- ・じぶんたちの情報を申請用紙に落とし、冷静に団体を見ることが出来るか。

○助成事業実施までのスケジュール

- ・選考→助成候補団体ヒアリング（活動、事務局体制、思い等を見る）→助成団体内定で実施。
- ・助成候補団体ヒアリング時と事業実施中間ヒアリング時に、事務局と審査委員で事業計画、予算の修正を行っていく。
- ・コミュニケーションを重視。
- ・昨年は 14 件の採用であった。

2. サポートファンドの考える「NPO 組織の基盤強化」とは

○個人事業から組織運営へ

- ・個人事業者、ボランティア、フリーランサーから組織運営になるためのサポートファンド。
 - 自分のものから社会から預かっているものを自分の手から社会を還元する。
- ・15 年、20 年を見据えて本助成を考えており、Panasonic と協働で商品開発や事業を行っていくための基盤強化でもある。

○基盤強化につながる成果とは

- ・基盤強化につながる成果とは、input→output→outcome（数値目標）であり、抜けがちな outcome を打ち出せる事業を目指して実施する。

所見

参加者のほとんどが本企画に満足と答えてくれた。企業と NPO が互いの存在価値を理解することにつながっていると思う。NPO の組織基盤強化をテーマに、真剣に NPO や次代社会に対して、自社の経営部門も考えた上で構成が練られている。15 年、20 年後に企業と NPO が対等に事業をおこなっていけるために、企業側から NPO の人材、組織マネジメント、社会性、企業文化の認知などのスキル等を底上げする意義の高い、大きな試みであると感じる。プログラムでは選考後と中間事業時に事業計画、予算を助成団体と事務局側とで一緒にブラッシュアップし、アウトカムを目指した取り組みを実施することで NPO、企業、社会共に前進できる関係を築いていくことにつながる。自団体の欠点を見据えなければいけない点は選定結果に関わらず、組織基盤の強化につながる大きな点である。EPO 中部としても多くの団体が応募をし、レベルアップを図り、地域の底上げにつながるようにサポートをしていきたいと思う。

1. 本日の企画内容はどうでしたか。理由もお聞かせ下さい。

満足した	18 名	<理由> 古瀬さんの簡素な語り口はよく理解できた。 具体的で分かりやすかった。 よい情報収集となった。 ネットや応募要項では読み取れない生の情報が聞けたので。 古瀬さんのお話、特に団体運営（個人商店→組織）。 難しいけれど納得でき、大変学習できました。 助成金の主旨が良くわかった。 分かりやすく聞けました。 ポイントがわかりました。Outcome の視点。 助成金の内容について理解することができた。団体の継続性の必要性も強く感じた（組織基盤強化）。 知らないことばかり聞けたから。 申請する方、選考する方、両方の目をもって申請の話が聞けた。 パナソニックの意図がよくわかった。審査委員の立場がよく理解できたから。 今の自団体のニーズにあい、思いのある助成金にめぐりあえた。 話が分かりやすく面白かった。
どちらでもない	0 名	
不満足	0 名	

2. 助成金の説明会に参加したことはありますか。

初めて参加する	11 名	
1～3 回参加したことがある	7 名	
4 回以上参加したことがある	0 名	

3. 助成金野説明会はあったほうがよいと思われませんか。

ある	18 名	<理由> 具体的ノウハウがわかった。 よい的確な申請書を作成できる。 それぞれの助成金にポイントが違うと思うので。 理解できていない人（私自身も）が多いから。 具体的な事業が描きやすくなった。 書くポイントがわかりやすいから。 助成金を出す側のニーズと欲しい側のニーズがあるのかどうか分からない。 主旨が伝わるから。 主旨が伝わり、何をしたら良いのかがわかる。
ない	0 名	

4. 助成金情報は主にどこで入手されていますか。

	11 名	HP、NPO 関係の HP
	1 名	シーズ HP
	3 名	グループの代表から
	1 名	NPO ボランティアセンター
	1 名	NPO
	1 名	NGO センター
	3 名	ニュースレター、郵送されてくる書類、NPO 向けのニュース
	2 名	情報 ML など

5. Panasonic NPO サポートファンドはご存知でしたか。

知っていて応募したことがある	1 名	
知っていたが応募したことはない	7 名	
知らなかった	10 名	
その他	0 名	

6. Panasonic NPO サポートファンドに応募される予定でしょうか。

予定している	4 名	
予定していない	4 名	<理由> 通常の業務で手がいっぱい 設立 1 年未満だから 対象外なので 対象外のため。ただ他の団体にすすめたいです
検討中	10 名	<理由> 子ども分野 6 才～18 才に合っているかどうか 一人では決められないから まだ当該団体になっていないので厳しいから（まだ 1 年経っていない）

7. このような助成金説明会および助成プログラムに対してご意見・ご提案があれば、できれば具体的にお聞かせ下さい。

ご意見・ご提案について	4 名	もう少し余裕をもって開催願いたい。×切が追っていて対応に苦しい。 なぜパナソニックがこの助成をするのかを始めにきかせていただきたい、とても満足しています。 設立年度別に説明会をやってもらいたい。 申請書の書き方講座をしてほしい、実践に助成金をとった所の話を書きたい。 申請時期よりもっと前に行って頂けると余裕をもって申請準備が出来ると思います。
-------------	-----	---

8. あなたの団体についてお聞かせ下さい。

	①団体設立はい つですか	②主な活動分野は なんですか	③専従スタッフは何 名いますか	④会員数は何名です か	⑤総予算額のうち主な収入 源はなんでしょう か 会費 寄付金 事業委託費 助成金 自主事業費 他
1	2007 年	子育て	1 名	100 名	会費
2	1999 年	教育	6 名	500 名	会費、事業委託費、助成金
3	2000 年	国際協力	3 名	44 団体+80 名（個 名など）	寄付金、事業委託費、自主 事業費
4	1994 年	こども	8 名	350 名	会費、寄付金
5	1994 年	こども	4 名	400 名	会費、助成金
6	2005 年			80 名	会費、参加者の費用
7	2001 年	子どもの体験、子育 て支援	10 名	300 名	会費、寄付金、事業委託費、 助成金、自主事業費
8	1993 年	子ども、男女共同参 画	3 名	98 名	会費、寄付金、自主事業費
9	2007 年	子ども	1 名		会費
10	2005 年	子育て	8 名	約 100 名	自主事業
11	2000 年	国際協力	3 名	250 名	寄付金
12	2006 年	子ども、環境	1 名	5 名	助成金、自主事業費
13	2005 年	環境	1 名	60 名	事業委託費
14	2005 年	環境	2 名	40 名	助成金

●2007 年度 ESD-T 第 4 回担い手会議

日時：2007 年 7 月 19 日（木）18：30～21：00

場所：EPO 中部

参加者：天野、葛山、古澤、村瀬、近藤、浅田、浅川、宇野、新海、桜井（10 人）

文責：おんこ

本日の議題

- 1 なごや環境大学へ申請する講座の企画詰め。
- 2 ワールドコラボ企画について。
- 3 その他

☆はじめにアピールタイム

①中部 ESD 協議会のメンバーを募集中！by 天野

②ESD-J の会員募集中！by 村瀬

③サマーフェスタ冊子持って来ました！by 浅川

1 なごや環境大学へ申請する講座の企画詰め

なごや環境大学講座チームによる第 1 回ミーティングで話し合ったことから、EPO より新しい提案を出し、それに対して意見を出してもらい、最終に提出する講座のカタチを決めた。

○なごや環境大学共育講座

講座名 「がっつり ESD～持続可能な未来のために私にできることって？」

〈講座概要〉

国連持続可能な開発のための教育（ESD）の 10 年キャンペーンがスタートして 2 年。日本の中での ESD の社会認知度はまだまだ低い現状である。ESD は、持続可能な社会、未来をつくる人を育てる教育（学習）。地球上の複雑化した問題や国内の課題に目を向け、その解決のために模索しながら、共感しあいながら、私に何ができるか、次世代に何を伝えていくかを見つける学びである。

この企画はプレ講座と ESD 活動をしている人々が集まるフォーラム、次のステップを見出すフォローミーティングの 4 回シリーズで開催する。

第 1 回 プレ講座 11 月 14 日（水）19:00～20:45 会場 EPO 中部

「なごやの栄光と村の挫折」 ゲスト：中日新聞木曾通信局 森木幹哉さん

第 2 回 プレ講座 12 月 12 日（水）19:00～20:45 会場 EPO 中部

「地域住民との共働から～むつみ福祉会のこだわり」

ゲスト：むつみ福祉会 施設長 青山嘉靖さん

第 3 回 フォーラム～がっつり ESD、持続可能な未来をつくるために“私”にできること

1 月 12 日（日）11:00～16:00 場所：未定

全国または地域で ESD の活動をされている方をゲストに迎え、なぜ今 ESD が必要なのか、ESD を社会のしくみに組み込んでいくために何が欠けているのか、を明らかにする。後半は参加型ワークショップ。私にできること発、社会を動かすアクションを具体的に探り、多くの人が〈あたりまえ〉のように参加できるしくみのありようについて激論を交わす。

第 4 回 がっつり！フォローミーティング 1 月 17 日（水）19:00～20:45 会場 EPO 中部

ESD のしくみをつくるための戦略や、特に人と人、人とセクターをつなぐコーディネーションのあり方について、参加型ワークショップで意見を抽出し、具体的なムーブメントを起こすシナリオづくりをする。

2 ワールドラボ「ESD 広場」企画について

10月27,28日（土日）に開催されるワールドラボフェスタのESD 広場企画案をたたき台に意見交換し、この事業においてもESD-Tの協力を得られることを確認した。ESD 広場は大まかにブーススペースでの企画とステージ企画を考え、その内容の概要を説明しました。次回のミーティングでアイデアを膨らませる。みなさんがやりたいこと、できることを考えて持ち寄る。現時点での最終企画書を添付しますので参考にする。

●2007 年度下半期運営協議会

日程：2007 年 7 月 24 日（火）14:00～17:00

場所：あいち NPO 交流プラザC会議室

参加者：計 28 名 内オブザーバー2 名 *自己紹介参照

【次第】

1. 開会
2. 議事
 - 1) 自己紹介
 - 2) EPO 中部は何を目指しているのか
3. 報告事項
 - 1) 今年度の事業推進状況について
 - 2) 今後の新規事業について
 - 3) 長野県タウンミーティング
 - 4) 先進自治体経験交流会
 - 5) 内部評価について
4. 検討事項
 - 1) 2007 年度事業方針・計画のリメイクについて
 - 2) 残り 1 年半で何を社会に残すのか 具体的な協働事業提案
5. 閉会

【今後の事業展開に向けて、運営協議会意見交換から出された重要ポイント】

- 1) 運営協議会自体のあり方の検討。位置づけが明確になっていない 事務局だけで動かないことが重要
協働のモデルづくりを運営協議会がするのかどうか明確にしたい
→萩原さん、駒宮さん、千頭さんを中心にチームを作り検討する。
- 2) EPO 中部は組織体なのか運営体なのか、を明確にする
- 3) EPO 中部と運営協議会、請負団体、中部地方事務所のフロー図を作成し議論をすすめる
- 4) 補完性の原則の徹底
- 5) 地域の課題、現状の把握をきちんとする
- 6) 事業の数値目標を設定し、評価する
- 7) 小さい団体を伸ばしていく、支えあっていく関係性をつくることが重要。EPO 中部は前にでない。
- 8) 事業の絞込みが必要
- 9) 県境を越えて一緒に実施したいという声を積み上げ事業化を試みる。
- 10) EPO 中部らしさがでるような、地域でみんなが行える事業、他の NPO と一緒に行うもしくはそそのかすような企画の実施。
- 11) EPO が関わることで解決する事業の展開
- 12) EPO 中部でつくったシステムを地域に還元、提案すること
- 13) 協働のモデルの提示
- 14) 一つ一つ成果・実績をだしていくこと
- 15) EPO 中部自体の目的を明確にすること。協働の取り組みの協働事例をつくり、情報・ノウハウの提供をする。
- 16) 組織全体のミッションを決めること 具体的なテーマを議論したい。
- 17) 内部評価のありかたを検討する。
- 18) 小さな単位での意見交換の場が必要
- 19) 来館者への対応の見直し・仕事の仕方の見直し決定
- 20) 飯田市に運営協議会メンバーに加わっていただく 事務所から正式依頼をだす

【議事内容】

1. 開 会

あいさつ：環境省中部環境事務所 関山所長

昨年度末に四国、今年度 5 月に九州の熊本にパートナーシップオフィスが開設され、全国すべてに設置された。中部はその

中でも先駆的なオフィスである。協議会自体のあり方も地方で違いがあり、スローガンを体系化していくことは難しい点である。環境省の一つの柱として協働―パートナーシップという言葉は常に使っているが、協働が何を指しているのか、同じレベルのこと、自分達ができる役割分担がありうまく絡み合っていくこと、色々な考え方がある。一つの定義をつくることは難しく、実践していくことによって中部のあり方が見えてくる。新しいあり方、進め方を模索していくことが大切である。自治体の方々も協議会に加わっていただいたので、それぞれの地域のご意見などを踏まえながら進めていきたい。環境省も同じ立場として、運営に携わっていく。

2-1. 自己紹介

フリップに①協働について、②自分について、を記入し自己紹介を実施した。エコライフの普及啓発

名 前	協働について	自分について
千頭 聡さん (日本福祉大学)	すばらしさ、しんどさ	違いを認識する、理解する
三國 千秋さん (北陸大学)		自転車のプロジェクトを実施している。 能登半島で風力発電のプロジェクトを応援している
小林由紀子さん (e-plus 生涯学習研究所)	つながりと WINWIN	好奇心のかたまり
駒宮 博男さん (ぎふ NPO センター)	リソースをだしあうこと(行政は金、NPOは知恵)	革命家(地域再生)、team50-50 カ
児玉 剛則さん (環境創造研究センター)	一緒に汗をながしましょう、汗の流し方 (お金、名誉、ミッション、などいろいろ)	寅さん大好き
萩原 喜之さん (NPO法人地域の未来・支援センター)	自立	ヒーロー役、去年：監視役
原 京子さん (NPO法人こどもNPO)	NEW創造、違いを超えて新しいものをつくる	ひっつけら〜 子どもと福祉、環境をひっつ
矢口 芳枝さん (NPO法人三重総合環境研究センター)	目的を共有、なかま	皆があつての自分
篠田 陽作さん (NPO法人愛知県環境カウンセラー協会)	協働は共働	しょくばい チャッカマン 火をつける時だけ
水上 靖仁さん (北陸経済連合会)	思いを共感し、ここから動く	仕事、志大好き
石原 桂洋さん (岐阜県環境生活政策課)	模索中です。一緒に汗をかくこと？	岐阜県は今年度から協議会に参加まずは協議会の理解からゼロベースで勉強させていただいている
福田 雄一さん (長野県環境政策課：代理出席)	情報の共有	初心者です、お金のない分、知恵をしばる
武隈 俊彦さん (富山県環境政策課：代理出席)	共有することで目標を	エコライフの普及啓発
福田 雄一さん (長野県環境政策課：代理出席)	情報の共有	初心者です、お金のない分、知恵をしばる
武隈 俊彦さん (富山県環境政策課：代理出席)	共有することで目標を	エコライフの普及啓発
鈴木 良平さん (多治見市環境課)	理解しあう、お互いの違いを理解する	相手の立場になること
坂枝 誠さん (三重県環境活動室：代理出席)	できることを明確にして、前向きに	環境分野の仕事はまだ2年目である
林 博之さん (愛知県環境活動推進課：代理出席)	同じ目線、目指すところは同じところ	新米
増田 達雄さん (名古屋市環境都市推進課)		環境教育の主幹をしている。環境学習センターの担当、なごや環境大学の事務局
関山 和敏さん (環境省中部地方環境事務所)	同じ目的に向かい相手を理解し合い進めていく	自然が大好き
庄子 真憲さん (環境省廃棄物・リサイクル対策部)	地域力の源	出会いを大事に 東京で容器包装リサイクル法 協働で行っているところがうまくいっている
永島徹也さん	相互理解	家庭内の協働の難しさ

(環境省中部地方環境事務所)		
梅田欽也さん (環境省中部地方環境事務所)	心のつながり	頭がかたい、融通がきかない
後藤 靖久さん (環境省中部地方環境事務所)	エゴではなくゆるやかな連携	バリ O 型人間
大西 光夫 (NPO法人ボランティアネイバース)	分担 お役立ち	愛知万博の余剰金の一部を市民活動のために利用する。地域の市民活動の活性化になると思う。まちづくり交流フォーラムも実施していく。
新海 洋子 (EPO 中部)	今まで無かったものを生み出す。	まっすぐ
桜井 温子 (EPO 中部)	ビジョン、動く、コーディネート	わくわく、ベビーとともに生活
鶴飼 哲 (EPO 中部)	自分をつくる、社会をつくる	上記のことから自分を確立したい
内輪 博之さん (愛知中小企業家同友会：代理出席)	あてにし、あてにされる関係	自己実現のための仕掛け人
谷川 毅さん (近畿 EPO)	しくみ+心→創造、喜び 発見があるプロセス	EPO 近畿 (兄弟)

2-2. EPO 中部は何を目指しているのか

○環境省の立場から (梅田氏)

- ・市民、企業、行政のいろんな人が手を取り合って、持続可能な社会を築いていくこと、パートナーシップ事業を進めていくところである。

○事業委託を受けて EPO を担っている立場から (新海)

- ・持続可能な地域をつくるのに環境パートナーシップは必要なのかを探っている。
- ・色々な人と出会うことで、何を起こすことができるのか、革命児になれるのか、つながった人達が何を産み落とし、それによって地域はどう変化していくか。
- ・地域に必要なことは地域がつくる。住みやすい地域にしたいという声を様々なリソースで重なり合わせてつくっていきたい。
- ・残り 1 年半でこの 3 つができればいいと思っている。

○運営協議会の立場から (千頭氏)

- ・受託団体に対して別の角度から意見を言うというのがよくある協議会だと思いますが、EPO 中部の場合は運営協議会ができるまでにかかなりシビアな協議を重ねてきており、今の協議会が生まれてきている。
- ・環境省から受けた団体が事業を実施するだけがパートナーシップの全てではなく、協議会に入っているメンバー自身がこの地域のパートナーシップを動かす責任をもって、提案をし、実際に実施していく。出された資料を一字一句を修正するのではなく、自分たち自身が動いていくということを半年間厳しい議論を交わして生まれたのが運営協議会である。
- ・運営協議会のメンバーが提案して事業化した企画もある。
- ・環境省以外から企業の受託事業として外部資金の収入もある。
- ・環境省以外の地方公共団体からの受託を受けることが可能であるということは最初から決めてある。
- ・従来型の施設ではあるが、運営協議会のメンバーが責任をもつことと、窓口を広げていることが中部の特長だといえる。

3-1. 今年度事業進捗事項

新海

○事業の大きな柱は、Ⅰ 運営協議会の協働事業、Ⅱ 次世代応援事業、ESD 普及・啓発事業、Ⅲ 企業との協働の芽を探る事業、行政との協働の芽を探る事業、環境パートナーシップを促進する事業、Ⅳ 書籍などの収集、展示、Ⅴ 運営協議会の実施である。

○運営協議会の協働事業について

- ・地域の未来・志援センターの提案事業として始まった、リコー中部(株)の助成プログラム「エコひいき」の実施。
- ・中部電力(株)の社員がエコ活動をして溜まったポイントを社会還元するエコポイント事業について、三重総合環境研究センターととも NPO、e-plus 生涯学習研究所の皆さんと一緒に進めている。
- ・ユニー(株)の環境学習事業で、北陸と中部のエリアで地域の NPO の方々が店舗を活用して環境学習を展開するコーディネーションを運営協議会委員とともに協議しながら進めている。

○主な請負事業

- ・次世代、ESD の講座等の実施やそこに関わった方々と MTG をしながら、地域の人達と一緒に活動展開を図っている。
- ・今日の議論で下半期の事業を決めていきたいと思う。

○着手できていない事業

- ・長野県タウンミーティングの実施。環境パートナーシップの現状や課題、何をすれば進むのか等をワークショップ、ヒアリングをして実施したい。
- ・環境政策が先進的に進んでいる飯田市、多治見市や津島市、日進市などの自治体の方と経験交流を行い、自治体の施策と環境パートナーシップをどのように融合していくかを検討していきたい。
- ・コーディネートの役割にどのようなスキルが必要か、社会的にどれだけ認知されているのか、などのことを研究していける事業の実施（スタッフ提案）。
- ・内部評価 運営協議会委員と内部評価のしくみや評価軸をつくっていけるプロジェクトを実施したい。

千頭氏

2005 年から国連が ESD の 10 年の取り組みを行っている。ESD を地域で推進するための拠点の認定制度がある。今世界中で 34 ケ所が国連大学の認定を受けている。中部地域も拠点の申請をしてほしいと国連大学からの要望で、中部大学を中心にし、名古屋大学、なごや環境大学、市民推進会議が発起人になり、申請の手続きをしている。うまくいけば 8 月上旬のマレーシアでの会議で認定の審査を受けられることになる。いくつか課題があるが、認定される可能性が高い。中部 ESD 拠点協議会をつくる。何をするかはこれから決めていくが、対象地域として中部の場合は伊勢湾・三河湾の流域を対象にしている。地方公共団体、国の機関、大学、企業、NPO 等が入りゆるやかなネットワークとして協議会をつくっていく。協議会の中で運営委員会をつくり、色々な作業にあたる組織構造を考えている。協議会参加のお願いを各県や、国際交流センター、博物館、大学機関等に行っている。EPO 中部運営協議会においても、ESD は重点事業として挙げているので是非とも入っていただきたい。個人としては運営の一躍も担っていただければと思う。とりあえず年に 1 回の総会に参加をしていただくだけでお金がいるということではない。認定をとることによって世界の様々な拠点と情報・経験交流が行いやすくなるので、世界への情報発信、アジア地域との協働等が動きやすくなる。加盟する了解、ご承認いただければと思っている。

中部は愛知・岐阜・三重の 3 県である。国内では仙台、横浜、岡山がすでに申請がだされており、神戸も出す予定である。北陸として拠点申請の動きがあれば EPO 中部として申請の中核を担えればと思う。北陸 3 県エリアは中部の対象外地域である。

意見交換

萩原氏

EPO 中部らしさとして、一つは自主財源をつくるためにエコひいきを提案した。もう一つは運営協議会自体が一つの形態、当事者であるという認識があった。EPO 中部はこのメンバーと一緒に何かを産み落とす子どもであると思っている。運営協議会自体をどうしていくのかというのが今回の事業内容から見ていると薄い。実態としての新しいし、探そうとしている段階である。もう 1 つは年 2 回の運営協議会では実態が伴わないということで、新しい事業をつくり、日常的に接する場をつくったという認識であった。今回の事業計画ではその点が飛んでいるのかと思った。主体はワンオブゼムである。一緒にやりましょうという状態。事務局だけで動かないということが重要である。

新海氏

プロセスの中で皆さんを巻き込めていないことがある。運営協議会委員と一緒に実施していく事業を進めていきたいとは考えている。

萩原氏

請負団体としての事業は淡々と行う。委員と協働で行う視点を失うと EPO 中部ではなくなり、単なる環境省の出先になってしまう。

新海氏

後半のワークショップでアイデアを出してもらい事業を行っていききたい。スタッフが 3.5 人しかいないのでどこまでやりきれかわからないが残り 1 年半皆さんと一緒に頑張っていきたい。

千頭氏

北陸エリアでは積極的に出かけていきコミュニケーションを図ってきた。5 月には北陸 3 県の方との意見交換の運営協議会を

実施した。EPO 中部スタッフからの情報を待っているだけではなく、ここに足を運んでいただければいろいろな動きが見えてくと思う。

原氏

事務局からのいろいろな提案を出してくださいという発信があるのにも関わらず、それに答えることができないことに反省をしている。

千頭氏

情報がうまく発信されず流れが悪い場合は、出し方が悪いだけではなく、取りにいけば情報が分かり、現場が見えてくる。

福田氏

タウンミーティング等またご相談したい。

関山氏

EPO 中部は組織体なのか運営体なのかそれぞれのイメージが違っている。環境省の単なる請負ではなく、独自性を導き出していくときに、運営協議会の位置付けがあまり明確になっていない気がする。運営協議会のご意見版だけではなく、もう一歩関わり実践するという点からみるとフロー図をつくり議論を進めていった方がよいと思う。オーバーラップする部分、グレーゾーンの部分が見え、関わり方もはっきりすると思う。早い段階で行い、時を経てその図が変化していく、それらの辺りの整理をしていくことが必要である。

萩原氏

毎年変わっていくものだと思う。運営協議会は最高意志決定機関である。形態である。しかし、そうっていない。その方向にいきたい。それぞれがワンオブゼムで責任能力、当事者意識をもってそれぞれが作りましょうという話をしてきた。でもなかなかそうならない。新たな突破口をつくりたい。

関山氏

環境省の立場からすれば、EPO 中部という箱を設置している立場やその運営に対して業務を委ねている立場と、環境省としていろいろなジレンマがある中で、パートナーシップでできる分野を探している。一緒につくっていく、悩んでいく発注者のあり方もみんなで議論していくことが大事である。そうすれば環境省も3つくらいの色がつくかもしれない。そのあたりの役割を整理していくことが大切である。

千頭氏

昨年3月に外部2名の方に評価していただいた。結果としてEPOが何を目指しているのかが分からないというご指摘を受けた。それらのコメントも意識しながら今年度の事業も検討している。私達がEPOをどのように評価するかという内部評価のやり方について議論できていない。今年度内にかたちをつくりたい。提案としては事務局にお願いするのではなく、協議会委員の何人かでプロジェクトチームをつくり、EPOの評価のしくみを提案できるたたき台をつくっていききたい。各々の立場でいろいろな評価ができると思う。

三國氏 運営協議会委員に飯田市も入っていただきたい。環境ISOに実践的に取り組んでいる。

千頭氏

飯田市では外部の大学生等も巻き込んで勢力的な動きをしている。

萩原氏

環境首都コンテストの常連エリアの人達も誘っていききたい。

千頭氏

飯田市、多治見市、名古屋市、安城市、日進市など頑張っている市町村のエリアで枠を超えた経験交流会をEPO中部として実施したいと考えている。

萩原氏

飯田市には三國さんの責任でもって入っていただく。

永島氏

最初に EPO 中部を立ち上げた時に主体的に動いていただける自治体について、多治見市と飯田市の声が挙がっていた。温暖化防止に向けた取り組みを熱心に行われている。

4-1. 事業方針リメイクについて

○残り 1 年半の事業実施にあたりこれまでの 2 年間の課題等を抽出した。

- ・パートナーシップで解決に導く緊急性のある地域課題に着手すること
- ・政策に民間・市民・NPO の声が活かすこと
- ・企業の環境パートナーシップによる環境活動を地域の中で進める
- ・企業や行政と対等な関係をつくる組織力・コーディネート力のある NPO の育成
- ・若手が学んだことを社会にフィードバックしていく、組織をつくって社会にアプローチすること
- ・ESD の社会認知度を上げて、地域の教育のしくみとして位置付けること

○パートナーシップを推進する上で感じる課題点

- ・一緒に事業を組み立てる、予算をつくる、意思決定してかたちにしていく関係があまりみられない。運営協議会を使って自身の活動にフィードバックすること。
- ・意思決定のパワーバランスの悪さなども見られる。一緒に議論してつくることが重要。

○2008 年度上半期までの主な事業

- ・緊急性の高い地域環境課題解決を導く協働事業
解決しなければならない事業において運営協議会委員で事業展開をする
- ・ESD のしくみづくり・次世代人材育成
委員の方のリソース・関係性を活かして取り組む

○2005 年からの実施してきた事業の成果・課題を用いて、2007 年—2008 年の事業方針を挙げ、2009 年には成果を社会に提示していくような流れを考えている。この流れを一つの参考として、今回のワークでは 2007 年—2008 年の実施事業の中身を議論していただきたいと思う。

意見交換

駒宮氏

EPO 中部が主体になろうとしている。これはナンセンスである。これまでに大分議論してきたことが欠けている。補完性の原則が完全に欠けている。地域の課題を把握していない。スタッフの微妙なズレがある。このような状況から全体がぼやけてしまっている。中部県内にどのような緊急性の問題があるかを事前に把握していないといけない。それをこの協議会の場で吸い上げることが重要である。一つ一つの事業を止めた時に誰が困るかが分からない事業は実施しないほうがよい。EPO 中部の事業もそれになりかねない。どうしてもこの事業が必要だという人達が出てきてはじめて意味がでてくる。それが無い限り内部で話してもあまり意味がないと思う。

三國氏

スタッフはどこからプレッシャーがかかっているか分からない。やらないといけないという感じがする。経った 1 年半でここまでの成果を挙げるのは難しいと思う。一つ一つの事業をやったというくらいで、全体のレベルを上げるのは無理があると思う。スローペースでもよいのではないか。

駒宮氏

スタート時に皆さんで協議した、補完性の原則を守っていくということを頭に入れておかないといけない。

千頭氏

緊急性の高い課題事態を EPO が解決するのではなく、地域の課題を解決するための武器として協働パートナーシップがあるのであれば EPO が応援できると思う。EPO が主催で行う講座などの事業を減らそうとしている。

三國氏

行政・企業・NPO 等が活かしきれていないとあるが、EPO だけがどうしても活かさなければならぬということではなく、他のいろいろなところがそうならなければならない。

千頭氏

補完とは何かを示さないとけない。EPO がやることの課題を吸い上げていくのか、見つけ出していくことが大事である。

OEPO 中部スタッフ内部での評価の実施

2007 年下半期の事業内容の議論の材料も兼ねている。

- ・事業推進にあたりポイントとなる要素と各事業内容の達成度を 5 段階で評価
- ・2006 年—2009 年までの到達点と目標点
(Ⅰ運営協議会協働事業、Ⅱ重点テーマ推進事業)
- ・2006 年度の成果・課題とそこから抽出された 2007 年度下半期事業に向けたポイントの提示
(Ⅰ運営協議会協働事業、Ⅱ重点テーマ推進事業、Ⅲ企業・行政・NPO 地域リクエスト事業)

意見交換

原氏

次世代応援事業の講座などで参加人数やどんな人が参加されていたのかも評価する際にデータで載せておくといよい。

三國氏

あと 2、3 年経っても変わらないと思う。変える必要がないと思う。EPO 中部の目的の一つは環境教育であり、ESD や次世代事業をやることは意味がある。エコポイント事業やエコひいき事業など資金をどのような方向に流すのかといった点である。他の人からみると何か共通でできるような事業をやろうとしている。予算も少なく、人件費を引いたらほとんどない。事業報告書をみてもただやっているのではなく、数値目標を決めて取り組まなければならない。地域の課題に関しては、私は北陸のことは知っているし、直ぐにできる。北陸で何かプロジェクトを行いたいという思いもあった。それは EPO 中部として行うのではなく、自治体・NPO であればスタッフが主体的に行っているところに対して積極的に応援していく。相互性の原則という言葉があるが、小さい団体がやろうとしていることを大きい団体がつぶしてしまうことがある。地域の NPO や自治体が行っていることをつぶしてしまう。上から下ろすなということがある。上からこれをやれといった行政的なことである。そうではなく小さい団体を伸ばしていく、支えあっていくことが大事である。EPO が前面に出ずに地域の人前面に出る。1 回りのフォーラムではなく、4、5 年も続くものがよい。輪島市に風力発電事業があるが、17 年も続くプロジェクトである。17 年行って借金が返せる。市民からファンドを集めて実施する。環境をキーに町おこしをしながら何かできないかと思う。10 月に風力発電だけではなく環境をテーマにして町のひととフォーラムを実施する。何か一緒になってノウハウをプレゼンする、輪島市とプロジェクトをする、NPO と集まる、自治体に協働モデルを提案するなど、一緒にできないかと思う。自分の行っていること、自治体のやっていることなど、1 年ポッキリではなく、重点的にできる事業を EPO として見守っていく。それに毎年少しづつお金を出していく。一つでも二つでも北陸で行えたらそれで十分だと思う。

千頭氏

一つの事業を長く取り組んだほうがよいのか、とことん後ろから支えるような事業の方がよいのか、という点は議論するところである。セクター別で各県が抱えている課題を出してもらい、その後に地域別で 3 者がそれぞれ課題だと思っていることを出し合い、1~2 つに絞り込み、協働のプロジェクトを 1 年半くらい実施することを考えていた。

新海

三重県から一緒に何かできないかという話があった際に、EPO が前に出るのではなく三重県の運営協議会メンバーの矢口さんたちにキーマンになっていただき、すすめていく。EPO 中部にできる部分で応援してしくみを作っていければいいと思っている。

4-2. 残り 1 年半で何を社会に残すのか 具体的な協働事業提案

千頭氏

それぞれが抱えている課題の中で、EPO というしくみを活用することでその地域の課題、そのセクターの課題を解決できるネタをいくつか出していただきたい。そして 1～2 つに絞り込み、協議会として残された 1 年半で実施していきたい。

児玉氏

EPO スタッフが内部評価した図の中で、“事業推進にあたりポイントとなる要素”と言われたいくつかの事項が、表に出ずにバックボーンで行っていくという点で、この評価項目は EPO らしくあるための要素であっているのか、と思う。また、以前東海三県の自治体が集まった際に県境を越えて何か一緒に行っていきたいといった話があった。そのような声を積み上げていき、提案していくのも一つではないか。県が三県で協働してもいい場として、EPO も活用できたらいいと思う。

萩原氏

今 EPO は 2 重構造になっている。一つは環境省の請負団体としてやりたいことを実施している面がある。それは決して悪いことではなく、事務局の企画や役割を承認するという役割はある。ただその時に EPO 中部らしさが出るような、地域でみんなが行える事業や、EPO 中部が行うことではなく他の NPO と一緒に行うもしくはそそのかすような企画があればいいと思う。もう一つは運営協議会委員の持ち込み企画があり、それをみんなでやっていくという二つの性格がある。

千頭氏

EPO のために余分に何か事業をつくるという話ではなく、それぞれが置かれている状況で抱えている課題の中で、EPO がそこに加わることで解決する部分を考えてもらいたい。新規で何かの協働事業をつくっていくことでは必ずしもない。

萩原氏

事務局がしっかりと生活していける状況ではない。それだけの人件費が出ているとは思えない。事務局が生きていける組織形態でなければもたないと思う。それが限界であればお金を稼ぐことを考えなければならない。

千頭氏

金額の大小という話もあるが、現場を見ていただければ分かると思うが、時間の大半は来客の対応である。時間内は誰でも来館でき、来館者には対応しなければならない。対応が最大の仕事になっている。端的には役割分担をして、曜日によって担当者を決めて対応をするなどの対策をすれば給料は多くないと思いますが、もう少し楽になると思います。

永島氏

時間的に目一杯働いており、これ以上仕事がきても物理的には難しいと思う。環境省からはお願いしたいことははっきりしていない。大きな目的があるだけでそれに沿っていればいいので、今ある事業を減らしその部分に新規の事業をもってきて予算を充填するといったことも考えられる。その点として何をおこなっていくか。

新海

ユニーのプログラムを実施しているが、来年は地域の人達だけで実施できるようにしたい。今は過渡期だと思っている。関係性ができ、地域にどんどん広げてもらえるのであれば私たちは応援するのみでいいと考える。この 1 年はたくさん種をまいてきたので、その中から事業を絞りたい。

小林氏

EPO から、このような事業があるということで情報の提供してもらえていることはよい。EPO と関わらせてもらえると面白かったし、よかったと思う。皆さんすごく忙しいと思うので、1～2 つを関わらせてもらえるといい。EPO の主体の事業と枝葉の事業と分けていけばうまくできていくと思う。ここでつくったシステムを地域にも提案することは EPO の役割としても大きいと思う。

矢口氏

情報やノウハウをおろしてもらえれば、やりたい、できる人たちに情報を提供できる。拡大していこうといった時にそのようなやり方がいいと思う。そのようなことであればできると思う。

水上氏

運営協議会が主体になって色々なしくみづくりするところだ、と聞いていて感じる。ある NPO や企業が何かやろうとした時に協働のモデルを提供できるといい。地域のコミュニティや限定したモデル、概念モデルになってしまいがちである。その協働のモデルづくりは運営協議会が行う必要があるのかどうかはあまり分からない。本当にやりたい人がやればいいと思う。毎回同じことを言っているが、何のためにやるのかをはっきりしたい。現状や課題把握ができていないのではないかな。現状や課題把握ができれば何をやるのかは分かると思う。この会が何をやるのか分かっていない状況で評価以前問題である。

北陸経済連合会と 3 県の環境部で県境を越えて取り組める環境問題がないかということで考えているがなかなか難しい。バイオマス発電等の問題で勉強会を実施したが、政策・運用部門等で課題がでている。あるイベントでは会場に電気バスをもっていき、帰りに電気バスに乗ってもらうなどのことを行った。この運営協議会ではどこの部分でどこまでの話をすればいいのかを事前に決めてもらえるよい。時間がない中なので、お願いをしたい。

三國氏

イベントをやっている時代ではない。勉強もいいが、何のための勉強会かを考えないといけない。新しい何かを入れないと他と変わらない。小さなものでいいから次の年も次の年もつながるように一つ一つ成果・実績を出していくことをやっていかなければいけない。期間で役所の人は変わるので、長い目を見ると NPO の人が中心になって行っていく。もう世界の流れから考えてイベントや勉強会ではない。やらなければいけないのは、役所に提案して市民にどのような影響を与えていくかという法律や条例という点である。

武隈氏

EPO 中部自身の目的が分からない。協働の取り組みの協働事例をつくり、情報・ノウハウの提供をいただきたい。NPO の担い手に拡がりをつくっていき、その中で企業や行政と連携をする。人材育成事業の担い手という点で普及啓発や事業をやる際にも環境に詳しいゆるやかなネットワークをつくっていく。データベース的な構築も考えられる。

石原氏

具体的な事業についてイメージがわいていない。組織全体のミッションとしても根本的なところで決まっておらず混乱をしている。運営協議会として具体的な部分をテーマにさせていただいた方が具体的なことがいえる。協議会を実のあるものにしていこうと思えば何を議論にし、何に対して意見を求めるのかを明確にさせていただいたほうが方もう少し意見がいえると思う。

増田氏

行政の立場でここにいる価値を考えるとよく分からないというのが率直な考えである。来る以上は何かを持って帰りたい。3 県で地球温暖化の取り組みを行われたという話があったが、省エネ関係では 3 県 1 市ですでに実践している。例年同じやり方でポスターを貼ったりしている。地域割の部分や新しいことに変わっていくことがとても行政の苦手としているところである。そういった時に 3 県 1 市で広域に行わないといけない際に EPO 中部を通してこの運営協議会に投げかけるということはお互いに意味のあることだと思う。活用の仕方や利用を考えたい。名古屋市では動かないところを環境省、運営協議会委員というかたちで動く可能性も広がる。

内輪氏

率直に言えばみえない。同友会にはノルマ、補助金など一切ない。やりたい人がやる。事業報告書には横文字が多いのでしっかりとした日本語を使って欲しい。

千頭氏

運営協議会は最高意志決定機関であると萩原さんがいわれていた。運営協議会は何をする組織かといった問題をつきつけられた。何人かで運営協議会はどうあるべきかをまとめるチームを萩原さんのこの指とまれ方式で実施したい。駒宮さん、も萩原さんもメンバーになってほしい。

三國氏

運営協議会のあり方がしっかりしないと内部評価どうのこうのではない。

萩原氏

平行して実施しないといけない。

児玉氏

運営協議会から出てきたものをものさしにしないといけないのでは。とにかくものさしづくりをしないといけない。

萩原氏

千頭さん、駒宮さん、私のとりあえず３人で行う。

千頭氏

行政の方も入ってもらいたい。萩原さんからの指名がきたら断らず運営協議会委員の責任をもって関わることに同意してもらいたい。

チーフプロデューサーともう少し小さな単位の話合いの場が必要だと思う。しかし、今の仕事の進め方では難しいと思うので、仕事の仕方は大胆に見直したほうがよいと思う。来客への対応の仕方は効率的にいくように見直した方がよい。

新海

委員の人たちにやりたいことをこのEPO中部を使ってやってほしい。この２重構造の中でどのようなバランスをとっていかかが重要だと思う。EPOとしても内部評価を行っていき、運営協議会の評価とも合わせていきたい。お忙しいとは思いますが、よろしくお願いします。

千頭氏

今回の全体の運営協議会は２月北陸だと思う。全体では集まれなくても、関係者で意志疎通を図っていくことも行っていく必要があると思うので新海さんの方から連絡をしてもらおう。

5. 閉会

あいさつ：永島氏

環境省の立場としては枠組み、外部資金の導入等は除々にできてきたと思うが、もう一つの協議会委員としての役割はほとんどできなかった。事務所の中も各課で事業を抱えていて、それをパートナーシップに基づいて行えばうまく概念レベルで分かるが、それを協議会の場に持ち込むことができなかった。直接担当していない面もあるが、手間がかかるのでなかなか持ち込むことができなかった。それぞれの事業があってもこの場にもってきてもうまいだろう、というのがEPOの理念だと思うが、この壁をやぶれなかった。難しかった。できることはあると思う。それぞれ事業に予算がついていれば、この場で一つの題材として実施できる可能性もあるので、環境省としてはEPOという場を大切にしていけると共に、パートナーシップにつながる事業も考えていきたいと思う。ありがとうございました。

EPO 中部事業報告（2007年8月）

【平成 19 年度 8 月事業報告】

平成 19 年度中部環境パートナーシップオフィス運営業務（8 月）は、夏休みの環境学習の実践、下半期事業の企画立案に主に時間を割いた。また企画にあたって現場の情報収集や先進事例から学ぶための視察をした。

【8 月事業報告】

8 月 1 日	中部電力㈱と三重県・EPO 中部打ち合わせ	新海・鵜飼
8 月 3 日 *	ユニー㈱環境学習 石川	新海・宇野
8 月 4 日 *	ユニー㈱環境学習 福井	新海・宇野
8 月 6 日	環境教育リーダー研修 長野打合せ	新海
8 月 9 日 *	ESD-T 会議	桜井・宇野・新海
8 月 18 日 *	ユニー㈱環境学習 長野	新海・宇野
8 月 24 日 *	春日井 ESD プロジェクトワークショップ	新海・桜井
8 月 25 日 *	ユニー㈱なごや環境大学講座	新海・宇野・桜井
8 月 27-29 日 *	環境教育研修リーダー講座 長野	新海
8 月 28 日 *	地域の中小企業のためのCSRセミナー	鵜飼
8 月 30 日 *	アサザ基金視察	新海・鵜飼
8 月 31 日 *	なごや環境大学「志」講座 青山 EPO・GEIC・ESD-J 打ち合わせ	宇野 鵜飼

*は報告を掲載します。

【9 月事業予定】

9 月 3 日	かすがい ESD プロジェクト会議	新海・桜井
9 月 4 日	リコー中部㈱エコひいき打ち合わせ	新海・鵜飼
9 月 6 日	三菱 UFJ リース打ち合わせ	新海・鵜飼
9 月 7 日-8 日	なごや環境大学共育講座オリエンテーション	新海
9 月 8-9 日	ESD-T 合宿 IN 加子母村	新海・桜井・宇野
9 月 10 日	松下絵画コンテスト審査会 かすがい ESD プロジェクト会議	新海 新海・桜井
9 月 13 日	ESD-T 担い手会議	新海・宇野・桜井
9 月 14 日	なごや環境大学志講座	宇野・鵜飼
9 月 22 日	ESD-T 会議	桜井・宇野・新海
8 月 18 日	ユニー㈱なごや環境大学講座	新海・宇野・桜井
8 月 23 日	環境ディなごや	新海・桜井・宇野
8 月 26 日	なごや環境大学共育講座チーム会議	新海
8 月 28 日	EPO・GEIC 運営協議会	新海

○今後の検討事項

- *運営協議会の議論をへて、下半期何を実現するか、プロジェクト・事業の整理
- *運営協議会がどうあるべきか、役割などを明確にし、かつ内部評価の評価軸の設定をし、運営協議会としてすべき事業を決定する
- *運営協議会のメンバーニーズにあった事業展開の検討
- *運営協議会内でのプロジェクトベースによる小チーム制の検討。

【中部環境パートナーシップオフィス 8月月報】

8 月		来館者数 (相談・問合せ)	電話 (相談・問合せ)	相談・問合せ内容	スタッフ数
1	水	6(3)	10(8)	中部電力・三重県とのミーティング	4
2	木	5(3)	15(12)		4
3	金	3(1)	8(8)	ユニーお店探検隊 in 金沢 大学生の研究相談	4
4	土	0(0)	3(3)	ユニーお店探検隊 in 福井	3
5	日			なごや環境大学合宿	1
6	月			長野県環境教育ミーティングの打合せ	1
7	火	4(2)	16(14)		4
8	水	2(2)	9(8)	ユニーお店探検隊 in 岡谷の下見	3
9	木	8(7)	13(11)	ESD=T 担い手会議	3.5
10	金	1(1)	2(0)	ミーティング	4
11	土				
12	日				
13	月				
14	火				
15	水				
16	木				
17	金	0(0)	5(3)		4
18	土	0(0)	3(2)	ユニーお店探検隊 in 岡谷	3
19	日				1.5
20	月			セイコーエプソンとのミーティング（長野）	1
21	火	5(3)	1(0)		4
22	水	7(5)	15(14)		3
23	木	9(4)	8(7)	東邦ガスエコッキングミーティング 緑の審議会 ESD かすがい KIZUNA 打合せ	4
24	金	3(0)	12(10)	なごや環境デー説明会 21 世紀国家戦略ミーティング	4
25	土	0(0)	2(2)	ユニーお店探検隊インタープリター養成講座	4
26	日				
27	月			長野環境教育ミーティング	1
28	火	8(5)	13(10)	長野環境教育ミーティング CSR セミナー	4
29	水	4(3)	11(10)	長野環境教育ミーティング	3
30	木	6(4)	9(7)	アサザ基金視察	3.5
31	金	18(15)	18(15)	ESD-J とのミーティング ワールドコラボフェスタのミーティング 志講座	4
合計 平均		89 名/19 日 4.6/日	173 件,		75.5 人 3.4 人/22 日

ホームページアクセス数：15,370 件

【中部地区の環境関連団体の基礎資料の収集・管理】

＊8月期に収集した資料 行政関連：21 種 企業関連：8 種 NPO関連：5 種 その他：3 種 計：37 件

タイトル	年度	発行	備考
森が大好きな子供たちの 森の紙芝居・森の歌大募集！！	2007	特定非営利活動法人地球緑化センタ ー	A4 4P 日本語 2007 発行
なんじゃもんじゃ通信 Vo.19 No.4	2007	名古屋自然観察会 名古屋支部代表	B5 16P 日本語 2007.8.5 発行
平成 19 年度豊田市自然観察の森 森のセミナーの ご案内	2007	豊田市自然観察の森	A4 1P 日本語 2007 発行
あいち海上の森大学～万博継承事業～ 開講案内	2007	あいち海上の森大学事務局	A4 1P 日本語 2007 発行
ムーアアカデミー通信 SUMMER 第 3 号	2007	あいち海上の森センター（ムーアアカ デミー）	A4 4P 日本語 2007 発行
雑木林 2007 年 8 月号 Vol.201	2007	豊田市自然観察の森	A4 4P 日本語 2007 発行
清流青湖 131 号	2007	（社）日本の水をきれいにする会	A4 20P 日本語 2007 発行
平成 19 年度 省エネルギー普及のための人材研修 のご案内	2007	経済産業省資源エネルギー庁	A4 6P 日本語 2007 発行
イベント案内 オニバスが花を咲かせます。	2007	アクアワールド水郷 パークセンタ ー	A4 4P 日本語 2007 発行
eco japan cup 2007	2007	環境ビジネスウィメン/三井住友銀行 /環境省	A4 1P 日本語 2007 発行
みんなのかんきょう 50	2007	環境ふくい推進協議会	A4 8P 日本語 2007.7 発行
がらぼうだより vol.134 2007 年 8 月	2007	NPO 法人ガラ紡愛好会	B4 1P 日本語 2007 発行
WHAT' s おしゃれエコ 学生メンバー募集	2007	エコネクスなごや	A5 1P 日本語 2007.8 発行
わくわく畑教室 参加者募集中！	2007	株式会社農協観光	A4 4P 日本語 2007 発行
地域の中小企業のための CSR セミナー	2007	NPO 法人地域の未来・支援センター	A4 1P 日本語 2007 発行
日経BP 環境経営フォーラム 第8期 活動のご案内	2007	日経 BP 社	A4 14P 日本語 2007 発行
なごや環境大学 特別公開講座 「2050 年の地 球・なごやを考える」	2007	なごや環境大学・EPOC（環境パー トナリーシップ・CLUB）	A4 1P 日本語 2007 発行
We Love Nagoya2007	2007	We Love Nagoya 協議会	A4 1P 日本語 2007 発行
ESDを学び交流するワカモノフォーラム	2007	東海・中部「持続可能な発展教育の 10 年」市民推進会議	A4 1P 日本語 2007 発行

環境デーなごや 2007	2007	環境デーなごや実行委員会	A3六折 1P 日本語 2007 発行
おしゃれエコ ～廃油キャンドル&裂き織り～	2007	エコネクスなごや～若い力で名古屋を動かそまい～	はがき大 1P 日本語 2007 発行
美しい地球を子どもたちに～未来の子どもたちの幸せに向けて、私たちにできること～	2007	「美しい地球を子どもたちに」実行委員会	A4 1P 日本語 2007 発行
省エネ家電普及キャンペーン協賛イベント 「幸福のスイッチ」上映会	2007	あいち省エネ型家電製品普及協議会	A4 1P 日本語 2007 発行
2008 SPRING&SUMMER トレンドレポート	2007	プランニングオフィス・ラグーン有限公司	A2 折 1P 日本語 2007 発行
ほらんぼ 2007 年8月号	2007	なごやボランティア・NPO センター	A4 8P 日本語 2007.8 発行
NPO 運営入門講座 NPO 運営の基礎を学ぼう！	2007	なごやボランティア・NPO センター	A4 1P 日本語 2007.8 発行
Green Earth FoE Japan Newsletter January 2007 Vol.23	2007	国際協力 NGO FoE Japan	A4 8P 日本語 2007.7.20 発行
ボラみみ 2007 April No.89	2007	(特定) ボラみみより情報局	B5 14P 日本語 2007.8.1 発行
犬山市市民活動支援センター しみんてい ニュース vol.30	2007	(特定) 犬山市市民活動支援センターの会	A4 4P 日本語 2007.8.15 発行
「ユースワーカー養成講座」への参加者募集	2007	愛知県	A4 6P 日本語 2007 発行
第6回 NGO/NPO・企業環境政策提言集	2007	環境省	A4 324P 日本語 2007.5 発行
2007 年度版 CSR—環境報告書	2007	中央化学株式会社	A4 28P 日本語 2007 発行
環境・社会報告書 2007	2007	株式会社東海理化	A4 42P 日本語 2007.6 発行
環境報告書 2007	2007	株式会社ポッカコーポレーション	A4 30P 日本語 2007.6.30 発行
NEXCO 中日本 環境報告書 2007	2007	NEXCO 中日本	A4 72P 日本語 2007.8 発行
NEXCO 中日本 環境報告書 2007～環境への取り組み～	2007	NEXCO 中日本	A4 8P 日本語 2007.8 発行
日経エコロジー eco September2007	2007	日経 BP 社	A4 162P 日本語 2007.8.8 発行

【主な事業報告】

●アピタ・ユニーお店探検隊 お店を使った子ども環境学習 エコショッピングツアーと「廃油キャンドル」づくり

アピタ松任店×金沢エコライフくらぶ

日 時 2007年8月3日（金）

会 場 アピタ松任店 1Fおよび3F

対象 小学校3年生～6年生の16名

【プログラム】

①お店見学

店舗内の次のところを見学し、ワークシートを埋めながら学習する。

- ・リサイクルボックス：牛乳パック、アルミ缶、トレイなど。リサイクルすると何になるか等も学ぶ。
- ・バイオマスプラスチック：原料がトウモロコシで土に還る。どんなものに使われているかを見学。
- ・バックヤードでの分別：ビニール、汚れたビニール、再生できる紙等の分別。パックの取組を見学。
- ・ゴミ庫：生ゴミ、廃油（冷房の利いた倉庫へ）、ダンボール等。回収業者さんからもご説明を頂く。
- ・計量：ゴミを計量する。なぜ計量するのか等も学ぶ。
- ・オリコン：ダンボール削減のための再利用、折りたたみできるコンテナ。

②リサイクル工作「廃油キャンドルづくり」

お店で出た廃油を使って、端切れの布で飾ったオリジナルの廃油キャンドルを作る。

③環境クイズ

お店にある商品（トイレットペーパー、ノート、洗剤）2つずつを見比べ、どちらがどのようにエコなのかを考える。

④ふりかえり

【お店探検隊を終えてー金沢エコライフくらぶ 青海万里子さんー】

昨年に引き続きアピタ松任店で「お店探検」を実施させていただきました。前半は村椿副店長の解説でリサイクルボックスや店内の見学、バックヤードの分別倉庫などを手際よく案内していただきました。2階に上がってワークシートの記入を仕上げる際に、同行していただいた廃棄物処理業者のトスマックさんにもお話をお聞きすることができ、子ども達は「ごみ」を出した後の行方についてイメージできたのではないかと思います。

エコクラフトは惣菜に使用した天ぷら油を使った「廃油キャンドル」作り。固まるまでの時間を使って、店内からお借りしたトイレットペーパー、ボディシャンプー、ノートを見比べて、マークや表示の違いを見つけるワークを行いました。ボトルと詰め替えの風袋比べは、子ども達の反応を見て「これは大人にも使えるぞ」と内心にんまり。お店とNPOの協働は、参加させていただく私たちにとっても刺激と発見に満ちた体験です。

【環境学習“お店探検隊”を終えてーアピタ松任店業務副店長 村椿洋子さんー】

8月3日（金）、子ども環境学習「アピタお店探検隊」を「環境省中部環境パートナーシップオフィス」と「金沢エコライフくらぶ」さんのメンバーの方々と共に初めて体験させて頂きました。小学校3年生～6年生の16名の皆さんには、15分前に全員集合して頂き、予定より早く始まりました。リサイクルBOX→フルーツ売場→卵売場→バックヤード（ゴミ分別・オリコン）→ゴミ庫と店内の一部をご案内し乍ら若干の説明を致しました。16名の皆さんの真剣なまなざしに見つめられ、冷汗をかき乍ら「アルミ缶・牛乳パック・トレー・ペットボトル」の1ヶ月の回収量と、それが何に再生されるかを話させて頂いた中で、「資源を大切に取る取組」について少しはご理解して頂いたかなと思っています。幸いにも当日は㈱トスマック・アイの福野係長にもご参加頂き、子どもさんの質問にも丁寧に答えて頂き、非常に有意義な2時間になったかと実感しております。

【EPOレポート】

店舗見学では、子どもたちは始めてバックヤードに入り、これまで知らなかったお店での取り組みに感心した様子で、しっかりメモをとっていました。また果物などを入れている容器がバイオマスプラスチックであることの説明を受けると、興味深げに容器を触ったり、写真に撮ったりしていました。

環境のクイズ、「環境にやさしい商品を選ぶにはどうしたらよいか」については、はじめは「何が違うの??？」という様子でしたが、じっくり商品を観察して「あーっ、こっちがエコだ!」といった声があがっていました。比較の仕方を学んだというよりは、2つの商品をじっくり観察し比較することで選択の答えが出てきたようでした。買い物をする時に「エコな商品を選ぶ」ことを意識すれば行動につないでいけるし、どんなところで判断をすればよいかを実感できたと思います。

アピタ松任店での子どもお店探検隊も 2 年目ですが、担当副店長さんは変わられるので、地元金沢エコライフくらぶさんにご協力を頂き取り組むことで継続性が出てくるように思います。これからも地域の店舗・NPOと継続して環境への取り組みを続けてもらいたいと思います。



●アピタ・ユニーお店探検隊 お店を使った子ども環境学習 エコショッピングツアーと「風呂敷リュック」づくり

アピタ福井大和田店×エコネットふくい

日時：2007年8月4日（土）

会場：アピタ福井大和田店 1Fおよび2F

対象：小学校3年生—6年生 18名

【プログラム】

①お店見学

店舗内の次のところを見学し、ワークシートを埋めながら学習する。

- ・リサイクルボックス：牛乳パック、アルミ缶、トレイなど。リサイクルすると何になるか等も学ぶ。
- ・バイオマスプラスチック：原料がトウモロコシで土に還る。どんなものに使われているかを見学。
- ・バックヤードでの分別：ビニール、汚れたビニール、再生できる紙等の分別。バックの取組を見学。
- ・ゴミ庫：生ゴミ、廃油（冷房の利いた倉庫へ）、ダンボール等。回収業者さんからもご説明を頂く。
- ・計量：ゴミを計量する。なぜ計量するのか等も学ぶ。
- ・オリコン：ダンボール削減のための再利用、折りたたみできるコンテナ。

②やさしい学習1

エコマーク、リサイクルマークなどマークが付いているエコな商品を選び、マイバックを持ってエコな買い物を体験する。

③工作「風呂敷でリュックづくり！」

風呂敷はどんな形にでも対応できる昔の知恵が詰まったエコバック。今回は風呂敷でリュックを作る。

④やさしい学習2

3Rの推進・レジ袋の削減・マイバックの必要性を伝える。

⑤ふりかえり

【ぼくのマイバックを持って エコお買い物 ～エコネットふくい中野佐知子さん～】

エコネットふくいの今年度の活動テーマ「みんなで減らします レジ袋」を生かすことで、企画書を作成しました。昨年の反省から、参加者を獲得することに努力しました。福井市の環境アドバイザーで行った学校の先生、公民館長、市のパートナーシップ会議などをお願いした結果が、実を結びました。

「夏休みの宿題に役立つ」を訴えたため、パネル準備・資料作成にも力を入れました。終了後にパネルをカメラで撮っていた6年生を見て、努力の甲斐が有ったと感動しました。2日後公民館の学習会で「風呂敷のおばちゃん」と声をかけられて、「やった」と思いました。スタッフが気心の知れた皆様であることの余裕が、全力投球出来、昨年の反省が全てで生かされ良かったと思っています。マイク準備以外は。

【環境学習“お店探検隊”を終えて ～アピタ福井大和田店業務副店長 細川幸紀さん～】

昨年に引き続き2回目の開催となった今回、夏休み中で遊びたい気持ちでいっぱいの子もたちが何人くらい集まってくれるのか正直心配でした。ところが定員を超える18名の子もたちが参加してくれてとてもうれしかったです。30℃を超える暑い日に子どもたちは熱心に「環境」や「リサイクル」の話をしっかり聞いてくれました。普段入ることのできないゴミ庫を見学したり、風呂敷でリュック作りをしたりでアッという間に時間が過ぎてしまいました。この体験を日ごろから買い物や生活に活かしてもらえたらと思います。

【EPOレポート】

店舗見学では、子どもたちは副店長さんの説明を熱心に聞いていました。ゴミ庫ではちょうどゴミを捨てにきた職員の方が計

量されていました。そのあたりまえにやっていた姿が印象に残りました。子どもたちはその周りを取り囲んでじっと見ていました。

やさしい学習1では、環境にやさしい商品を選ぶ一つの方法として、マークを見て選ぶことを体験しました。子どもたちは、マークが付いていそうな商品を予想しながらマークを探し、見つけたら「こっちの方がいろんなマークがあるよ！」などとみんなで話していました。

工作では、いろんなパターンの物を包んでいる風呂敷を見てから、リュックを実際に作りました。風呂敷は子どもたちにとって身近なものではありませんでしたが、帰りには作ったリュックをうれしそう肩にかけて行きました。

今回の学習では、子どもたちが地域のおばあさん世代の方と交流できた場でもあったと思います。地域での環境への取り組みを地域で進めていけるよう、きっかけを作っていきたいと思いました。



●第5回 ESD-T 担い手会議 議事録

日時：2007年8月9日（木）18：30～21：00

場所：EPO 中部オフィス

参加者：天野・村瀬・近藤・浅田・古澤・宇野・桜井・新海

議題：1. なごや環境大学申請講座「がっつり ESD」について

2. ワールドコラボフェスタについて

3. もしかして加子母について

4. 下半期活動スケジュールについて他

内容：

1. なごや環境大学申請講座「がっつり ESD」について

- ・ なごや環境大学ハンドブック掲載内容の校正確認をした

2. ワールドコラボフェスタについて

- ・ ちらしに掲載する ESD ひろばの説明文を検討、意見を出し合った。
- ・ コラボで ESD 的な活動をしている人のメッセージを紹介することとなり、今までの事例調査に加えて、新たな事例をみつけるインタビューをおこなうこととなった。19日に愛・地球博理念継承二周年記念事業 市民大交流フェスタ2007があるので、そこに出席する団体の中でインタビュー先を見つけることとなった。インタビューするにあたって必要な準備について話し合った。
- ・ 以上の他にやりたいことや準備については9月の加子母でも話し合いをおこなうことになった。

3. 〈もしかして加子母ツアー〉について

- ・ 最終的に参加できる人の確認をすることになった。
- ・ 2日目は心のアラスカに参加する。

3. 下半期活動スケジュールについて他

- ・ 時間切れで、次回に話し合う。

●アピタ・ユニーお店探検隊 お店を使った子ども環境学習 エコショッピングツアーと「古着を使った裂き織り」体験
アピタ岡谷店×ユニーアピタお店探検隊インタープリター＆EPO中部

日時：2007年8月18日（土）

会場：アピタ岡谷店 1F

対象：小学校2年生～4年生の14名

【プログラム】

①お店見学

店舗内の次のところを見学し、ワークシートを埋めながら学習する。

- ・リサイクルボックス：牛乳パック、アルミ缶、トレイなど。リサイクルすると何になるか等も学ぶ。
- ・ダンボール庫、生ゴミ庫、計量：ゴミを計量する。なぜ計量するのか等も学ぶ。
- ・オリコン：ダンボール削減のための再利用、折りたたみできるコンテナ。
- ・バックヤードでの分別：ビニール、汚れたビニール、再生できる紙等の分別。バックの取組を見学。
- ・バックヤードでの省エネ：「常時電気をつける」「必要な時に電気をつける」カードの紹介。
- ・バイオマスプラスチック：原料がトウモロコシで土に還る。どんなものに使われているかを見学。
- ・エコバック：レジ袋削減のための取り組み紹介。
- ・環境の掲示板：環境への取り組みポスター掲示を紹介。

②エコショッピング・ツアー

指令に従いエコショッピングにチャレンジ。今回はその一つ、一番ゴミがでないおやつを選び、エコバックを使った買い物の体験をする。

③リサイクル工作「古着を使った裂き織り体験」

古くて着なくなった服や端切れ布を裂いて作ったひも状のものを織り、コースターを作る。

④ふりかえり

【ユニーお店探検隊インタープリターの声】

EPOでお世話になり始めてからずっと念願にしていた「子どもたちの環境学習のプログラム」に参加してきました。

私自身、なごや環境大学「ユニーお店探検隊インタープリター養成講座」を受講中であり、今後のプログラムづくりを勉強するためと、子どもたちとのふれあいを楽しみに行ってきました。

長野の自然が織り成す力でしょうか？お店には楽しい県民ソングが流れ、エコショッピングツアーでは子どもたちのグループにいつしか団結力のようなものが！

クラフトのさきおり体験ではコースターをつくる子どもたちの真剣さ、集中力に驚かされました。

あっという間の120分、アレもコレもと思う気持ちをうまくプログラムにしていけることの難しさを学びました。また同時に子どもたちの好奇心の強さ、チャレンジ精神の気持ちを学ぶことができました。

今後のプログラムづくりに役立てることができればと思います。

【環境学習“お店探検隊”を終えて ―アピタ岡谷店業務副店長 岩崎元洋さん―】

アピタ探検隊を初めて開催しました。信州の短い夏休みの終盤（夏休みは20日迄）、宿題の追い込みで忙しい18日に設定した為、何人の小学生が参加してくれるのか不安でしたが、最終的に13人もの方が参加してくれました。

みんな、熱心に話を聞き一生懸命メモをとったりしてくれて非常にうれしく思いました。普段買物の時には入ることのないゴミ庫や倉庫なども見てもらってアピタのゴミや環境に対する取組みを勉強していただきました。工作は、古布でコースターを作りました。みんな一生懸命取り組んでくれました。きっと、おうちへ帰ってお父さんやお母さんにいっぱいお話をして頂けたので

はないでしょうか。

今後ますます大きくなるゴミや環境問題に小学生の頃から関心を持っていただく良いきっかけになればと思います。

【EPOレポート】

子どもたちはお店の取り組みに興味津々でした。リサイクルボックスで牛乳パック、トレイ、ペットボトルのリサイクルについて説明していただいた後、次の場所へ移動するまでにペットボトルをリサイクルして作られたベンチを見ることができましたが、「これがペットボトルのリサイクルで作られたベンチなのか」とばかりに、ベンチに触ったり座ったりしていました。また、副店長さんがゴミの計量やオリコンの折りたたみをやってみたい人を聞くと、必ず何人かが手を挙げて体験をしていました。

エコショッピングツアーでは、好きなおかしを選ぶことばかりでなく、どのおかしがゴミが少ないかもしっかり考えていました。裂き織り体験では、糸の取り方を覚えるまで苦労したようですが、覚えだしたら夢中になって作っていました。時間内に作ることではできませんでしたが、家でつくる中で家族に伝えるきっかけにしてもらえればと思いました。

岡谷店では初めての試みでしたが、副店長さんをはじめ皆さんが準備・実施・片付け等協力してくださいました。これからも店舗の皆さんと地域の方（お客さん）が一緒になって環境への取り組みを進めていただければと思っています。



●環境省モデル地域促進事業 目標共有ワークショップ in 春日井市

日時：2007 年 8 月 23 日（木）20:00－21:00

場所：愛知県春日井市 中部大学

参加者：かすがい KIZUNA プロジェクトメンバー 計 9 名

（中部大学、東高森台小学校、春日井少年自然の家、
ひがたかネイチャー実行委員、日立製作所）

ESD-J 事務局 1 名

EPO 中部スタッフ 2 名（新海、桜井）

合計 11 名

内容： 環境省の国連持続可能な開発のための教育の 10 年促進事業に採択された 10 箇所のうちの 1 地域である春日井の「かすがい KIZUNA」プロジェクトの今年度の目標シートを作成し、全体で共有するためのワークショップをおこなった。定例会終了後に時間をいただき、前担当者の ESD-J 事務局吉沢卓氏と EPO 中部スタッフ二人でおこなった。当初は 2 時間の予定でプログラムを考えていたが、会議の都合で 1 時間となった。そこでメンバー一人ひとりから今年度やりたい取り組みとその理由に焦点を合わせて発言を求めた。こうして全員からお聞きした考えや思いを整理して 2007 年度の目標シートを作成することで、了承を得た。

所感：昨年度から事業が計画されており、メンバー内では既にわかっていたことであったかもしれないが、自由に発言する場を設けたことで、この事業に対する思いなどがその人の言葉で語られ、相互理解が深まったと感じた。EPO 中部が ESD を推進する媒体であること、今後かすがい KIZUNA のサポーター・リポーターでありたいこと、近隣地域で活動しているので要請があればいつでも応援にいけるなど、EPO 中部の役割をご理解いただけたことと思う。今後いい協力関係作りをおこない、ESD を促進する力になりたい。

●ユニー(株)提供なごや環境大学講座

お店探検隊インタープリター養成講座～ショッピングセンターでの環境学習実践～

第3回 【フィールド学習】ショッピングセンターでの環境活動を知る～生ごみ堆肥場と店舗の見学～

日 時：2007年8月25日（土）10:00-16:30

場 所：EPO中部、アピタ瀬戸店

参加者：受講者15名中10名

【スケジュール】

＊オリエンテーション

前回のふりかえり、今講座の説明

桜井温子（EPO 中部）

＊レクチャー『環境学習プログラムづくり①』

桜井温子 新海洋子（EPO 中部）

＊昼食

＊アピタ瀬戸店での『環境学習プログラム体験』

お店探検隊インタープリター・スタッフ ユニー(株)環境部長 百瀬 則子さん

有限会社プランニングオフィス・ラグーン 加藤美奈さん 林由香さん

＊ふりかえり

【講座の様子】

第3回講座の目的は、「環境学習プログラムづくりの視点を学ぶこと」と「ユニー(株)が実施している環境学習の現場を体験すること」です。

◆ワークショップ『環境学習プログラムづくり①』

午前中はミニレクチャー『環境学習プログラムづくり①』を行いました。まずは第1、2回講座の写真スライドショーを見てふりかえり、自分がどんなところにワクワクしたか、どんな発見があったかということを思い出しました。

そして、プログラム企画の素材である「子どもたちに伝えたいこと」について参加者同士で話していただき、「一番伝えたいこと」を紙に書きました。考えるとたくさんの「伝えたいこと」が出てきて、一つにしぼるのに悩む参加者が多かったですが、午後の店舗見学を体験して、「伝えたいことをしぼること」の大切さを感じた方がいました。

その後、環境学習プログラムを体験する前に、プログラムづくりにあたって重要な視点を説明しました。



＜参加者の「子どもたちに一番伝えたいこと」＞

- ・ 環境に興味のない子どもにも興味を持ってもらうプログラムにしたい。伝えたいことは「何故ゴミを分別するのか？」
- ・ 子どもたちに分かりやすく、興味を持つような言葉で伝える。
(プログラムを作る)牛乳パックが紙やトイレトペーパーにリサイクルされるなど、生活に密着したリサイクルの構造などを伝える。
- ・ 子どもの目線になること⇒姿勢も。楽しく簡単にできるんだよということを伝えたい。1日だけ達成感(ヤッター!)を伝えたい。
- ・ ◎やさしさ(人や地球に・・・) もったいないのころ。インパクト(おならの話など)を与える学習。自分の手を動かすクラフト→お土産にもなり、お家に帰ってからも思い出せる。
- ・ くちやーい土から美味しいトマト
- ・ 野菜くず・魚くず→堆肥→野菜(トマト)→野菜くず・・・(3つの循環)。そこから派生して、分別すればこのサイクルにまわせること、そういう野菜っておいしいこと。
- ・ 企業がくるくるがんばってること。(子どもたちに気づいてほしい)
- ・ 企業がクルクル。企業ががんばっていること。→工夫してみたらーいいことがある。
- ・ ①もったいない。②循環の大切さ。
- ・ ふだん食べているものがどこから来ているのか知ること(食)者の大切さを知る。野菜の奥には、一生懸命作っている人がいる。→ムダにしない。食べ残ししない。+α野菜のくずなどからできた堆肥でまた野菜ができています。
- ・ ◎ものを大切に使うこと。子ども達の身近な生活との接点(自分に繋がっている)。(ユニーもがんばっている。)
- ・ <参加動機>担当事業の中で、子どもたちにグリーン購入を伝えるイベントを立てたいので、その勉強のために参加させていただきました。<スライドを見て>消費者が変われば企業が変わるということはよくありますが、ユニーさんのように企業の方から積極的に動き、消費者を巻き込むというのはとても良いと思いました。



＜環境学習プログラムづくりで考えたいこと＞

- ・ まず興味を持ってもらう。(「え、それなにになに・・・??」)
- ・ コンセプトメイク:「伝えたいこと」を絞り込む
- ・ プロセスデザイン:伝えたいことが伝わるように
- ・ リスクマネジメント:子どもにとって…(安全管理等)、ユニーにとって…(「会社の信用に関して」等)、自分にとって…(「集中して企画を行えるように」等)
- ・ プログラムは伝えたいことを伝わりやすくするための道具



◆「ユニーお店探検隊」体験

「ユニーお店探検隊」に子どもたちと同じように参加し体験するため、アピタ店舗へ移動しました。店舗では参加する子ども達を待つばかりに準備されていました。お店探検隊の案内スタッフを行う加藤さんに、どのお店でもできるためにしている準備・役割分担や、実施上注意していることについて伺いました。その後、集合場所に集まり、子どもたちと一緒に「お店探検隊」を体験しました。



＜お店探検隊の準備・役割分担、実施上注意していること等＞

- ・ 名簿は名前、ふりがな、男女、親の携帯が分かるように記入してもらう。
- ・ どのお店の人もできるようマニュアルが用意してある。
- ・ 基本的には 3 人で役割分担（①全体の進行司会、②進行補助・誘導・写真、③受付・証明書等の準備）をしており、誰でもできるようにそれぞれのスケジュール一覧が作ってある。

＜お店探検隊プログラム＞

- ① リサイクルステーション（アルミ缶、トレイ、ペットボトル、牛乳パックの資源回収）
- ② 車椅子専用駐車場、点字ブロック、介添えサービスインターフォン、ハートビル、優先エレベーター
- ③ トレイリサイクルでできたベンチ
- ④ ゴミ庫（ゴミの分別）・ゴミの計量（ゴミの計量体験）
- ⑤ 生ゴミ処理機（処理後の生ゴミを触る体験）
- ⑥ 発泡スチロールの裁断・圧縮機（裁断体験）
- ⑦ ダンボール庫・オリコン（折りたたみ式コンテナ）
- ⑧ ばら売り・バイオマスプラスチック（果物・卵）
- ⑨ 詰め替え用シャンプー、トイレットペーパー（牛乳パックリサイクル）、固めるテンブル、レンジカバー（アルミ缶リサイクル）、水切りネット（環境に優しい商品探検）
- ⑩ 環境ラベル探し（エコマーク、グリーンマーク、再生紙使用マーク、ペットボトルリサイクル推奨マークの付いている文具探し探検）
- ⑪ ノーレジ袋キャンペーン・食品くずサイクル（食品くず→堆肥→大根の栽培→刺身のつま→食品くず…のサイクル）の説明



- ⑫ 休憩（アルミ缶は帰りに分別してもらう）
- ⑬ 環境ラベル、ワークショートの確認
- ⑭ オリジナル風呂敷づくり、お店探検隊証明書お渡し



◆ふりかえり

EPO 中部に戻り、「ユニーお店探検隊」を探検してのふりかえりを記入し、2つの班に分かれてプログラムを実施する際に大切なことや感想を出し合いました。そして、それぞれの班で出たことを互いに発表しました。

(1)

- ・ 現場での体験ができてよかった。行ってみると面白い。
- ・ 「何を伝えたいか」をきちっと持っていく必要がある。
- ・ 10人くらいで精一杯。人数って大事。
- ・ タイムスケジュールを作っておかないとすぐ時間が経ってしまう。
(ワークシートというツールがあったからよかった)
- ・ 自分に「誰でもできるプログラムにする」という視点が抜けていた。←マニュアルがあった。
- ・ 言葉の置き換えがあった。Ook gは具体的にどれくらいの数か。
- ・ 子どもたちへの問いかけが必要(子どもの目線)
- ・ 百瀬さんのエッセンスを取り入れたい。「家でやってね!」などの問いかけなど。
- ・ 「やりたい人?」と聞くとみんな手を挙げる。→①そういうことを想定してやる必要がある。②みんなが参加できるプログラムに!
- ・ 実物を見せたりして興味を引いていた。
- ・ 子どもの反応がかわいい。←クイズ形式、ポイントを繰り返して言うなど工夫があった。
- ・ マークを探す探検など面白いやり方だと子どもは夢中。
- ・ 年齢が違う場合、伝わるのが違うのでどうやるのがいいのだろう?



(2)

- ・ 子どもに名前では呼びかけていた(〇〇くん)、答えるとほめる一心が開く、しゃべりやすいアプローチ
- ・ 子どもにとってわかりやすい言葉で説明することが大切。
- ・ 準備がよくできていた。
- ・ マニュアルがしっかりしていた。役割分担。
- ・ 子どもたちが感じたことを聞く場や「探検する」「ワクワクする」要素が大切。
- ・ 子どもたちはマニュアルチックに慣れていると再認識。
- ・ 流れ的に分かりやすい。リサイクルステーション→バックヤード→



お店の商品

- ・ 子どものペースに合わせたスピードが重要。
- ・ たくさん伝えるのではなく、絞って伝えたいほうがよい。
- ・ 子どもたちがダレない時間配分や気遣い。(ジュース、クイズ形式の質問、ゲームにする)
- ・ 聞いているだけでなく随所に体験。エコマークを探す時よく探していた。
- ・ 発砲スチロールを砕くなど自分で体験できたのが〇→もっとたくさんの体験(わざとダンボールをくずして積む:やる人の大変さを知る)
- ・ お客様の動きとぶつかる場面があり、どちらかを優先するか、割り切ることが必要。→多少は仕方がない。

<まとめ>

今日はユニー(株)が実施している環境学習プログラムを体験しました。ユニー(株)がお店側の立場で作っており、ユニー(株)が伝えたいこと、取組みをもれなく伝える内容になっていました。今日のユニー(株)のプログラムを消化し、「自分たちが子どもたちに伝えたいこと」が伝わる環境教育プログラムを次回仕上げてます。

今日みなさんに出していただいた感想のキーポイント。

- ・ リスク管理
- ・ 事前準備(時間配分・ペース・内容の盛り込み方、人数)
- ・ マニュアル→誰でもできるプログラム
- ・ 子どもたちにどう伝えるか→「問いかけ(穴埋めでも問いかける、クイズ形式)」と「体験(みんなが参加体験できるという)」で、子どもがやりたくなるような形にしていた。
- ・ どんな言葉を使うか→分かりやすく伝えていた。年齢が離れていた場合の方法は?
- ・ 「伝えたこと」をしぼるのは大切だ。

【所見】

「お店探検隊」では、子どもと一緒にインタープリターの話にじっと耳を傾けていました。プログラムの流れ、環境への取り組みや環境にやさしい商品の見せ方、プログラムの準備、子どもへの話し方、子どもたちの反応、裏方での仕事など、いろんな場面、いろんな視点を見て考えました。午前中に考えた「プログラムをしぼること」の大切さを再度認識した方もいらっしゃいました。

また、午前中のワークショップ「環境プログラムづくり」とEPO 中部に戻ってからの「ふりかえり」では、参加者のさまざまな意見を聞くことができ、多様な視点や気づかされた点が多くありました。

いろいろ見て体験し、参加者に話す材料や方法が蓄積されてきているように思います。人それぞれ目をつけたところも違うので、次回プログラムを作るにあたり、さまざまなプログラムやプログラムを作る上でのアイデアが出て、互いに学びあっていければと思います。

●平成 19 年度環境教育指導者育成事業 環境教育リーダー研修基礎講座～地域と子どもを育てよう～ 報告

日程：2007 年 8 月 27 日（月）～29 日（水）

会場：長野県総合教育センター

主催：環境省・文部科学省

【企画目的】

今日の環境問題を解決し、自然と共生する持続可能な社会を構築していくためには、環境に対する国民の意識を高め、一人ひとりが環境に配慮した行動をとることが必要であり、その基盤となる環境教育・環境学習の推進が重要である。このため、環境教育・環境学習を推進する人材として今後重要な役割が期待される学校教育及び地域の活動実践リーダーを対象に、基本的知識の習得と体験学習を重視した研修を行い、指導者としての能力を養成するとともに、参加相互の交流によりパートナーシップ構築の礎を築き、もって学校の児童生徒や地域の人々に対する環境教育・環境学習の推進に資する。

【研修内容】

環境教育・環境学習に関する基本的知識の習得

学校他地域における環境教育・環境学習のすすめかた

体験型環境教育プログラムの作成・実施

【スケジュール】

1 日め：8 月 27 日（月）

＊開校式

＊講座Ⅰ 基調講演「地域と子どもを育てる環境教育」 渡辺隆一氏（信州大学教育学部教授）

問題提起/事例発表

小室邦夫氏（長野県教育委員会事務局文化財・生涯学習課）

「豊かな人間性と生命尊厳の心を育てる環境教育～生徒主体による学校づくりと地域づくり～」

桑田慎也氏（㈱ピッキオ・ユニットディレクター・取締役）

＊交流会

2 日め：8 月 28 日（日）

＊講座Ⅱ：分散会

①地域をデザインする～子ども達に暮らしの文化を伝える～

②体験学習の場づくり～子どもひとりひとりが本当に体験する～

③信州らしいエコ活動～地域の課題に関わる環境教育～

④環境教育の有効性～子どもが変わる環境教育～

⑤企業と子ども～子どもや学校を支援する企業～（新海担当）

⑥自然を守る～地域と自然の中で子どもを育てる～

＊講座Ⅲ：自然体験（林業総合センター）

＊講座Ⅳ：分散会つづき

＊講座Ⅴ：全体会

3 日め：8 月 29 日（水）

＊講座Ⅵ：学習プログラム・分散会ごとの提案の共有（新海担当）

＊閉校式

【参加者】

教育・学校関係 23 名/ 一般 25 名 / 講師・助言者など 10 名 / 運営スタッフ 10 名

【新海担当分散会の報告】

テーマ：企業と子ども 子どもや学校を支援する企業

ゲスト：セイコーエプソン株式会社 経営戦略室 信頼経営推進部 課長 河口 豊 氏

ファシリテーター：新海洋子

【ねらい】

セイコーエプソン(株)では、kids ISO14001 プログラムを活用して社員の子どもや地域の小学校に、実践的な環境教育のサポートをしている。地域により豊かな環境教育が展開されるよう成功要因と課題を把握し、また分科会参加者の事例と重なり合わせ、地域における今後の環境教育のありかた、進めかたを模索し提案をつくる。

【スケジュール】

●オリエンテーション

分科会のねらいの紹介/ゲスト紹介/参加者自己紹介

●実践事例の紹介「企業と子ども」

- ・会社紹介（エプソンの環境活動に対するポリシーとスタンス）
- ・Kids ISO プログラムの紹介
- ・Kids ISO プログラムのエプソンの取り組み経過

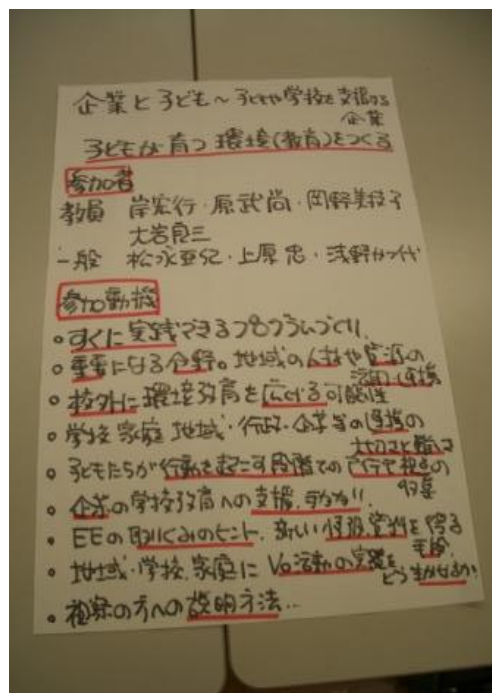
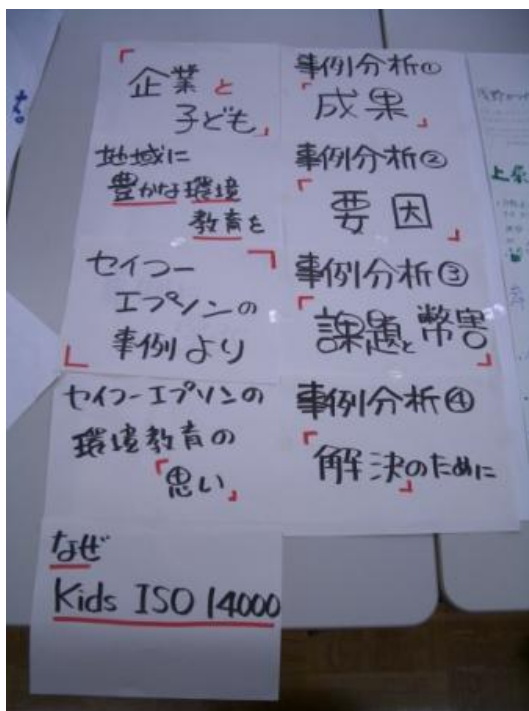
●事例分析のための討論

論点（案）

- * 事例で得られた成果は何か
- * なぜそれは成功したか その要因はなにか
- * 現在の課題はなにか 何が弊害になっているのか
- * その解決には何が必要か

●子どもが育つ環境（教育）を作るための提案づくり

【プログラム内容】





まずにこの分科会のねらいの説明。セイコーエプソン(株)の事例を素材に事例の成果と課題を把握し、「子どもが育つ環境（教育）をつくる」提案をつくることを共有した。

その後自己紹介とこの分科会に希望を出された理由をお聞きし、参加者のニーズに合わせながら分科会を組み立てていくことを説明した。

次にセイコーエプソン(株)（以下エプソン）河口さんからのプレゼンテーション。エプソンの環境理念・環境活動方針、事業の一つである Kids ISO プログラムについて伺った。



その後参加者のこの事業の成果と課題を抽出した。

成果としては、

- 1) Kids ISO プログラムを媒介に自治体と学校と企業をつなぎ、それぞれの役割分担のもと事業が展開されていること
 - 2) 子どもと企業・社員をつないでいること
 - 3) 子どもの学びが家庭に影響を及ぼしていること
 - 4) 継続的な学びとなっていること
 - 5) プログラム、およびプログラムを実施する地域のしくみの両輪がPDCA サイクルでうまくまわっていること
 - 6) 学びが行動につながっていること
- などがあげられた。

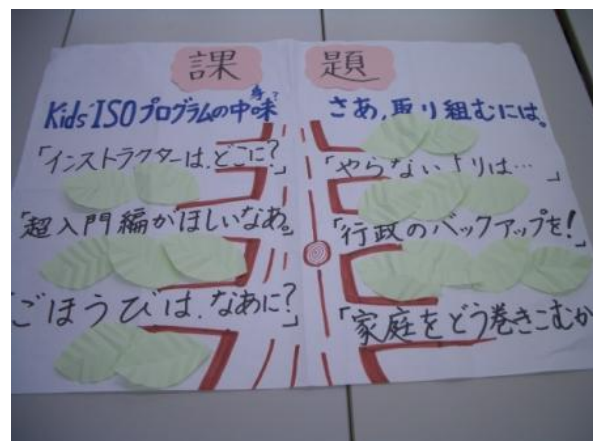


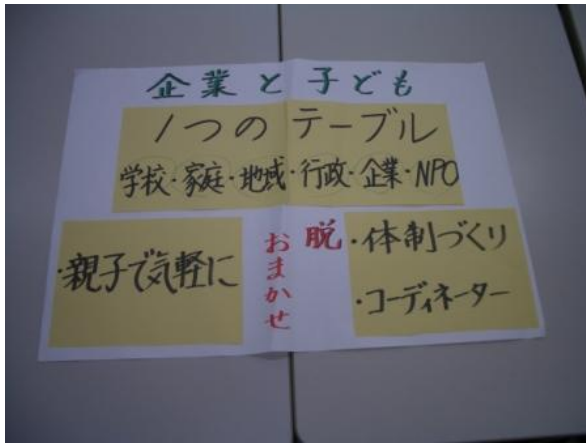
KidsISO プログラムの内容についての課題は

- 1) インストラクターがどこにいるなど情報が少ない
- 2) 入門編よりもっと易しいプログラムがほしい
- 3) 実施するためのインセンティブをつくること

この学びのしくみを実際に自分の現場で実施しようとした際の課題については、

- 1) 学校だけではできない。行政とくに教育行政のバックアップをえるか
 - 2) 家庭をどう巻き込むか
- といったことがあげられた。





最後のセッションは、子どもが育つ環境（教育）を作るための提案づくりを実施した。

重要なことは、脱おまかせ、学校におまかせ、先生におまかせ、行政におまかせ、ではなくそれぞれが強みをいかして、学びのしくみづくりに参加すること、を確認した。また、親子で気軽にというスタンスも大切あることを共有した。実際に実施する際ためには、まず学校・家庭・地域・行政・企業・NPO が一つのテーブルを囲み本音で話しをすること。その体制、コーディネーターが必要であることを提案としてまとめた。

【分科会所見】

日頃企業の社会貢献活動に関する情報を得ることが少ないなか、この分科会では企業および学校現場での環境活動の現状について情報共有をすることができ、多様な人が集まると情報があふれ、そこから新しい価値が生み出されることを体験した。その結果出された提案が、「一つのテーブルを囲む」である。

参加者からは、「KidsISO プログラムのもつ学校教育への可能性を知るきっかけとなった、企業が社会貢献を積極的に考え学校と連携をとっていくことによって良い方向に向かっていくと思った、具体的に企業がどう関わっているかを知るよい機会となった、現場の教師の考えを聞くことができてよかった、日常体験を聞くことができてよかった」という感想をいただいた。

各参加者が現場に戻ってからこの体験をどう活かすか、そこが重要である。少しずつでも体験したこと、気づいたことを具現化していただきたいと願う。



小学校教員	岡野美枝子さん
小学校教員	岸 宏行さん
教育委員会	大岩 良三さん
県職員	松永 亜紀さん
NPO	浅野かつ代さん
個人	上原 忠さん

【全体についての所見】

当初、教員と一般の方の研修ということで、コンセプトを絞ることがとても難しく当日の進行を心配したが、1 日めに参加者の皆さんの思いや問題意識をお聞きする中でその心配は吹き飛んだ。「普段の業務や活動の中で、どうにかしたい！という思いをもっている、そのしくみをなかなか一人では、変えていくことができない。けれど、その必要性を共有し、確認し、ビジョンをもつことで、大きなエネルギーを生み出していく。」そのことを参加者が共有し、1 日めにそのエネルギーの源が湧き上がり、2 日めに蓄積され、3 日めに「連帯」のようなものを生み出した感がある。さらに「こどもが育つ環境」というキーワードを軸にして三日間議論があった中で、「人は今の状況からの変化を求めていること」を再確認することができた。これをいかに継続させていくか、が次のステップである。

地域の中小企業のための CSR セミナー

日時：2007 年 8 月 28 日（火）

場所：東桜会館 1F

主催：NPO 法人地域の未来・志援センター

地域協力：サステナブル経営研究会

協力：日本財団公益コミュニティサイト CANPAN、ダイバーシティ研究所

後援：環境省中部方環境事務所、愛知県中小企業家同友会、名古屋市中企業振興センター

プログラム

14：00- 開会、挨拶

14：10- 基調発題 「今、地域の中小企業が CSR に取り組むということ」

田村 太郎氏（ダイバーシティ研究所）

14：30- 「地元企業の CSR とサステナブルな経営 ～環境省 06 年度調査より～」

村田 元夫氏（サステナブルな経営研究会）

14：40- 地元企業の取り組み事例紹介

岩村 龍一氏（㈱コミュニティタクシー）

尾鍋 哲也氏（㈱尾鍋組）

平沼 辰雄氏（㈱リバイブ）

15：10- パネル討論「この地域で中小企業が CSR を推進するためには」

コーディネーター：村田元夫氏

パネリスト： 岩村 龍一氏（㈱コミュニティタクシー）

尾鍋 哲也氏（㈱尾鍋組）

平沼 辰雄氏（㈱リバイブ）

加藤 啓介氏（サステナブル経営研究会）

萩原 喜之氏（地域の未来・志援センター）

16：20- 日本財団公益コミュニティサイト CANPAN CSR プラスのご案内

木田 悟史氏（日本財団経営企画グループ CANPAN）

16：30- 基調講演「中小企業の社会的責任への取り組みについて」

関 正雄氏（㈱損保保健ジャパン CSR・環境推進室）

17：00- 閉会、挨拶

所見（EPO 中部担当者）

地域の中小企業の CSR の在り方を探るべく、取り組み事例の紹介や意見交換がなされた。パネリストとして登壇されたどの企業も“CSR”にあえて取り組んでいるわけではなく、本業が環境保全に寄与していることや、以前から当たり前に実施していることが CSR として評価されているケースなど、“後付け CSR”が見られた。つまり、根本的な地域における企業のあり方が、今の時代の CSR に一致したということであろう。

「企業は株主の為ではなく、社会の為にある」、「教育は中小企業にも役割があり、中小企業が変われば社会が変わる」、「企業に倫理を、職場にココロを」といった、企業の本質の声があがった。

また、このような企業の存在が社会に影響を及ぼしていくために、情報の伝達の方法が重要であるとの意見も出た。一般的には、マスコミを通じて社会に発信することが大半だが、マスコミの役割を NPO が担い、社会に発信していくことで地域に与える影響もあるということである。社会において、小さな力で大きな影響を出す NPO の役割も必要であると話し合われた。

社会貢献という枠を超えた企業のあり方は、他の企業やこれから立ち上げる企業にとって、イノベーションしていくための先導役となる。また、サステナブル社会の実現に向けた存在になるように、社会基盤の質の向上と既存のしくみをイノベーションしていく NPO 等の存在も同時に求められているのではないか。

記録・報告

担当 鵜飼 哲

ンド化を目指すなど枠組みのない取り組みは続いている。NEC との協働事業は 3 年目を迎え、田んぼ作りや農作業、酒造りに参加した社員や家族は延べ 3000 名を超える。これは単なる社会貢献事業ではなく、本業を通して環境再生の戦略的機能を組み込み、地域に則した循環型社会を意識させたマーケティングビジネスモデルを実践する先進事例にもなっている。

また、流域の地場産業との連携もあり、一般ボランティアが参加する“一日きこり”の活動も生まれ、間伐が森林再生に役立っている。また、漁業者と連携して外来魚の駆除も行われ、魚粉した肥料を有機農業で菜の花を育て、食用油を作りバイオディーゼル燃料として活用し、バスやトラックを走らせる目標もある。



NEC 田んぼ作りプロジェクト展開図

社会に展開し続ける中心のない動的ネットワーク

文脈づくりをイノベーションし続ける

プロジェクトが始まって 11 年、これまで関わった人は述べ 13 万人以上になる。何がこれだけの人々との協働を可能にしたのか？

アサザプロジェクトが湖域各所で様々な事業を展開しているが、そのベースには「社会に展開し続ける中心のない動的ネットワーク」、「文脈づくりをイノベーションし続ける」といった発想が基軸となり、社会へ独創的なプロジェクトを創出している。

従来の事業の多くは、行政や市民団体といった既存の枠組みをもった組織を中心に事業、ムーブメントの展開を図っていくため、多様性ある主体的な広域のネットワーク構築を実現されていないケースがある。組織の縦割りを超えられないことや、組織と組織の間を紡ぐこと、新たな文脈をつくりだすことなど既存の枠組み主導の展開では埋められないことが多々ある。

今あらゆる分野に求められていることは、自分たちで新しい枠組みをつくり、社会に受け入れさせていくことである。自分たちの枠組みは自分たちで創っていくことで、新たな価値の発見し、ネットワークも広がる。その枠組みを社会に受け入れさせていく。枠組みを説得力のある、かつ科学的根拠のあるものにすれば社会の潜在性は広がる。

その説得力の一つは、思想や理念、組織中心ではなく、コト・モノが中心であり、多様で分散したひとりひとりの個が「場」として機能する、「中心のない動的ネットワーク」の展開である。

コト・モノが新たな価値や意味を創造すると共に、個でもあり、組織でもあり、社会でもある場に創造される付加価値の連鎖を社会に生み落としていく。アサザプロジェクトはこの中心のない動的ネットワークの展開を通し、湖や流域を一つの面として機能させ、問題解決へ導いている。



熱い眼差しの飯島代表



霧ヶ浦湖畔にて

二つ目は事業そのものの力である。中心のないネットワークの中で事業を生みなおす。それらの流れの中にある意味内容のつながりがあいまいな文脈に新たなイノベーションを起こし続けていく。このパラダイムの変換により、強い場が生まれ、事業そのものに力が宿る。

三つ目は「否定をしない強さ」である。ある意味、霞ヶ浦は現代社会の行政や研究機関の縦割り構造を抜けられない負の限界を明確に示す場所でもある。アサザプロジェクトはその飽和状態になっている限界領域をパラダイム変換させ、縦割りの壁を溶かしていく発想だ。縦割りの中では、組み替えが起きず、機能も活かない状況で、硬直化したシステムを温存しているだけである。さらにはネットワークも劣化し、社会に変革はもたらせない。そのような行政の中に市民が参加しても枠組みの中に収まる動きしかつかれない。逆の発想では、中心のないネットワークの中へ行政が参加をし、行政のネットワークを超えて様々な違いが溶け込んで総合化し、またさらなる違いが起こっては溶けこんでいく。それらの付加価値の連鎖による既存の枠組みを超えた「市民自治がこの市民主導型協働公共事業を築いている。



無線センサーネットワークシステム



大きく成長した不耕起栽培の稲

トキが宿る「百年の大計」

アサザプロジェクトは100年先のビジョンを見据えた持続的グランドビジョンを描いている。10年ごとの再生達成目標を具体的な野生生物で設定し、100年後はトキが舞う風景を霞ヶ浦に呼び戻すと共に、地域の経済活動や地場産業と環境再生を統合化させていく。持続可能な自然観と技術観、そして次世代の子どもたちに希望を描けた未来を紡ぐ「生命未来設計図」だ。

既存の社会システムや地域のリソースを活用し、資源、人材、組織、技術、産業、教育、経済等の文脈に新たな命を吹き込み、環境再生と地域振興を統合化していく。そして、単に自然と人間の共生だけではなく、科学や技術もイノベーションさせ、もろもろの社会文脈のあり方を通して、「生命の歩み方」を生成していく。トキと共に営む22世紀はここにある。



生命の大切さを伝える事務局の飯塚さん

取材

日付 2007年8月30日(木)

場所 NPO法人アサザ基金

対応 NPO法人アサザ基金 代表理事 飯島 博氏
事務局 飯塚 恵三氏

担当 鶴飼 哲 新海 洋子

©環境省中部環境パートナーシップオフィス

第3回 【連携を生む想像力を養う！ー古澤礼太さんに聞くー】

■概要

日時	2007 年 8 月 31 日（金） 19:00～20:45
会場	環境省中部環境パートナーシップオフィス
ゲスト	古澤 礼太さん（NPO 法人 愛・地球プラットホーム 理事長）
聞き手	遠山 涼子さん
参加者数	10 名

■ねらいと全体の流れ

「異なる価値観を持った人々の対話」「多様性の愛し方」をキーワードに“連携”を進めていく古澤さんの思いと努力、課題をトークセッションでお話頂き、連携とは何か、連携が生み出すものは何か、連携を阻む要因は何か、それを乗り越えて思いを実現させるために、どうしたらよいか、どんな解決策があるかをワークを通して参加者と考えた。

■アイスブレイク（講座に参加したきっかけを教えてください。）

■トークセッション「古澤さんの HISTORY、志」

古澤さん：私は 4 月から中部大学の中部高等学術研究所の研究者として働いています。3 月まで名古屋大学の文学研究科で人類学の勉強をしています。ガーナ共和国に 4 回くらい行っています。小さい時からの私についてまとめたスライドを見ていただいて話をしたいと思います。

親はキリスト教系の大学で音楽を教えており、クリスチャンだったので、小さいころは他の家とうちはちょっと違うと感じ、それが嫌で、価値観の違いなどを考えるようになりました。

中学校の頃、つくば科学博に行きました。後に地元福岡で開催されたアジア太平洋博覧会や、2005 年の愛・地球博に関わることになりましたが、博覧会との最初の出会いがつくば科学博覧会でした。はじめて観る 3D 映像など、驚きの連続で、ほんとに夢のような世界でした。

福岡に住んでいたので、「山笠」というお祭りがあり参加していました。今月も見に行ったのですが、ホントにおじさんたちが祭りの中で子どもたちをしっかりと指導していて、地域内での教育ができているんだなぁと思いました。後で ESD、「持続可能な開発のための教育」という言葉が出てきますが、まさにお祭りが ESD だと感じました。

地方博が流行った時代がありまして、福岡では 1989 年にアジア太平洋博覧会「よかトピア」があり、そこで半年間楽しくバイトをしました。初めてのバイトで、大人との付き合いがあり、自分もちょっと大人になった気分楽しんでおり、ここでも博覧会の魅力に取り付かれていったんです。

一方で、大学に受からなくて、日本の大学は全部落ちてしまったのですが、アメリカの大学は入るのは簡単で出るの難しいということで入り、一生懸命勉強して卒業することができました。その時、アフリカ人の指導教官に、夏期講習で一緒にガーナに行こうと言われて始めていったのが 1998 年でした。アメリカは「褒める文化」のように思うんですよね。友達になるときに「君のネックレスは素敵だね」といったりして。自分はそれが苦手で、どっちかというところからかうのが好きなんです。アフリカ人は、からかうのが上手で、からかいながら友達になっていく、「けなす文化」というか。人類学でも「冗談関係」という言葉があるんですけど、僕にはそれが合っていて、とても楽しく過ごしました。

そして 30 歳の時に日本に帰ってきて、自分の研究をできる場所を探して、名古屋大学の先生に論文を認めていただいて、



入学することができました。それから今年の3月までの6年間、論文をなかなか書けずにいたのですが、それはなぜかという
と万博にはまってしまったから、というのが一つの理由です。

遠山さん：その前に失恋があるんですね。ここで志ノートに載っているということは、その失恋が人生の中の大きな部分を占めるんですね。

古澤さん：今日は価値観の話をしたいと思っていますんですけど、女性と付き合っていると、自分と気があっている、自分のことを分かってくれていると思う部分が多くなってきて、ほとんど自分と彼女は同じだという気持ちになってくるんですけど、実はそうじゃないじゃないですね。アフリカにいて1ヶ月くらいでふられてしまって、ほんと、すべて終わった感じで。ビールばかりを飲んでいて、アフリカ人のこじきに助けられるような暮らしをしていました。「なんのためにこんな所にいるんだろう」という気持ちになったりもしましたが、徐々に「一度終わった人生なんだから」ぐらいの気持ちになり、かなり自由にやれるようになってきました。失恋により人生で初めて反省や後悔をしましたが、その経験が万博につながっていきました。

この本、『持続可能な社会をめざして』は博覧会が終わって最後にできた報告書です。持続可能という言葉は聞いたことがありますか？万博でも持続可能性がテーマとなって、いろんなことが行われました。万博の成果は4つあったと言われています。まず、先端技術の適用。例えば新エネルギーシステム、新交通システム、IT技術などがあったと言われています。2つ目が新たな社会構造やシステムの採用です。17 分別のゴミの分別やレジ袋を断ったりしてポイントのため、そのポイントから植樹などをするエキスポエポマナーなどがあります。3つ目が NGO や市民の参加です。博覧会は始めての本格的な市民参加といわれたんです。4つ目が多様な



文化・価値観の共有といわれています。121 カ国の万博に参加した国々がありましたし、その方々との交流もありましたし、ナショナルデーが毎日ありまして、それぞれの国の文化の展示や祭事が行われました。それと「愛・地球会議」と呼ばれた愛・地球メッセージイベントがありまして、3月から9月まで毎月1回ゲストを呼んで行われました。これがそのときの冊子ですが、10ページ目に持続可能な社会の創造の実現に向けての連続国際シンポジウム愛地球会議のレポートがありまして、例えばワンガリ・マータイさんや、レスター・ブラウンさんなど、世界の名だたる方々が連続会議を行って、最後の9月だけ専門家でなく、若い人で何かやってみようとなり、「2005年の私から未来へ」ということで8カ国の学生が集まり宣言を作りました。私は日本の代表として入れていただきました。

遠山さん：他にどのようなことに関わられましたか？

古澤さん：万博開幕の前の年の冬の2ヶ月間、途上国トレーニングプログラムがあり、博覧会にきた途上国の人たちで「どんなことをやりましょうか」という話し合いがありました。そこでお手伝いをしていてみなさんと非常に仲良くなることができ、飲みに行きたいというのでいったんですね。その時、20人くらいいたんですけど、これぐらいの時しかおごれるときがないなと思って、名古屋駅から栄という短い区間だったんですけど、地下鉄の切符を全員分買ってあげたんですよ。それを皆さんものすごく喜んでくださって、次の年の会期中も僕のことを覚えていてくれていて、後の市民プロジェクトでもみなさんが助けてくれたんです。

私が会期中にやったことは3つあるんですが、一つは市民プロジェクトの「世界青年宗教者平和会議」をやりました。私はクリスチ안의家で育ったので、いろんな宗教の人とよくあって話をしたんです。そうすると、宗教が違っても結構近いことを言っているし、悩みも近いものがある。宗教は「自分のところが正しい」というのが基本的にありますが、でも相手の言っていることが絶対間違っているとも思えないし、その辺を悩む青年が結構どこの宗教でもいたんですよ。そういう青年がどこの宗教でもいることを知って、これをやってみたいと思ってやりました。宗教のことを扱うということで、主催者から心配されたところもあったんですけど、本番の日は、前日にイギリスでテロが起きていたため、非常に宗教への関心があがっており、結果的にはいい会議になりました。ただ攻撃的な方もいて、みんなとけんかをしたり、女の子が途中でもう辞めるといいだしたり、開催の前日まで非常にギクシャクしてかなり難しいことがいろいろあって、やっぱり簡単じゃないなということをととても感じました。この頃から「異なる価値観を持った人たちがどのように対話をしていくか」ということを大きなテーマにしてやってきました。

先ほどの説明は、宗教という切り口で異なる価値観の人たちの対話をやったんですけども、市民活動で異なる価値観の対話をやりたいとおっしゃった方がいました。一緒に作り上げる中で、非常に大変だった部分もありましたが、結果的には「持続可能なコミュニティづくり」というシンポジウムを行いました。3時間×3の9時間のプログラムをやり、今考えてもすごかったなあと思います。そして、最後に閉幕のときにやったのが、「愛・地球会議〜クロージングフォーラム」です。

博覧会の準備期間や本番でいろいろ考えてきたことを、最後に8カ国の方と考えることができて僕は非常にラッキーだったと思っています。テーマとして、「多様性や価値観の違い」を議論してくれと言われわけではなく、「好きに学生同士で環境に関して、愛・地球会議を聞いて感じたことをまとめてください」とうふうに言われました。みんなの考え方の違いもあるし、言葉の壁もあるし、ホントにいろんな壁を感じました。会議に関わる大人たちは「みんなで環境を良くしていきましょうね」という結論を望んでいるようでもあったのですが、メンバーの中には、地球温暖化の原因はCO2ではない、というアメリカの大学の研究を強く信じている人もいました。そもそも、議論の出発点すら、信じる知識や価値観によって異なってきます。そんなこんなで、最後にまとめたのが「多様性の愛し方」というメッセージなんです。簡単にいうと「人と人は違っていて、それにはいい面もあるし悪い面もありますね。」ということです。悪い面は価値観の違いによる対立という側面で、自分と価値観の違う人を認めることもなかなかできないということがあります。一方で違いから生まれるいい面は、「学ぶことができる」ということです。学びは常に、自分の知らないもの、異なる他人や異なる環境から得るものです。博覧会会場内のパビリオンにしても121カ国違ったからこそ楽しくて、あっちへ行ってみようこっちへ行ってみようとしたわけで、違いから何か新しいものを発見しようとしたり、面白かったり、笑ったりするんじゃないかということです。違いというものにはわずらわしい面と非常に素晴らしい



い面があると書いています。わずらわしい面はありますけども、違う価値観を尊重しようとか、多様性を尊重しようとか、口で言うのはすごい簡単なんです。しかし一つのことを決めていくのに、「尊重しよう」といっていたら答えが出ないわけで、本当に難しいですよ。それはみなさんも毎日の生活の中で感じていらっしゃると思うんですけど、そういった難しい状況の中で、どうすればいいかという一つの方法として、例えば、譲ってあげる、許してあげる、一歩ひいてやることとか、あまりポジティブな考え方とは思われていないんですけども、逃げ道、避け方といったものもあるだろうなと考えるようになりました。

遠山さん：それが、今の目指すところ、「多様性の愛し方」につながっていくんですね。

古澤さん：そうです。その宣言文でも「今私たちはそれぞれの生活に戻って新たな人の輪の中で愛し方の探求し続ける努力を惜しまないことをここに宣言します」ということを書いているので、まず10年間はということで追求していきたいと思っています。

遠山さん：古澤さん個人としてそれについて目指すところはありますか？

古澤さん：国連の「ESDの10年」というものがあります。これは集中的に10年間世界中でやっていこうというもので、ESDとは「持続可能な発展のための教育」というややこしい言葉なんですけども、持続可能な発展という言葉は環境に付加をかけずに、それでいて人間の経済や社会的欲求を満たしていくという、どちらもバランスのとれたものの発展をさせているんです。ESDはその考えをさらに教育の中で組み込んでいく必要があるんじゃないかという概念です。教育といってもただの学校で教えるだけの教育じゃなくて、お互いに学びあうという考え方も含まれているので、例えば異なる市民活動やNPO活動が互いに問題意識を学びあったり、情報を交換したりすることも範疇に入ります。それを発展させて考えると「連携」や「ネットワークづくり」ということにもつながっていくと考えています。

■参加者からの質問

参加者：9人の若者で話し合いをされたということですが、その学生はどういう風にして選ばれた方なんですか？

古澤さん：留学生。各大学にお願いして、推薦されたようです。

参加者：こういうのに興味のある学生が声をかけられたんですね。

古澤さん：そういった活動に関心のある人が集められたということだと思います。

参加者：志 NOTE 中の「野宿者とカラオケ、ピックアップで叱られ」がどういったことか気になります。

古澤さん：2002 年のワールドカップの時、アフガニスタンへの攻撃が始まっていて、先生と「とんでもない話ですよ」と話している時に、「爆弾でなくてサッカーボールを落とせばいいんだよ」と話が盛り上がり、その活動をやってみることになりました。結果的には 40 カ国ぐらい、400 個ぐらい、去年もやったので全部で 500 個ぐらい送ったんです。まず NGO に「現地に行くスタッフにボールを持っていてもらえませんか」と頼みに行ったら、「あなたはそんな傲慢なことをして何が楽しいんですか。それは金持ちの傲慢です。とにかく自立が大事で、その国の政府が自分たちの子どもたちにボールを与えられたら幸せですが、よその国の金持ちから与えられているということは、自立可能ですか？。それに、あなたは継続してプレゼントできますか。持続可能ですか？」ということを言われました。今思えばおっしゃることは開発学のイロハみたいなことだったと思います。でもすごく納得できなくて、プレゼントは常にあげ続けなければいけないものでもないし、もうちょっと気楽できるものじゃないかと思ったし、金持ちだけが物をあげるわけじゃない、貧乏人だって物をあげるじゃないかと思いました。だから、ホームレスから募金を募って、ボールを送ったらどうかと思ったんですよ。それで、ホームレスの人ととりあえず仲良くなる必要があると思って炊き出しを始めたんです。インターネットで調べ、炊き出しをやっている南山大学のアバンギャルドというサークルの活動に加わりました。7 時から食券を配って 8 時からご飯を受け取るんですが、待っている間みなさんボールゲームなどをして遊ぶんですよ。僕はカラオケ担当になったんで、テレビを持ってきて簡易カラオケをしました。そのつながりで、ピックアップというホームレスしか売れない雑誌を知って、名古屋の立ち上げに関わりました。そこにもいろんな価値観があって、世間の矛盾を感じてそれをどうにかしたいという思いの強い活動家もおられ、チャラチャラやってる僕は、よく怒られたりしてます。

参加者：質問が 2 つあります。1 つは、日本の社会はあまり多様性を認めたくない、というイメージがあるんですが、海外も経験されて、日本はゆるい方か、厳しい方かという感想を聞きたい。もう一つ、万博の成果を 4 つ挙げておられましたが、多様な文化の価値観の共有や NGO や市民の参加について、ほんとに成果があったのか、その辺をどう感じて見えますか？

古澤さん：日本の多様性について、日本人は人と違うことをするのがあんまり好きじゃないということは感じます。一方で万博の会議のときに「多様性の中に正義の多様性はあるのか」という話になったんですよ。アメリカでは



確かにいろんな考えを持っている人はいるけど、正義はある程度一本なんですよ。日本は、みんな同じ格好をしているけど、自分と相手は結局は他人で違うんだというのは根底の部分ではあるように思うんですよ。こじ付けかもしれませんが、それぞれのものに神様がいて、正義がその中にある。正義がいくつあってもいいんだよというように、根本の部分では日本人は結構おおらかなんじゃないかと思います。

もう一つのご質問、博覧会の成果についてですが、閉幕後は博覧会協会で半年間働かせていただくこともでき、その中でもいろんな意見を聞いてきたんですけど、確かに 4 つの成果というのは、主催者側が教科書的にまとめた、という部分もあるかもしれませんが。といいまして、先端技術とか、新たな社会行動といわれる、ゴミの分別やエコマネーはある程度の成果はあったんだろうと思います。エコマネーについてはさらに博覧会協会の継承団体の支援もあって、広めようとしているので、これから先も成果が発展していくという可能性はあると思います。市民参加なんですけども、これは非常に複雑で、市民がアリバイに使われたとの評価もありますし、動いた市民だけが自分たちの自己満足的に楽しいことをやっており、それが成果として言われているのはおかしいんじゃないかと言われていることも事実です。ただ、今でも博覧会の市民参加有志のグループが集まって、月に 1 回会議をしたり、イベント毎に集まって何か違った発展形を出せないかということを考える動きもあります。僕も先日、愛・地球博の 2 周年記念のイベントがあってシンポジウムをやったんですけど、「博覧会市民参加の成果報告書には締め切りがないんだ」ということを話しました。博覧会は運営の面では黒字は出たけど、そもそも 1,200~1,300 億ぐらいは使っちゃってる。「それは税金を使った無駄遣いだった」と今の時点で判定を下す人はいるかもしれませんが。でも、博覧会の市民参加に関しては、まだまだ発展形だと思うんです。つまり、『50 年後 100 年後に、あれは安い投資だったよね』となればいいね」

という風に思っている博覧会経験者は結構いると思います。

遠山さん：お話いただいた中で 2 つのキーワードが出てきたと思います。生まれた環境がキリスト教であり、宗教の価値観を考えたり、地元のお祭りで大人と子どもの関係という価値観を経験したり、異なるものの価値観というのが古澤さんの今までの経験の中でかなりの部分を占めていると思います。もう一つは、その異なる価値観を受けて、それを「多様性の愛し方」という言葉に代表されるように、つなげていく、連携していくことの大切さを痛感されて活動されているということを感じました。

■みんなでトーク①「連携とは何か？」、②「連携が生み出すものは何か？」

古澤さんのお話で出てきた「異なる価値観」「多様性の愛し方」というキーワードを元に、「連携」について考えた。

①いろんなところでいろんな連携があるので、具体的にどんな連携があるかを抽出した。

②次に、「連携が生み出すもの」を思いついた順に抽出した。

「どんな連携があるか」	「連携が生み出すもの」
仕事	個人でやるより効果がある
夫婦	家庭円満
親子	伝承
サークル	一人ではできない。楽しさの共有。意識を高める。
ボランティア	人への喜び
地域・隣三軒	災害時等の助け合い。
宗教	安心感、ルール
友達・学校	友情、信頼
インターネット	
ネットワーク	

■ワーク「連携を阻む要因は何か？」

「みんなでトーク②」で抽出したように、何かを生み出していく“連携”だが、市民活動などをする際にうまくいかないこともある。“連携を阻む要因”を出し、それを乗り越えて思いを実現させるために、どうしたらよいか、どんな解決策があるかを考えた。抽象的なイメージだったので、「ダム建設にあたって連携を阻む要因」を具体的に考えた。

<グループ1>

目標がまとまっていない	・将来の水利用の必要性 ・これ以上水利用必要でない。
必要性の認識の違い	・「環境破壊」（自然環境が悪くなる） ・予算が不足。大型プロジェクトの必要性。 ・税金の無駄遣い。 ・お金がない。
聴かない	・同じ立場として相手を見ていない。（文句だけ言う） ・→受け入れない。（いろんなことがあることを） ・→価値観の強制。 ・→心理的な反発。
知識に差がある。	・多数決と正しい意見は同じでない。

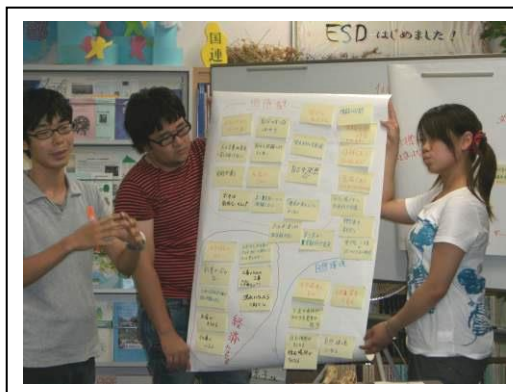
発表：考えた阻害要因には、大きく 4 つの段階があるのではと考えた。それは、①必要性の認識の違い、②目的がまとまっていない、③知識に差がある、④相手の意見を受け入れず価値観の強制につながっていることである。①はたとえばどんな風に現れるかという、予算が不足しているとか、環境破壊とか、税金の無駄遣いとか、人によって考え方は違うので、必要性に認識の違いが出ることもある。②は、ダム的事例でいえば、水の利用はこれ以上必要でないと思う人もいるし、将来は水の利用量が増えてもっと利用量が必要になると考える人もいて、目標がまとまっていない、共有できていないということが原因なと思う。③は、自然環境や経済環境に対する認識は人によってさまざまだが、それは人それぞれの考え方が違うからであり、その考え方の共有がうまくいっていないことが原因だろうと考えられる。④は、違うということだけを捕らえて文句だけ言う。相手の言っていることについては聞かずに受け入れない。自分の言っていることが正しいんだから受け入れなさいと、価値観の強制をする。この価値観の強制というのは、情報・知識に差があるから起こることもある。だから、多数決としては正しいが、押し付けられた方は心理的な反発をうけて、割り切れない思いがある。こういったことが円滑な連携を進めていく上で阻害要因になるのではないかとというまとめ方になった。

<グループ2>

価値観	• お互いが描くゴールが違う。 • 人の言葉・意見に耳を傾けない。 • 目的が違う。 • 僕は関係ないもん！ • 自分の言い訳ばかり。 • 相手を理解しようとししない。 • 互協しない。	• 違う意見について理解しない。 • 目的をはっきりと。 • 賛成・反対の意見の差 • 自己中心発想 • 環境が変わることが怖い。 • ゴールが違うから価値観が違う。 • 第三者が客観的な意見。
経済について	• 水利権の範囲 • 利害が合わない。 • 土地の回収などでお金の問題が出る。 • お金が儲かる。 • 仕事が増える。	• なぜダムが必要になるか、自分とのかかわりをもとに考えれない。 • 工事のための工事（ほんとに必要なの？） • 洪水になったら困るでしょ・・・
自然環境	• 生活環境の変化 • 自然環境の変化 • 下流の水位が下がり生態系が狂う。	• 自然破壊になる。 • 住む場所がなくなる。
	• 情報の公開。 • 情報公開の共有（判断基準） • 理解しあう（よく話し合う） • 互協しあう（小さなことより大きなことに）	• 小さい損でなく、将来的な利益。 • 中間派を引き合う。 • 便宜性＞お金 ⇒ ボランティア意見の衝突

発表：経済面で「こんだけいいことがあるから作りましょう」という意見と、「作ると自然が壊れるから反対」という賛成・反対の構図が多いと思う。この対立をまとめるには、価値観を共有することだと思う。そのためにはいろいろ情報をお互いが共有して、1 対 1 で賛成・反対ではなくて、団体の場合には団体としての将来を考えて、ダムの場合にはその地域としてその地域の将来を考えて、これを作ったらどういう状態になるのか、もしダムを作らなかったらどういう問題が起こるのか、という判断基準となる情報を共有することによって、よく話し合ってお互いが理解しあうことだと思う。最終的には妥協しあうためには目的をはっきりとすることが必要だと思う。ボランティアをしていると対立が多い、かえって会社の中だと対立が少ないという話を聞きますけど、会社の場合だと目的がはっきりしていて、ボランティアの場合だとあまり目的がはっきりしていないから対立してしまうので、情報を公開して共有することによって目的ははっきりさせ、その目的のために一番何ができるのかをお互いに話し合って理解しあうことが重要である。大切なのは、「価値観を共有していくために何をしていくか」で、それには情報の共

有や、対話を持つことなどが大切になのではないかと話した。分かり合えないというのも情報量が足りないのではと考える。相手が理解できれば、許せるし、この方向がいいという判断につながっていく。相手を理解しようとする姿勢が対立しているときには見られないと思う。



■まとめ

古澤さん：最近、「単一性コミュニティ」と「多様性コミュニティ」というものがあるのではないかと考えたことがあるんです。単一性コミュニティというのは、サークル、学校など同じような性質や趣味の人が集まってくるというコミュニティで、反対に、大した理由もなく、特に自分で選ばずに人々が集まったコミュニティに、地域や親子があると思うんですよね。地域というのはぐちゃぐちゃと無作為にいろんな人が集まってる、それこそが多様性のコミュニティだと思うんです。前者は結構簡単だと思うんですよね。ある程度話し合えば分かるということがある。好きで集まった人たちなんだから。インターネットの普及なんかで、地域から離れて、好きな人同士でくっつくようになって、同じ目的を持った市民活動など、うまくいった部分もあるけど、今その歪みがすごく出てきている。これから ESD ということも含めて、異なる分野で活動している人たちが集まって、一緒に問題意識を共有して連携が進んでいけば、世界的にも発信できるものになるんじゃないかと思います。雑多な人たちの協働の土壌が万博にあったので、この地域ではそれが可能なのではないかとと思っています。

タイトルにある「連携を生む想像力を養う」について少しお話しします。僕は万博に参加して今まで関わらなかった人たちと関わるようになりました。知り合ったおじさんたちとは、毎月会議などで集まるんですけど、その後の飲み会に行っている話をするんですね。そのうちに「そういうことをやっているんだったら…」と話が広がっていくことがあるんです。会議中は、例えば「自然環境保護について話しましょう」となれば、その人の自然環境に関する側面しか出てこないですよ。それが飲み会だといろんな側面が出てきて、その中から自分がこの人のこの部分と連携ができるんじゃないかという想像力が養われることによって、いろんな可能性を一人の中に見つけることができると思います。そういったものを増やしていけば、ちょっと気に食わないからこの人との連携は無理だということは減ってくるんじゃないかと思っています。価値観を共有するに至るまでのプロセスにどうすることが必要なのか、これからも考えていきたいと思っています。

遠山さん：最初に人に対する先入観を持たずに、つきあい続けていくということが大切なのでは。

古澤さん：先入観や嫌な部分はあるので、あきらめずに付き合い続けると、良いところとか、悪い言い方をすれば、利用できるところもいくらでも出てくると思います。愛情の反対は無関心といいます。いろんな可能性が一人の中にあって、付き合い続けるということがいろんなことにプラスになることを、愛・地球博で学びました。

遠山さん：印象に残ったのが、日本人の多様性、価値観のお話です。日本人は、いくつになったら何をしなきゃいけないという当たり前の価値観が植えつけられている印象があったんですが、意外に多様性の寛容さが日本人の方が多いいんじゃないかというお話が意外で新鮮で、日本人もまだまだいけるんじゃないかと思いました。



古澤さん：人と違うところに対して、結構いじわるですけどね、日本人は（笑）。でも根底に寛容さはあると思います。

遠山さん：その根底の部分を引き出すように、古澤さんが活動されているような場を利用していけたらと思います。社会もその部分をどんどんつついて、「多様性の愛し方」の考え、価値観が広がっていけばと思いました。

■所感

連携でいろんなことが生み出せることを感じた。その後に連携を阻む要因について考えて、ちょっとずつ阻害要因や解決に向かうことが見えてきた。連携は大変な部分もあるが、進めていく必要があると思うので、ぶつかったときこそ相手を理解しようと思うことや今日出されたことは解決法まで至っていないが、これからも考えていきたいと考える。

EPO 中部事業報告（2007年9月）

【平成 19年度9月事業報告】

平成 19年度中部環境パートナーシップオフィス運営業務（9月）は、環境デーなごや 2007、ワールドコラボフェスタの準備、環境立国セミナー、エコひいき下半期事業を中心に実施した。

【9月事業報告】

9月4日	かすがい ESD プロジェクト会議	新海・桜井
9月6日	リコー中部(株)打ち合わせ 三菱 UFJ リース打ち合わせ	新海・鶴飼 新海・鶴飼
9月7日-8日	東邦ガス(株)エコクッキングミーティング 滋賀県庁打ち合わせ なごや環境大学共育講座オリエンテーション	桜井・新海 新海 宇野・新海
9月8-9日 *	ESD-T 合宿 IN 加子母村	新海・桜井・宇野
9月10日	松下絵画コンテスト審査会	新海
*	かすがい ESD プロジェクト会議	新海・桜井
9月11日 *	中部 ESD 市民会議	桜井
9月12日	エコひいき事務局打ち合わせ 環境カウンセラー協会 環境立国セミナー打ち合わせ 会議の持ち方研修打ち合わせ	新海・鶴飼 鶴飼・新海 新海・桜井
9月13日	愛知県地球温暖化防止活動推進センター打ち合わせ 環境立国セミナー会議	鶴飼・新海
9月14日	ワールドコラボ打ち合わせ 長谷川氏 * なごや環境大学志講座 * エコキット実験取材（岩倉市立南部中学校）	桜井・新海 宇野・新海
9月15日 *	地域デザインスクール「地域デザインにおける若者の所在」	鶴飼
9月18日	コミュニティファンド事業打ち合わせ	新海・鶴飼
9月19日	ネットビジネス打ち合わせ エコひいきブレーンヒアリング	新海・宇野 新海・鶴飼
9月20日 *	ESD-T 会議	桜井・宇野・新海
9月21日	事務所と打ち合わせ ワールドコラボ打ち合わせ	新海・鶴飼 桜井・新海
9月22日 *	ユニー(株)なごや環境大学講座 環境デー準備 ESD-T 会議	新海・宇野・桜井 宇野・桜井・新海
9月23日 *	環境デーなごや 2007	宇野・桜井・新海
9月24日	中部 RCE 会議 WE LOVENAGOYA	新海 新海・宇野
9月25日	エコひいきブレーン会議	新海・鶴飼
9月26日	* なごや環境大学共育講座チーム会議 * ユニータピタ環境学習三重チーム会議	新海 新海・宇野
9月27日 *	エコキット実験取材（三重 四日市市立中央小学校）	宇野 （矢口）
*	2007 年度第 4 回製作提言委員会（財団法人アジア保険研修財団）	
9月30日	ワールドコラボ説明会	桜井
*	エコキット実験取材（安城市 環境劇団いるか）	宇野 （原）

【10月事業予定】

10月1日	環境省 ESD モデル事業担当者会議	新海・桜井
10月4日	中京大学金ゼミ参加 かすがい KIZUNA 会議	新海・桜井 桜井・新海
10月5-6日	環境首都コンテスト中部ミーティング IN 飯田	新海・鶴飼
10月13日	ユニー・アピタ環境学習プログラム体験	宇野
10月16日	コミュニティバンク momo 説明会	
10月18日	ESD-T 会議	新海・桜井・宇野
10月19日	志講座	宇野・新海
10月21日	東邦ガス(株)エコクッキング	
10月23・24日	EPO ネットワーク合宿	新海・鶴飼
10月25日	なごや環境大学講座チーム会議 21 世紀環境立国セミナー	新海 鶴飼・新海
10月27・28日	ワールドコラボフェスタ	桜井・新海・宇野・鶴飼

○今後の検討事項

1 年経つスタッフ、半年経つスタッフがようやく仕事になれ、少しずつであるが主体的に仕事を回せる状況になってきた。次は質の向上である。運営協議会からは協働の指標にそって、昨年度事業の評価をする必要があるという意見をいただいており、事業遂行と事業評価の両輪で下半期はすすめていく。と同時に次年度以降の EPO 中部のありかた、事業内容についても検討する段階に入っている。運営協議会メンバーの主体的な動きのサポートも重要な下半期の課題である。

【中部環境パートナーシップオフィス 9月月報】

9 月		来館者数 (相談・問合せ)	電話 (相談・問合せ)	相談・問合せ内容	スタッフ数
1	土	2(2)	1(1)		3
2	日				
3	月				
4	火	9(6)	9(7)	春日井 KIZUNA プロジェクトミーティング	4
5	水	6(5)	8(8)	千頭先生とのミーティング	2
6	木	9(6)	11(10)	リコー中部とのミーティング 三菱 UFJ リースとのミーティング 地域の未来とのミーティング	4
7	金	7(6)	9(8)	東邦ガス㈱とのミーティング 緑の審議会 滋賀県庁打ち合わせ なごや環境大学オリエンテーション	4
8	土	0(0)	0(0)	ESD-T 担い手会議かしも合宿	4
9	日			ESD-T 担い手会議かしも合宿	3
10	月			松下絵画コンクール 春日井 KIZUNA プロジェクト	1.5
11	火	8(7)	13(11)	かすがい KIZUNA プロジェクトミーティング 志講座ミーティング	4
12	水	12(10)	15(14)	JIFH 国際飢餓対策機構（ワールドコラボ） エコひいきミーティング 環境カウンセラー協会ミーティング 浅川先生とのミーティング ワールドコラボフェスタ(幼い難民の会・NIC)のミーティング	4
13	木	5(4)	11(8)	ユニーお店探検隊 in 三重のミーティング	3
14	金	18(16)	10(9)	環境省とのメルマガに関するミーティング 中電エコキット実験取材（岩倉） 志講座第 4 回	4
15	土	1(1)	2(1)		3
16	日				
17	月				
18	火	5(3)	13(12)	コミュニティユースバンク momo とのミーティング	4
19	水	6(5)	9(6)	打ち合わせ リコーエコひいきの打ち合わせ 志講座第 1 回のミーティング	3
20	木	8(7)	15(14)	インターン生受け入れ ESD-T 担い手会議	3
21	金	6(5)	9(8)	事務所とのミーティング 中日本高速道路㈱打ち合わせ ワールドコラボフェスタ（長谷川さん）のミーティング	4
22	土	15(14)	2(1)	ユニーお店探検隊インタープリター要請講座第 4 回	4
23	日			なごや環境ディ	3
24	月			RCE 総会・学生フォーラム	1
25	火	7(5)	15(10)	運営協議会メンバー打ち合わせ リコーエコひいきのミーティング	4
26	水	8(6)	20(18)	なごや環境大学講座ミーティング ワールドコラボフェスタミーティング ユニーお店探検隊 in 三重ミーティング	4
27	木	6(4)	15(14)	中電エコキット実験取材（四日市） 政策提言委員会（AHI）	3
28	金	3(3)	18(15)	ワールドコラボフェスタミーティング EPOGEIC 運営協議会	4
29	土	2(2)	3(3)		3
30	日			ワールドコラボフェスタ説明会 中電エコキット実験取材（安城）	1
合計 平均		143 名/21 日 6.8/日	208 件		84.5 人 3.25 人/26 日

ホームページアクセス数：13,178 件（9 月 29 日現在）

【中部地区の環境関連団体の基礎資料の収集・管理】

* 9月期に収集した資料 行政関連：15種 企業関連：11種 NPO関連：31種 その他：10種 計：67件

タイトル	年度	発行	備考
里山の袋 10 summer	2007	パブリックシステム株式会社 郡上八幡・山と川の学校	A4 16P 日本語 2007 発行
郡上八幡・山と川の学校 冒険 KED'S	2007	パブリックシステム株式会社	A4 1P 日本語 2007 発行
会報 あべまき 夏の号 vol.10	2007	豊田市自然観察の森・森先案内人 あべまきの会	A4 1P 日本語 2007 発行
かしも通信 2007 8	2007	かしも通信社	A4 8P 日本語 2007 発行
緑と水の通信 第92号	2007	ナチュラリスト敦賀 緑と水の会	A4 6P 日本語 2007 発行
人と自然の共生国際フォーラム	2007	人と自然の共生国際フォーラム実行委員会	A4 1P 日本語 2007 発行
人と自然の共生国際フォーラム	2007	人と自然の共生国際フォーラム実行委員会	ポスター 日本語 2007 発行
「森への招待状」シンポジウム	2007	中部電力株式会社	A4 1P 日本語 2007 発行
雑木林 2007年 9月号 Vol.202	2007	豊田市自然観察の森	A4 4P 日本語 2007 発行
達目洞ヒメコウホネ特別保全地区	2007	岐阜市 人・自然共生部 自然環境室	A4 4P 日本語 2007 発行
岐阜市自然環境の保全に関する条例の概要	2007	岐阜市 人・自然共生部 自然環境室	A4 8P 日本語 2007 発行
みんなで守ろう岐阜市の自然	2007	岐阜市 人・自然共生部 自然環境室	A4 60P 日本語 2007 発行
環境再生医	2007	認定 NPO 法人自然環境復元協会	A4 1P 日本語 2007 発行
こどもホタレンジャー 活動レポート募集要項	2007	環境省	A4 9P 日本語 2007 発行
エネルギー&環境のワークショップ 2007 サンキュ!!地球	2007	中部電力株式会社・NPO 法人中部リサイクル運動市民の会	A4 三つ折 1P 日本語 2007 発行
春日井市少年自然の家	2007	春日井市少年自然の家	B4 四つ折 1P 日本語 2007 発行
オゾン層ってどうなってるの?2007	2007	環境省	A4 1P 日本語 2007 発行
春日井市少年自然の家	2007	春日井市少年自然の家	A4 三つ折り 1P 日本語 2007 発行
愛・地球～未来へのメッセージ	2007	財団法人 2005 年日本国際博覧会協会	A4 24P 日本語 2005.9.21 発行
AI-CHIKYU PLATFORM 愛・地球プラットフォーム	2007	愛・地球プラットフォーム	A4三つ折 1P 日本語 2006 発行
がらぼうだより vol.135	2007	NPO 法人ガラ紡愛好会	B4 1P 日本語 2007 発行
未来の選択 地球温暖化の現状・影響・予測 そして私たちからできること	2007	NPO 法人環境市民	DVD 1P 日本語 2007 発行
年次報告書 2006～2007 年	2007	NPO 法人環境市民	A4 16P 日本語 2007 発行
みどりのニュースレター 9 2007 No.172	2007	NPO 法人環境市民	A4 16P 日本語 2007 発行
地球交響曲ガイアシンフォニー第三番	2007	加子母明治座	A4 1P 日本語 2007 発行
びわ湖環境ビジネスメッセ 2007 出展要項	2007	滋賀県環境ビジネスメッセ実行委員会	A4 8P 日本語 2007 発行
2008 愛知環境賞 エントリー募集	2007	愛知県	A4 1P 日本語 2007 発行
資源循環学習ゲーム ゴミキチ・パコロ劇場	2007	あいち資源循環推進センター（愛知県環境部資源循環推進課内）	A4 1P 日本語 2007 発行

環境・社旗報告書 2007	2007	東邦ガス株式会社	A4 42P 日本語 2007 発行
社会環境報告書 2007	2007	アイカ工業株式会社	A4 42P 日本語 2007 発行
全労済 2007 年社会貢献活動レポート	2007	全労済	A4 26P 日本語 2007 発行
2007 社会・環境報告書	2007	株式会社ジェイテクト 安全衛生環境管理部	A4 62P 日本語 2007 発行
Environmental&Social Report 2007 日本特殊陶業グループ 環境社会報告書	2007	日本特殊陶業株式会社	A4 42P 日本語 2007 発行
2007 CSRコミュニケーションレポート 損保ジャパンの社会的責任報告	2007	株式会社損害保険ジャパン	A4 81P 日本語 2007 発行
防災出前講座 案内パンフレット	2007	名古屋みどり災害ボランティアネットワーク	A4 三つ折 1P 日本語 2007 発行
YAZAKI news vol.22 (矢崎総業株式会社社内報: 季刊)	2007	矢崎総業株式会社	A4 30P 日本語 2007 発行
momo 通信 vol.5	2007	コミュニティ・ユース・バンク momo	A4 8P 日本語 2007 発行
融資やってます。 コミュニティ・ユース・バンク momo	2007	コミュニティ・ユース・バンク momo	A4 1P 日本語 2007 発行
コミュニケーションって、何だろう? ~ボランティアのための自己発見講座~	2007	ワークショップなべや	A4 1P 日本語 2007 発行
グループ"いきいき"化ワークショップ	2007	ワークショップなべや	A4 1P 日本語 2007 発行
豊田都市交通研究所 研究報告発表会	2007	(財)豊田都市交通研究所	A4 1P 日本語 2007 発行
「まちと交通」20号	2007	(財)豊田都市交通研究所	A4 4P 日本語 2007 発行
ボランティア入門講座	2007	なごやボランティア・NPO センター	A4 1P 日本語 2007 発行
第16回全国ボランティアフェスティバルあいち・なごや	2007	第16回全国ボランティアフェスティバルあいち・なごや 名古屋ブロック実行委員会	A4 6P 日本語 2007 発行
ぼらんぽ vol.50	2007	なごやボランティア・NPO センター	A4 8P 日本語 2007 発行
雨やどりはすべり台の下で	2007	劇団うりんこ	A4 1P 日本語 2007 発行
みみ通信 ニュースレターvol.25	2007	NPO 法人ボラみみより情報局	B5 6P 日本語 2007 発行
ボラみみ 2007 September No.90	2007	(特定)ボラみみより情報局	B5 14P 日本語 2007.9.1 発行
矢崎ふれあいフェスタ	2007	矢崎総業株式会社	A4 1P 日本語 2007 発行
なごや食フェスタ 2007	2007	なごや食フェスタ実行委員会	A4 1P 日本語 2007 発行
なごや環境大学 家族と食べたい『良い食事』を作る。	2007	エネルギー食堂	A4 1P 日本語 2007 発行
「自然流食育のすすめ」	2007	あいち少食健康法友の会	A4 1P 日本語 2007 発行
「シルクロードと精進料理」	2007	マナフレンズ	A4 1P 日本語 2007 発行
飢餓対策ニュース 2007 9 No.206	2007	日本国際飢餓対策機構	A4 10P 日本語 2007 発行
世界食糧デー名古屋大会	2007	世界食糧デー名古屋大会実行委員会	A4 1P 日本語 2007 発行
オータム♪フェスティバル	2007	地域別県民文化大祭典 2007 実行委員会	B4 4P 日本語 2007 発行
第11回 IAVE アジア太平洋地域ボランティア会議 2007in 愛知・名古屋	2007	第11回 IAVE アジア太平洋地域ボランティア会議 2007in 愛知・名古屋実行委員会	A4 4P 日本語 2007 発行
07'日韓ユースカンファレンス	2007	日本 YWCA	A4 1P 日本語

			2007 発行
子ども地球音楽祭 ～エコな NPO のお話～	2007	Chappaqua (フェアトレード&エコ ロジージュップ チャパカ)	ハガキ大 1P 日本語 2007 発行
子ども地球音楽祭 ～エコな NPO のお話～	2007	Chappaqua (フェアトレード&エコ ロジージュップ チャパカ)	ポスター 日本語 2007 発行
「参加型で考える」環境と国際協力	2007	(特定) 地域国際活動研究センター	A4 1P 日本語 2007 発行
OSHARECO SAKAE MAP	2007	環境デーなごや実行委員会	A3 八つ折 1P 日本語 2007 発行
ワールド・コラボ・フェスタ 2007	2007	(財)愛知県国際交流協会(AIA)、(財) 名古屋国際センター(NIC)、JICA 中 部	A4 1P 日本語 2007 発行
こどもホタレンジャー 平成 18 年度活動報告集	2007	環境省	A4 101P 日本語 2007 発行
平成 18 年度 オゾン層等の監視結果に関する年次 報告書	平成 19 年 9 月	環境省	A4 200P 日本語 2007.9 発行
びわ湖環境ビジネスメッセ 2006 概況報告書	2007	滋賀環境ビジネスメッセ実行委員会	A4 20P 日本語 2007 発行
「第 17 回アジア社会科学研究協議会連盟隔年総 会」	2007	日本学術会議・日本環境共生学会	A4 48P 日本語・英語 2007 発行

【かしまでしかも合宿～ESD-T合宿】

参加者：村瀬・天野・浅田・古澤・桜井・宇野・新海

昨年 2006 年の ESD 事例調査をした「ふれあいのやかたかしも」を、担い手会議のメンバーで訪ねた。加子母は、岐阜県中津川市にあり、名古屋から高速で 2～3 時間のところであり、名古屋城の木材を調達した地でもある名古屋とつながりが深い地域である。かしもでしかも合宿は、ESD をこの地域（愛知県、岐阜県、三重県）に根づかせムーブメントを起こしていくために、ESD-T メンバーとじっくり時間を掛け議論すること、地元で取れた食材や加子母村の木材に触れ、暮らしの中から ESD を捉えなおす機会をもつこと、加子母村に移り住んだ若者の志をヒアリングすること、今後の ESD 活動のビジョンを見出すこと、目的として行った。じっくり時間をとり、ESD 的な素材に触れた中での意見交換により、今後の持続可能な社会を作るための学びを展開するためのヒントを見出すことができた。

参加者：上野・関山・大島・可児・浅見・梅田・渡辺・杉山・桜井・新海・オブザーバー（11名）

- ・各学年事業担当者からの報告
- ・参加大学生からの感想
- ・プログラムの意義について

第7回ウィークエンド教室もちつき大会においての開催検討

植樹祭の目的や意義の確認

先回おこなったワークショップをまとめたものを報告し、みなさんの意見を伺った。加筆訂正部分をお聞きしたが、会議に欠席されているメンバーもみえるので、後日メールにてお知らせをうけることとなった。

94

【東海・中部 ESD 市民推進会議】

日 時：2007 年 9 月 11 日（火） 18 時半～21 時

場 所：中部大学鶴舞キャンパス

参加者：羽後、高野、天野、村瀬、高橋、安達、横田、古澤、桜井

議題

1. 9 月 23 日開催予定のシンポジウム予定について
2. 9 月 24 日開催予定の総会について
 - ・ 式次第の検討
 - ・ 参加者呼びかけ
 - ・ 会員制度について
3. 9 月 24 日開催予定のイベント「We Love Nagoya」について
キーワードは「出会い親しむ」「担い手は自分たち」「世界へ発信」
4. 10 月 7 日の COP10 勉強会について
5. 11 月 23 日開催予定の ESD 拠点フォーラム 2007 について
6. なごや環境塾講座について
日程の確認・講師と内容など企画をつめる
7. 三井物産の助成金申し込みについて：羽後さん担当
8. 東海・中部 ESD 市民推進会議 PR ポスターについてデザインの提案
地域の美術画家に協力していただくことも可能
9. G8 フォーラムの申し込みについて
提言づくり・サポートに関する活動において申し込む

東海・中部 ESD 市民推進会議の総会を間近に控え、総会のプログラムについてさまざまな意見が出て、会員のあり方に対して議論が深まった。市民会議ということで、職種や背景の異なる方々が、こうして話し合いを積み重ねながら、市民としての動きを形作っていく実践の場であり、ムーブメントの担い手としての技量を高めあっていると感じた。この地域に ESD を根付かせていく意義のある場であると感じた。

【中電環境学習実験キット 実験取材】

■実験概要

団体名	岩倉市立南部中学校
参加者（学年・人数など）	2 学年 4 クラス
場所	学校内南部弘道館・校舎の中広場
時間	9 月 14 日（金） 第 5 限（約 1 時間）
行事名	総合学習の一コマ
実施実験	お花を元気にする土を作る実験

■実験のねらい、生徒に伝えること

・岩倉市で排出される家庭ゴミの 60% が生ゴミである。生ゴミを減らすことが全体のゴミの削減につながる ・自然界は、作る生物→使う生物→もどす生物→作る生物・・・のサイクルで成り立っている。生ゴミを堆肥にすること（もどす生物「微生物」が分解すること）によってサイクルの中に戻る ・サイクルを乱している、崩れているものとして「農薬や化学肥料」などがある。サイクルを正常にまわすにはどうしたらよいか、について、実験を通して生徒自身が考えるきっかけとする。

■実験の流れ・方法

実験の流れ	ポイント等
<事前準備> ・生徒に各家庭の生ゴミを持ってきてもらう。 ・クラス毎に発泡スチロール箱に入れ、中庭に保存。	・実験したときに「においが弱くなる」ことを体感するため、生ゴミは少し時間のたった臭いのするものを持参する。
<弘道館にて学習> ・中電エコポイント事業（社員・家族の努力など）、ゼオライト（石炭灰のリサイクル品）の説明 (EPO 中部より) ・岩倉市の生ゴミ、自然界のサイクルについて生徒に問いかけながら説明。	・地域のゴミの 60% が生ゴミである現状を知り、生ゴミ削減のための一つの方法として実験を位置づける。 ・生ゴミのたい肥化は、「自然のサイクル」の一環であることを学ぶ。
<中広場にて実験> ・グループで一袋に生ゴミをまとめ、臭いをかぐ。その後ゼオライトを入れて袋をふり、再び臭いをかぐ。	・臭いがどう変わったかの変化を観察した。また、感じたことを出し合い、グループメンバーと共有した。
<教室にてふりかえり> ・シートに実験結果（臭いやゼオライトの色や状態の変化）や感想、自然界のサイクルを正常にまわすために何ができるかなどを記入した。	・各生徒自身が考え、自分の感じたことを振り返った。
<今後> ・作った生ゴミ堆肥は、1 週間後の総合学習で、種から育てたパンジーの苗を移植する時に使う。 ・育てたパンジーを、地域の人が参加する学園祭で販売する。	・生ゴミ堆肥で育てたパンジーを販売し、生徒が生ゴミ削減に取り組んだことを PR する場を設けている。

■実験時の生徒の声

・臭かったのが、粉を混ぜたら臭くなくなった。 ・なんで臭くなくなるのか不思議に思う。 ・自分の家でも野菜くずを土に埋めている。そのように作った野菜はおいしい。

- ・ 臭いものと臭くないものだったら、臭くない方がよい。

■カリキュラムでの位置づけ

「地域の（家庭の）生ゴミ削減」

過程	ねらい
生ゴミを各家庭から持ってくる	自分の家を出した生ゴミを堆肥化し、生ゴミ削減を体験することで、生ゴミ堆肥化・削減を身近なことにする。
堆肥を作る	堆肥化作業を体験する。
植物を育てる	生ゴミ堆肥の効果を感じ取る。
育てた植物を販売する	生ゴミ削減の方法や効果、削減努力をしたことを地域の人々に伝える



第4回 【フィトセラピスト（植物療法士）が世界を救う！-松本イズミさんに聞く-】

■概要

日時	2007年9月14日（金）19:00～20:45
会場	環境省中部環境パートナーシップオフィス
ゲスト	松本 イズミさん（seRection 主宰）
聞き手	鬼頭 秀一さん（名古屋市職員）
参加者数	9名

■ねらいと全体の流れ

松本さんは、包括的、全体的と訳される「ホリスティック」という概念から、世界観が広がり、すべてを私事に考えるようになられた方である。お話を伺い、その概念に触れた後、自身の「これまで・現在・これから」を伝え合い、知り合い、相手から意見や別の視点、その人との出会いを得て、自分の思い、志を膨らました。

■トークセッション「松本さんの HISTORY、志」

鬼頭さん：私はなごや環境大学の事務局をしていた関係で、松本さんと2年半前に知り合いましたが、とても素敵でミステリアスな方で、ほんととはどんな人なんだろうと思っていました。企業に勤めていたことを始めて知りましたが、どんなお仕事をされていたんですか？

松本さん：インテリアコーディネーターとして住宅メーカーに勤めていました。売り上げや実績に積み重ねていくため、たくさんのおうちをコーディネートすることを積み重ねました。そうして2、3年インテリアコーディネーターとして過ごし、その後飛び込み営業に移りました。東海地区3県を担当し、照明器具や安定器などの部品の営業マンとして、大きな企業にもお伺いして、それを売っていました。仕事が好きだったので、土日も時間を作っては仕事のために出かけていったんです。インテリアコーディネーターの時も、飛び込み営業の時も売り上げNO.1を頂きました。がんばった証拠が与えられたことは荣誉あることだったので、また励みになっていきました。

鬼頭さん：それは才能があったということですか？熱意ですか？

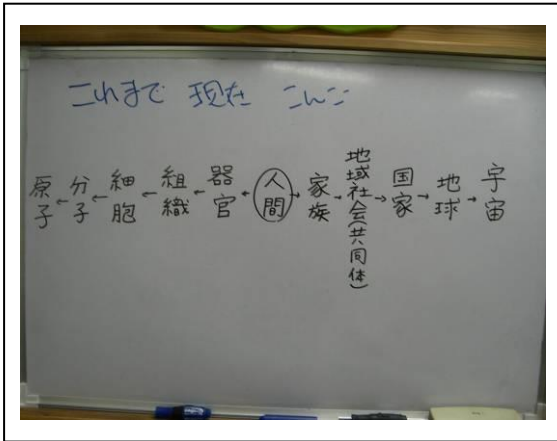
松本さん：当初は両方だと思っていました。今思えば違っていたことですが、自分にいろんな可能性があると思ってたし、才能ももしかしてあるかと思っていた時期がありました。当時の自分を振り返ると、才能とか可能性を持っていたわけではなくて、完璧っていえるくらいの情報管理をやっていたと思います。「買ってくれるためにいつ売ったらいいの？」と考えると、お金ないときは買ってくれないし、欲しくなくても在庫が切れたときは必要になる。そういった顧客管理を徹底的に分析したんです。徹底的にしました。当初はあまり突き詰めて考えてはなかったんですが、独立して、「どうして売り上げがあがっていたのかな？」と考えたときに自分で気づきました。

鬼頭さん：アロマと出会ったきっかけはなんでしょう？

松本さん：顧客満足度追求というところで、ただ照明器具・カーテンを売るということだけでなく、他のコーディネーターにない私だから提案できる付加価値をつけたいと思っていました。そう考えたときに、照明にはたくさんの心理効果があるので、まず照明を勉強しました。照明の勉強が終わって何をしようと思ったときに、色があり、アロマがありました。とにかく心理的に効果のあるもの、箱を作るだけでなく、箱の中で暮らす人たちがどう快適に過ごしていけるのかというのを提案するのがインテリアコーディネーターの仕事だと思っていました。アロマはそれのただの一つのアイテムだったんです。



私がアロマを勉強したとき、アロマセラピーが流行っているいろんな情報が入りやすかったです。アロマセラピーの歴史や身体の勉強などいろいろ勉強していくうちに、アロマセラピーの世界観にはまっていったんですね。



鬼頭さん：キーワードに「ホリスティック」や「バランス」がありますが、これもアロマから派生していますか？

松本さん：そうですね。「ホリスティック」という言葉は、全体的、包括的と訳されるんですね。私はこの図がとても好きなんです。人間という個人を囲むものが家族で、家族は地域社会に属している、地域社会は日本国、国家に属している、というふうに属性を現しているんですね。ここで出てくるキーワードは「つながり」なんですね。個人ではなくて、すべてはつながっている。人間の下のところへいくと、もともと原子という個からできていて、それが分子になり、細胞になり、組織になり、組織が集まり人間を作っていく。一つの機能単位に全体がつながっているというような考

え方なんですよ。調和をしている状態を「バランスがとれている」と言いますよね。健康管理、自然療法（ナチュロパシー）の世界でいうと「バランス、調和が崩れたときに病気になる」という見方をするんですね。例えば、ひきこもりの人というのはこのつながりから外れた状態、個であるという状態が病気になる、という考えをするんです。

鬼頭さん：「持続可能な社会」につながりますか？

松本さん：まさに「ホリスティック」だと思っているんです。「つながり」を大切にしていかなないと「持続可能」が出てこない。そこで「何でつながるか」という問題だと思うんですよね。E S D（持続可能な開発のための教育）というキーワードやアロマセラピーというキーワードでつながるとか、学問でつながるなどそれぞれだと思うんですけど、何かしらでつながってその中の調和を保っていく。ホリスティックは、「部分で見ない」「全体的にものを見ていく」という概念なので、自分の家族だけを助けようとするのではなく、家族が属している地域社会を助けていこう、結果それが家族の幸せにつながっていく、というつながりを考えており、持続可能な社会のキーワードかなと思います。

鬼頭さん：アロマとの出会いを経て、独立ということになりますが、独立はどう決意したんですか？

松本さん：決意はないです。ただ、自分のやりたいことがあったし、自分の可能性も信じていたので、次のステージへ行きたいと思ったんです。私は人間が健康に暮らすために売るアイテム、心理的な効果のあるものだけを扱いたかったんですが、それができる企業とその時は出会わなかったで、自分でやればいいんだと思ったんですね。

鬼頭さん：「seRection」という団体を作ってみえ、その名前が変わって「フィトラボ」になるとのことですが、今の活動について教えてください。

松本さん：「seRection」という名前ですが、セレクション、いろんなチョイスがあるんだよということでつけました。健康になるにしてもアロマセラピーという方法だけじゃなくて、人それぞれ何が必要なのか違うと思うんですね。それを選んであげる仕事をしていきたいなと思っていました。

そこから名前を変えていくというのは、独立して分かりやすさがとても大切だと実感したからです。当初私はアメニティーアドバイザーという名前で快適性を追及するためのアドバイザーとして独立していきたくったんですが、誰も知らないんです。その時、アロマセラピーのお仕事が来たんですが、アロマセラピストだと誰でも受け入れてもらえました。今ではアロマセラピー一本になりかけています。それで、そのことが伝わるような名前にしていくといいかなと思い名前を変えます。「フィット」は植物のことで、「フィットセラピー」は「アロマセラピー」を含めた学問（療法）のことなのです。

鬼頭さん：独立のところの「自己管理の難しさ」「恐怖感」というキーワードを見ると、独立はとても大変だと思うんですけど、逆に独立してよかったと思う点はどこですか？

松本さん：やっぱり自由です。独立したてのときはもちろん選べなかったですけど、だんだん仕事を選ぶことができるようになってきました。選ぶことができるから、軸がぶれないし、自分のやりたいことがはっきりしてきます。

鬼頭さん：独立して他の人と緩やかにつながっていくのと、組織に入って一丸となってやっていくのと、どちらが良いと思いますか？

松本さん：場合によりけりで、どちらも必要ですよね。私も独立という形ですけど、もちろんつながりがあるわけです。アロマ環境協会に属しているから、協会としてできることを働きかけていけばいいと思うんですね。「seRection」の他に会員が140～150人のNPOを立ち上げていますが、業界のモラルなどは、団体として戦っていった方が得なので団体でやっていこうと思います。

鬼頭さん：「今の志」の3つ目に「ネガティブシンキング」がありますが、その理由を教えてください。

松本さん：昔は非常にポジティブだったんです。自分のあるものを数えていこう、武器にしていこうと思っていました。無いものはいっぱいあったんだけど、例えば「お金は無いけど根性はある、だから根性でできるものはなんだ。」という風に自分をポジティブにしていってましたね。自分の年上の年代が「子どもがいるから、だんなさんがうるさいから仕事ができない」といったネガティブな発想だと思っており、「自分がやりたきゃやればいい、やれることやっていないんじゃないの」と思っていたんです。でも年を重ねるといろんなつながりができてきて、自分がその立場に立ってみると、ほんとにやれない理由があるということが分かってきたんです。今そこそこキャリアも出てきたから、自分の立場として何ができるかなと思ったときに、無いものでつながろうと思ったんです。困っている人、例えば時間が無い人たちができることは何か、無いといっている人たちと何ができるかなとということ数を数えていき、それからできるものを確立していきたいと思っています。

鬼頭さん：キーワード「等身大の受容」「ホリスティック」「ネガティブシンキング」で実現していこうとしていることはなんでしょうか？

松本さん：できると思っているのが後任の育成、後任というか、同じようなことをしてくれる人の育成です。たくさんの人にアロマセラピーを学んでいただくこと、そしてその方たちが社会に受け入れられるようにすることが実現したい形です。

鬼頭さん：「アロマセラピー」によって世界はどう変わるとお考えですか？

松本さん：変わらないとも変わるとも言いませんけど、アロマセラピストだからできることがあると思うんですよ。それはみなさんも同じで、自分だからできることが絶対あると思います。例えばアロマセラピストは植物を使うので「植物という資源を守る」というアロマセラピーというキーワードでつながった世界の守り方があると思います。それを実現していくことが、持続可能な社会の実現の一部を担うということですね。一部分をみんなが担えばそれで十分だと思います。

鬼頭さん：アロマセラピーは今どれくらい浸透しているのでしょうか？

松本さん：今はほとんどのみなさんがアロマセラピーという言葉を知っている段階ですよ。でもアロマセラピーは植物の全体性からは外れるんですよ。次の段階として、フィトセラピーという言葉確立していきたいと思っています。

鬼頭さん：私がなごや環境大学を担当していて、松本さんに「アロマセラピー」という講座を作っていた当初は、環境と感覚的にはつながっていると思っていたんですけど、「なごや環境大学でやる講座かな？」と思っていたところもあったんですが、今お話を聞いて、持続可能な社会の実現を担うということを聞いてよく分かりました。

松本さん：始めは「カルチャー教室じゃないんだよ」とよく言われたんですが、言われてもしょろがない時代、業界としても努力が必要な時代でした。だから、なごや環境大学にも積極的に入っていたんですね。すべてのことにつながっていく考え方なので、必ず自分を守るために環境を守ろうと思うんですよ。植物を使うので、植物が育つ土壌なども気になるんですね。環境とつながっていないものは無いですね。

松本さん：今度は鬼頭さんに質問をしていきたいと思っています。市に限らず必ず移動がありますよね。今までどんなことをやってきましたか？



鬼頭さん：最初は環境事業局といってゴミ関係の部署に採用になりました。次に作業の計画を立てる作業課にいき、その後が組合対応などの仕事の部署にいました。その後が環境都市推進課という、当初は環境教育などをしていた課に移動になりまして、なごや環境大学を2年間担当しました。今また環境事業局に戻って、ゴミの基本計画を作る仕事をしています。環境保全や環境教育という部署の経験は3年くらいしかないので、これから「持続可能な」というのもどこまで分かっているのかなというのが本音です。「持続可能な社会」ってみなさん違うのかな、共通の定

義ってあるのかな、と思いますね。国が「21 世紀環境立国戦略」というのを作り、その中では「持続可能な社会」の3つの柱として、低炭素社会、循環型社会、自然共生社会があげられています。一方でESDという貧困問題や平和問題も含めて総合的に考えていくという概念もあります。それなので、自分は思うのかといわれると答えに窮してしまいます。

松本さん：行政マンがどんな生活をしているのか気になることです。朝起きてからのライフスタイルを教えてください。

鬼頭さん：電気をつけっぱなしにして寝てしまうと、28度は熱いので20度にしてしまうなど、エコライフと全然かけ離れた生活をしています。実際の私生活は仕事を離れると全然違うなあと思いますが、ただ、施策を考えていくときは、こういう人間のライフスタイルを変えるには何をやらなければならないのかなというように、自分を基準に考え、より実効性の高い施策にしたいと常々考えていました。

松本さん：すごい大事なことですよね。できないこととか、等身大じゃないことを言われても「何だろう？」と思ってしまいます。「一般的な人ができること」という場合の「一般的な人のお手本」になっているんですよね。鬼頭さんができることを考えれば世界が変わるわけですね。

鬼頭さん：基本的には等身大で、無理をしないことで、持続可能な社会が作っていけるのかなと感覚的に思っています。

松本さん：たくさんの方が尋ねてくると思うんですけど、その中で印象に残ったこととかありますか？

鬼頭さん：ゴミの仕事だと特定の業者、特定の人としか結びつきがないですけど、なごや環境大学ですと、いろんな立場の人、いろんな主体の人が集まってきたんですね。いろんな人と知り合えて、何かの仕事をするときは「この人と共同してできるな」というようにいろんな選択肢も広がりました。人のつながりができたことが一番印象に残ったことですし、財産だと思います。

松本さん：NPOと一緒に仕事をする機会があったと思いますが、NPOをどうみます？

鬼頭さん：NPOともいろいろと仕事をしてきて、同じ立場でやっていこうと思っているんですけど、組織的な部分が弱くて、どうしても一部行政に頼ってしまう部分があるような気がします。それが悪いのではなくて、組織で動く企業とは違うかなと思います。

松本さん：それぞれの立場でパートナーシップがいい風に組めるといいですね。

鬼頭さん：そうですね。それが今後名古屋市が仕事をしていく上でも一番大事なことだと思います。

■話そう「これまで、現在、これから」について

松本さんと鬼頭さんに今に至るまでの経緯と今の志を話していただきました。いろんな人との出会い、きっかけで思いをもみ、だんだん形にできていると思います。

後半の時間は、2人でペアになり、自身の「これまで・現在・これから」について、つまり、これまでのことで今につながっているかもしれないきっかけや出会い、印象に残っていることを、また現在として今の志・思いを、そしてこれからやっていきたいことを伝え合って、互いを知り合い、相手から意見や別の視点、その人との出会いを得ることで、自分の思い、志を膨らましました。また、話し合いの過程も自ら作っていくことを大切に、今回は自由な形式で行いました。

くお互い話をして印象に残ったこと（自分の話したことで、相手からの話からでも）>

- ・ 企業のサラリーマン同士でした。お互い環境の仕事をやっていたので、企業における環境の問題について、苦しみとか事情の違いをお互いに理解できました。また、企業とNPOとの関わり方も勉強したいという話をしました。
- ・ OOさんはほんとに前向きな考え方を持っていてすごいと思いました。今回の講座にも参加して何でも吸収しようとされていて、非常に尊敬できる人だと思いました。
- ・ OOさんは「自分のために気持ちよいこと」をしている。ある意味わがままなんですけど、「自分に気持ちよいこと」は、間違っているといけませんが、他人にも気持ちよいことであって、持続可能な社会につながる一つのキーワードではないかと思いました。
- ・ ここにいるきっかけは公害を勉強したことでした。よりよい社会を目指すのか、作るのか、残すのか、悩みながら生きていました。今後は、今を一生懸命やらないといけないと思いました。
- ・ 松本さんは、お仕事の他にも学生のときに始められた子どものお世話するボランティアもしてみえました。楽しいのは仕事

よりボランティアとのことです、楽しくできることと、興味があってそこそこできることとバランスをとってよい日々を送られているということが印象に残りました。

- ・ ○○さんは、子どもの頃からいろいろ活動しているすごく活発な方で、輝いているしうらやましいなと思いました。自分もっと早く活動をしておけばよかったと思っていましたが、この頃は今からでも遅くないかな、これからでもがんばろうと思えるようになりました。
- ・ ○○さんは、根暗で引っ込み思案だったが、今は人前で話せるようになったことを伺って、人は変われるんだと思いました。また、仕事にしても指示を待つのではなく、気づいたところを動かないといけなかった、若いときを振り返り、それが学びとなって今活かしているという話を聞いたので、素晴らしいことだなと思いました。
- ・ ○○さんはセラピーに興味があって講座に参加されていました。セラピーをやりたいのは「誰かのために役に立つことができたらうれしい」からでした。そういう気持ちでやれるということは自分としても気持ちよいだろうし、周りも自分のためにやってくれるんだと思えるだろうから、素晴らしいと思いました。



■まとめ

松本さん：人の人生を聞いて刺激をうけるという人が多かったのかなと思いますが、私は無意識に自分との共通点を探している節もあるんじゃないかと思いました。自分と同じようなエピソードや同じような目指す道を見つけると、話が広がって行って、つながりが深くなっていく。そういうことがきっかけとなってつながっていく。また時間をとってやりたいですね。

鬼頭さん：発表を聞いていて、「持続可能な社会を考える」という時も、「その人が気持ちよく」ということが大前提にあって持続可能な社会につながるのかなと思いました。だから、持続可能な社会を無理に定義づけする必要はないかな、いろんな考え方があっていいかな、無理にまとめようとしなくていいかなと思いました。

■所感（EPO スタッフ；宇野）

なかなか志や思いは普段話にくいところもあると思うが、今日話していただいて、いろんな発見があった。話したり、積極的に興味のあるところへ行ってみるということも大切なことである。それが自分の興味あることだけにいくのではなくて、周りの意見を聞いてすることで、自分に戻ってきて、自分を膨らましていくことができる、そんなことを参加者と共有した。

【地域デザインスクール 「地域デザインにおける若者の所在」】

日時：2007 年 9 月 15 日（土）

場所：つながれっと NAGOYA

主催：NPO 法人地域の未来・支援センター

プログラム

13：30- 「くつながり」を求める子どもたちとおとなの役割 ～地域デザインにおける若者の所在～

牧野 篤氏（名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授）

14：40- パネル討論 ～会場からの質問・感想に基づき～

コーディネーター： 高野 雅夫氏（名古屋大学大学院環境学研究科 准教授）

パネリスト： 牧野 篤氏（名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授）

蒲 勇介氏（ORGAN デザイン室）

水野 馨生里氏（ORGAN デザイン室）

戸田 友介氏（株M-easy 代表）

16：00- 地域デザインスクールのまとめ

16：30- 終了

サステナブル社会実現に向けた若者の在り方を探るべく、最近の自我像のあり方を題材とした、次世代のビジョンについて意見交換がなされた。

現在の自我像の傾向として大きく 2 つのケースが考えられるという。1 つは、自我が統合しないまま成長を続けている、即ち背景としては統合させない社会が存在しているといったケースである。一方では、自我を統合した“私”から新たに自我が離れていくケースである。しかし、両ケースに関わらず、「真の本質は“日々実感が得られていること”や“生きてて良かったという状態”を感じる事が一つの指針である」、という一筋の総点もあった。

家族、組織、地域、社会、環境等の“私”以外の領域のサステナブルを考える時、必ず“私”というものがいつでも密接に神妙に関係している。これらの普遍・不変的な関係性の営みが“持続性の強度”となり、“実感”できる私たち、そして社会と成りえていくのであろう。

【ESD-T担い手会議】

日 時：2007 年 9 月 20 日（木）18:30～21:00

場 所：EPO 中部

出席者：天野、村瀬、浅田、浅川、桜井、新海、宇野

内 容：なごや環境デー ブース出展に向けて

9月23日（日）に開催されるなごや環境デーにて、ESDを広く伝えるためブース出展をする。そのため、当日の内容と準備について話し合った。環境デーでは、「占い」をきっかけに、ESD的な生き方を考え直す空間をつくろうというアイデアが出され、ハーブやおみくじなどツールを使い、こども、親子が気軽に参加しながら、ESDのメッセージを受け取っていただけるような企画をつくった。

【ユニー(株)提供 お店探検隊インタープリター養成講座(全5回)～ショッピングセンターでの環境学習実践～】

企画・運営 なごや環境大学実行委員会 環境省中部環境パートナーシップオフィス

第4回 フィールド学習/ワークショップ～環境学習プログラムづくりとインタープリテーション・伝えるコツの学習

日 時：2007年9月22日(土) 10:00-16:30

場 所：EPO中部

参加者：受講者15名中10名

【スケジュール】

＊オリエンテーション

前回のふりかえり、今日のねらい・スケジュール説明 桜井温子(EPO中部)

＊ワークショップ『環境学習プログラムづくり②』 桜井温子 新海洋子(EPO中部)

＊レクチャー『インタープリテーション「伝えるコツ」を学ぶ』 講師 のべときや 酒井 立子さん

＊ふりかえり 今日のふりかえりと次回のお知らせ(EPO中部)

【講座の様子】

第4回講座は、「環境学習プログラムづくりの仕上げ」と「プログラムを実施する際の『伝えるコツ』を学ぶこと」が目的である。

◆ワークショップ『環境学習プログラムづくり②』

午前中はワークショップ『環境学習プログラムづくり②』を行った。

まずは、第3回講座にやった内容をふりかえり、その後「子どもたちに伝えたいこと」を改めて紙に書き、お互いに書いたことを伝え合って、同じような思いの人とプログラムづくりのグループを作った。一人一人伝え合ったので、他の思いも知ることができた。

次に、プログラムを作るポイントと作り方についての説明。ポイントには、感性や五感で感じれるようにすること、起承転結といった流れを持つことや、リラックスするための場や間を設けること、伝えたいことをしぼり、伝える対象を認識して伝える方法を考えること、伝える道具を工夫すること、ネガティブなメッセージをポジティブに行動できるよう組み立てることなどであった。

それから昼食を含め約2時間、グループごとに自由な場所で企画づくりをした。そして午後一番にグループごとに発表をし、講師や他の参加者との意見交換をした。



＜グループで考えた企画のタイトルと概要＞

『ありがとうのスイッチ・オン!』

トマトの生ゴミサイクルを考えるワークを通して、「ありがとう」という感謝の気持ちを持つこと目的に行う。

『お母さんのお手伝い エコショッピング探検隊』

お母さんから渡された買い物リストを元に、エコショッピングをすることで、お手伝いをする心を養うこと、エコショッピン

グの体験、アピタ・ユニーのエコ活動PRを行う。

『地球おいしいカレーをつくろう』

買い物体験を通して、環境にやさしい買い物を知り、今までとの違いに気づき、これからの買い物につなげることを目的に行う。

『ゴミを活用すること』

活用できそうなゴミかできないゴミかの分別体験などを通して、ゴミは資源になること、そのゴミがどのように資源になるかを知ることを目的に行う。



◆レクチャー「インタープリテーション『伝えるコツ』を学ぶ」

まず、アイスブレイクを兼ねて、自然物（アオギの種）を見て感想や思ったことをいいながら自己紹介を行った。お面、コップ、セミなどさまざまなものを思い浮かべられ、紹介いただくたびに笑いがおこり、楽しい雰囲気になり、楽しい雰囲気を作ったと同時に、アオギの種を「種」としてだけみるのではなく、いろんな方向から見れることを体験し、「どう見るかは自由だよ」という導入にもなっていることをお話いただいた。

その後インタープリテーションについての説明。情報の伝達ではなく裏側にあるメッセージを伝えること、また教えるのではなくて興味を刺激し啓発すること、大人と子どもでは違ったアプローチが必要で

あることなど、説明を聞いて改めて気づいた部分も多くあった。そして、酒井さんにとってインタープリターは、自然、あるいは環境教育など伝えたいことに対して扉を開く人であり、そのためのキーワードとして、固定概念にとらわれず五感を駆使して感じることに、一番身近なフィールドを持つこと（一つのフィールドを良く知ることと比較もできる）という説明がった。

また、心構えとしては、まず自分が知る・体験すること、知識や小道具のスキルアップにチャレンジすること、危険への対処を考えること、日常にアンテナを張り巡らすこと、道具を開発すること（入れ物、鏡、白い紙など）、伝えるための工夫をするために、いろんなトリビア（「トンボ」は飛ぶ棒が語源ということなど）を集めたり、表現方法を工夫すること（殿様バッタは「仮面ライダータイプ」などと表現するなど）、自分の持ち味を磨くこと（しゃべり方、音楽を使う、ぬいぐるみを使う）などを具体的な例を交えて教えていただいた。最後に、あとは度胸とおもてなしの心（どうしたら参加者が楽しんでもらえるか、気持ち



よく過ごしてもらえるか、立ち居地や声の大きさの配慮など）と一歩踏み出していくためのメッセージがあった。

そして、「実際に伝えることを体験しよう！」と、近くの公園へ行き、伝える道具となる自然物を探して、「伝えたいこと」をどんな風に自分の持ち味を活かして伝えるかを各々で考えた。

会場へ戻ったあとは2分間程度で持ってきた自然物を使いメッセージを伝えた。参加者はそれぞれ自分にあった方法で伝え、他の参加者を和ませ、楽しい学びと気づきの場を作っていた。

◆ふりかえり（酒井さんより）

参加者の方々が、自分の持ち味を出していただいたと思っている。今日やってみてつらかったという方は違う方法を見つけてもいいし、こういうことがやれるんだ、もっとやっていこうと思った方は、これをどんどん訓練していくことができると思う。次回の講座では、ぜひアンパンマンになって子どもたちの心をぎゅっとつかむプログラムをして下さい。また他の方の発表で気づいた部分もあると思いますので、同じ班のみなさんで「こういうのがよかったからやってみようよ！」など、プログラムの中身以前のところで、また新しい発見ができると思う。ぜひ活かしてやっていただけたらと思う。

【所見】

「環境学習プログラムづくり」では、それぞれのグループが自分たちの「伝えたいこと」を伝えるためのアイデアを出し合い、形にする作業を行った。作り始めたばかりで詳細を詰めていくところ、改善するところはあるが、それぞれのグループの思いがこもったプログラム案が出てきていた。講師からのアドバイスを受け、さらに発想を膨らんだようであった。午後のレクチャーでは、参加者自身の持ち味を活かされている発表であった。実際に行ったことを元に、今後に活用したり、他の方法にチャレンジすることにつながればと思う。また、他の方の発表からも学び取り入れあえればと思う。

次回講座までに、グループごとにプログラムを作るが、その過程もお互いの持ち味を出し合い、お互いが学びあう機会になるので、一緒に作り上げる関係をみなさんと作っていきたいと考える。

【環境デーなごや 2007 なごや環境大学 2007 大学祭」ブース出展】

日 時：2007 年 9 月 23 日（日）10：00～16：00

場 所：久屋大通公園 もちの木広場

環境デーなごや 2007 では、ESD-T 担い手会議のメンバーとESD～持続可能な開発のための教育～を広く伝えるため、「がっつり ESD」というテーマでブースを出展し、一般の方に気軽に立ち寄っていただけるよう「占い」をツールに、ESD 的学びのメッセージを伝えた。

浅草寺風おみくじ、ESD カルタ釣堀、ハーブ占い、書道占い、ESD クイズなど創意工夫まんてんの企画に、こどもや親子が参加し、ESD を知らない方が多かったが、スタッフが ESD メッセージを丁寧に伝え、参加者は受け取っていた。占いをツールに楽しみながらコミュニケーションを交わすことで、多くの方に ESD のことを知っていただく機会をつくることができた。



【三重でのユニーお店探検隊の打ち合わせ】

日 時：2007 年 9 月 26 日（水）19：00～21：00

場 所：三重県庁桑名庁舎附属 第 2 会議室

出席者：河合、川杉、大東、野田、藤野戸、矢口、坂枝、新海、宇野

ユニーお店探検隊は、店舗を使った環境学習や店舗で取り組んでいる環境への取り組みを伝える活動を行っている。EPO 中部は、その取り組みが地域と方々と店舗が一緒に取り組み、地域での環境の取り組みがさらに進むよう、地域の NPO や市民と店舗が一緒に取り組むためのサポートしている。また、三重県は、企業、市民、学校、行政等の各主体が特長を活かし連携することで、地域の環境課題を自主的に解決していく仕組みづくりを構築し、県内に広めていくため、そのマッチング事業としてモデル的に実施することになり、EPO 中部と三重県が協力して地域でのパートナーシップ事業のサポートを行うことになった。、三重県にあるアピタ桑名店とアピタ四日市店で実施されるお店探検隊を、地元の環境教育等に携わっている方と店舗が一緒に行えるよう設定し、今回は市民側の第 1 回目の事前打ち合わせとして行った。

自己紹介、事業の概要を説明した後、各店舗で当日スタッフができる方が中心となって企画を考えた。環境教育など地元で取り組まれている方々だったので、各々のできることやアイデアにさまざまなことが出された。その後、各店舗プログラムごとに打ち合わせ、企画を決め具体化する。EPO 中部としては、今後もこのような地域と店舗がパートナーシップで取り組んでいくよう、サポートすることや、サポートに必要なことを考えていきたいと考える。

【中電環境学習実験キット 実験取材】

■実験概要

団体名	四日市市立中央小学校
参加者（学年・人数など）	4年1組25名（4年2組は次の日に実施）
場所	理科室
時間	2007年9月27日（木）第3・4限（10：45～12：25）
行事名	「水の学習」の一コマ
実施実験	にごった水をとうめいにする実験

■実験のねらい、子どもたちに伝えること

日常生活排水は、川や海を汚し、プランクトンから小魚そして大きな魚というように、食物連鎖で汚染物質が蓄積するなど生き物に影響を与える。その魚を食べる私たち人間にも影響が出てくる。生活排水を少しでも汚さないように、自分たちでできることを探し、行動に結び付けていくことがねらいである。（お米のとぎ汁は花壇へ、食器や洗たく機の洗剤は適量を使い、汚れによっては拭き取ってから洗うなど工夫する、など）

■実験の流れ・方法

実験の流れ	ポイント等
<環境学習情報センターで学んだふりかえり> 子どもたちに問いかけ、学習内容（生活排水の汚れを測ったこと）を振り返る。	以前の学習に積み重ねる形で実施した。
<にごった水をきれいにしよう（実験1）> ①魔法の液作り②水を土に入れてふり、にごった水をつくる（水の様子をノートに記す）③魔法の液を入れてふる	「土を入れるとどうなる？」など問いかけをして、関心を向け、子ども自身が考えるきっかけとする。 粉を混ぜる前と後の様子をしっかりと観察。子どもたちが気づいたことや感想を出し合う時間をしっかりとった。
<にごった水をきれいにしよう（実験2）> 同じ方法で各グループ毎に、お米のとぎ汁、シャボネット、オレンジジュース、コーヒー牛乳といった生活排水を使って再度実験に挑戦。水の様子をノートに書き出す。	粉を混ぜる前と後の様子をしっかりと観察。
<実験結果を各グループで発表> 実験1・2の結果を発表。	どんな状態かを丁寧に聞き共有した。実験が成功した班の水を全体に見せて共有。
<ふりかえり> 次の①～③の問いかけ、子どもたちは次の①～③のように掘り下げた。 ①生活排水を流すとき、にごった水ときれいな水はどっちがいいか。 ①生活排水を流すときはきれいな水がいい。 ②排水はどうしてきれいな方がいいか。 ②海・川がよごれなくなる。汚くなると魚や植物が死んでしまう。水をきれいにするとところ（污水处理場）で水をきれいにしやすくなる。 ③川・海が汚れるとなぜいけないか。 ③魚や植物が死んでしまう。泳げなくなる。魚を食べられなくなる。川にいる魚・川辺の虫などが違うところに行って	子どもたちに一つ一つ丁寧に問いかけ、実験から、自分でできる取り組みへつなげた。また取り組みにおいても、子どもたちが取り組めること（どろだらけになった服のどろをできるだけはらう、手を洗う前にできるだけ泥などを払うなど、時間をかけなくても自分たちでできることはたくさんあること）を話した。

しまう。鳥も水が飲めない。人も水が飲めなくなる。

そして、『生き物は水を飲むなど、水がないと生きることができない。水がきれいだと生き物も快適に暮らすことができる。水を汚すと自分たちの生活に返ってくる。ゼオライトは汚れと水を分けて汚れた水を流さないようにしている。このように会社も環境への取り組みを考えているので、みんなも身近でできることから考えて行動していきましょう。』と伝えた。

また、ゼオライトが石炭灰のリサイクルでできていること、水をきれいにする役割を持っていることを説明。ゴミを出さないこと、水を汚さない生活スタイルにしよう！ということ伝えた。(EPO より説明)

■実験時の生徒の声

- ・ すごい！きれいになった！（実験で水が透明になったとき）
- ・ なんかの塊が浮いている。
- ・ 上の方からだんだん透明になってきた。

■今回の授業の位置づけ

理科、社会、家庭科、総合学習にもかかる「水の学習」の一環として行われた。周辺地域は市街地で、水は地下を通り見えない状態になっている。そのため「水を大切に」という発想が生まれにくい地域であり、その上でも「水の学習」は重要な位置づけにある。

1 学期に社会見学として行われた三重県環境学習情報センターでの水質チェック講座において、生活排水による汚れを COD パックで実験し、何が水を汚すか、一番水を汚すものは何か（油や米のとぎ汁）、排水の工夫はどうするのがよいか（米のとぎ汁は植物に与える）などを学んでいた。今回の「濁った水をきれいにする実験」は、その連携授業として汚した水をきれいにすることを体験するために行われた。



■一緒に取材していただいた矢口さん（EPO 中部運営協議会）より

先生が事前にプログラムを熟知され、子どもたちに解りやすい解説や実験方法を取り入れる工夫をされ、子どもたち全員が、いきいきと真剣に実験に取り組み、その経緯を率直に発表し、日常で出す排水に気をつける具体例を発表し、実践につなげようとするすばらしい学習だった。

企業が取り組む廃棄物有効利用の「リサイクル学習キット」を、学校の現場で取り入れて学習すること、そのプロセスに EPO や運営協議会が協働することは、とても意義のあるプログラムであると痛感した。

■実施した教員の感想

＜エコキットを取り入れた授業を何故実施しようとしたか＞

学習内容（水の学習）に合っているものだった。汚れた水をきれいにすることを体験できるため、また、聞くよりも実験の方がよいとの思いより取り入れることにした。

＜実施しての感想＞

子ども達はきれいになった水を見てびっくりしていた。「水をきれいにするこ

と」に興味を持ったと思う。

水をきれいにするこ

とに興味を持ったと思うが、実際の生活になかなかつなげれない。ゼオライトは子どもたちにとって身近で手に入るものではないため、身近に感じられない。身近なものに結び付けられると子どもたちの「これならやってみようかな。」につながると思う。

今回の学習は総合学習ではなく、理科・社会・総合学習に関わってくる「水の学習」ということで実施している。

■エコキット事業の今後の検討課題

- ・にぎった水をきれいにするこ
- と、環境問題との関わり、子どもたちが取り組めることをどう関連付けるか、さらにそれを子どもたちに伝えるよう
- どう伝えるか、どう自分で取り組もうという気持ちになってもらうかについて実施する方は悩みながら取り組んでいる。受け取る方が大人の場合は、これらの部分について事例などを送付することを検討していきたい。また、受け取る方が子どもの場合は、実験をするのみに終わらないよう、問いかけなどを盛り込んだ資料の作成を検討していきたい。
- ・実験は失敗したところが多かった（うまくいくと思っていた土も今回は 1 つの班しか成功しなかった。シャボネットも成功しなかった）。水を濁らすものや、手順についてのアドバイスなどを考えるなど、対策を検討していきたい。
- ・ペットボトルにゼオライトの残り、処理方法に問題点がある。担当の先生から、使った水はどうすればよいかという質問があった。排水溝に流すと詰まる場合があるので、花壇にまくなどのアドバイスを手順書などに盛り込む検討をしていきたい。
- ・容易にキットを購入することが出来ないし、実際に家庭で使えるまで浸透させるまでのキット開発（本当に使用しても良いかも含めて）の必要性を感じた。

■所感

子どもたちが以前県の環境学習情報センターでの学習した実験を振り返り、学びを積み重ねる形で実施した。また様々な場面で「水に土を混ぜるとどうなる?」「生活排水を流すとききれいな水と汚れた水はどっちがいい?」「どんな風に汚れている?」「水を通して向こう側が見える?」など、ただ実験をするだけではなく、じっくり観察できるように、子どもたちが考えるように丁寧に問いかけを繰り返し、途中で立ち止まって考える学習方法が用いられた。

このような方法で環境学習キットが使われていることが参考にしてい

【2007 年度第 4 回 政策提言委員会 財団法人アジア保健研修財団】

日時：2007 年 9 月 27 日（木） 19：00-21：00

場所：財団法人アジア保健研修財団（AHI）

主催：名古屋 NGO センター政策提言委員会

プログラム

19：00- 名古屋 NGO センターの活動について

- ・名古屋 NGO センターが必要なわけ
- ・どのようなビジョンであるか
- ・取り組み、課題について
- ・加盟団体が競争相手になっていないか
- ・意思決定のプロセスについて
- ・財源について

19：30- 中部地域の市民社会のマクロな課題について

- ・何が今の課題であるか、現在の取り組みについて
- ・新たなパラダイムについて
- ・日本の市民社会の役割について

20：00- 意見交換

21：00- 終了

※ 政策提言委員会の活動 ー地域の声を政策決定の場へー

名古屋 NGO センターは、加盟 NGO をはじめとする地域の NGO の現地での活動や経験にもとづいて、政府や援助機関、地方自治体に対して、国際協力や交流のあり方について意見交換や政策提言を行う活動を行っている。現在取り組んでいる政府機関等との定期協議会は主に、NGO ・外務省定期協議会、NGO ・JICA 協議会の二つである。

所見

先進国日本と ODA（政府開発援助）を受けている途上国地域との関係とそこでの NGO のあり方について、AHI の国際研修生の方々（アジア 9 カ国から 14 名の参加）も交えて、外務省・JICA 等に提言する事項を話し合った。

民間の視点からの意見だけでなく、政府機関の政策プロセスや政府の課題事項を踏まえて、民間の意見抽出ができる場づくりが次の展開として必要と考えられる。

また、政府機関と民間の定期協議会は持たれているが、各々の課題解決の実現に向けた双方の意見交換の場づくりや、各々の機関の意向が今回の様な政策提言委員会に反映される場づくりを働きかけていくことも両輪で必要だろう。

【中電環境学習実験キット 実験取材】

■実験概要

団体名	環境劇団いるか
参加者（学年・人数など）	小学生～中学生 10 名程度
場所	安城市総合運動公園 (安城子どもまつり～市制55周年記念事業～ 環境劇団いるか出展ブースにて)
時間	9月30日(日) 9～12時
行事名	安城子どもまつり
実施実験	にごった水をとうめいにする実験

■実験のねらい、子どもたちに伝えること

実験を通して、ゼオライトが石炭灰のリサイクルでできていること、家庭排水を浄化する手段、焼却灰のリサイクルなど、環境への取り組みに楽しみながら関心を持ってもらい、学習したことを家庭で伝えてもらうことを目的に行う。

■実験の流れ・方法

実験の流れ	ポイント等
① ニゴール（濁る）国から来たドクタースケール（透ける）の紹介 ② 実験キットを参加者に一つずつ渡し、開封する。 ③ 水の入ったペットボトルを渡し、水をにごらせる。（土はキャップに1杯こぼさないようメガホンの形に作った紙を通して入れる。牛乳はスポイトで2回分入れる。） ④ ニゴール国から持ってきた魔法の粉をスプーンで2杯入れる。（ドクターは魔法の粉を入れていないボトルを持つ。） ⑤ みんなでボトルを振る。振っている間に、ドクターがゼオライトは火力発電所の石炭灰をリサイクルして出来ていることを説明。 ⑥ どうなったか問いかける。感想を聞く。 ⑦ 感想カードを渡して書いてもらう。環境カルタをプレゼント。	・服、めがね、ひげをつけて博士の格好をしたドクターをキャラクターにし、マジックショーのように「何が起こるんだろう？」というわくわく感を引き立てていた。 ・粉をペットボトルのキャップの水に溶かしておく方法でなく、直接ペットボトルに入れてよく振ってもらうようにし、時間を短縮した。 ・イベントの中で通りかかった子どもに参加してもらう形式のため実験時間が短いので、小さな子どもたちには1つのメッセージを伝えるようにした。 ・親子で参加された方もおり、一緒に見ていただくことで、大人も環境について考えるきっかけとなった。

■実験時の子どもたちの声

- ・ 灰なんかで牛乳がきれいになることを目で見てすごびっくりしました。興味を持ったので、インターネットでも調べてみようかなと思います。
- ・ 面白かったです！！ゼオライトで水がきれいになるのにはびっくりです！
- ・ あやしいけれど、おもしろかった。なぜきれいになるのか興味がわいた。
- ・ おもしろくてすごく不思議でした。



■実施者へのヒアリングを通して

- ・ただ水がきれいになったということだけでなく、環境に対してのメッセージを伝えたいが、何を伝えるかが難しい。「中電のエコキットが石炭灰のリサイクルでできていること」がメインに伝えることになるのかなと思う。
- ・キットをもらったらすぐにできると思っていたけど、自分たちで考えないといけなかったので予想外だった。
- ・実験は 6 歳からでもできるが「汚れた水がきれいになる」という実験だけでは環境のことについて考えてもらうことにはならない。本当に伝えたい内容（牛乳を残すと水が汚れるなど）を伝えようとする年齢が高くないと難しい。また、ある程度の時間も必要である。

■所感

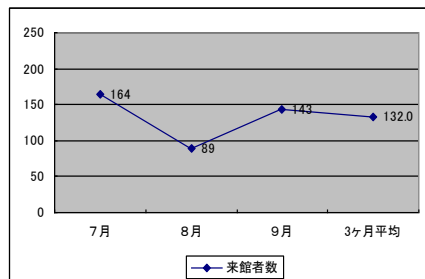
博士というキャラクターをつくり、楽しい問いかけを交えることで、「何が起こるか楽しみ」というワクワク感を持って実験に参加していた。また、環境への取り組みについて伝えようという工夫があった。イベントでの実施などで参考にさせていただけるよう、エコキットをプレゼントする人たちに伝えていきたい。また、伝える内容について再度検討するとともに、時間や参加のパターンによって違うため、別々の伝え方を提案していくことも検討していきたい。

「この実験で何を伝えるのか」ということを環境劇団いるかのメンバーの方々は自問していた。ゼオライトを使えば水が浄化できるから色々なところで使おうということではない。だとしたら、短時間で伝えられるのは、火力発電所のリサイクルの取り組みという面だろうということである。今回のような形式になったようだ。何をどんな風に伝えるかはそれぞれのグループの力量でもあり、それが様々な楽しい取り組みを生み出すことになるのだろうとは思いますが、考え方や広げ方の見本のようなものが提示してあると、プログラムも作りやすいのではないかと考えた。

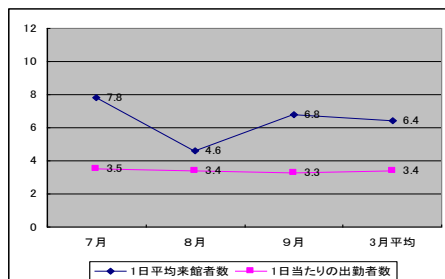
運営業務（2007 年度7－9月期）データ報告

（1）EPO 中部維持管理業務

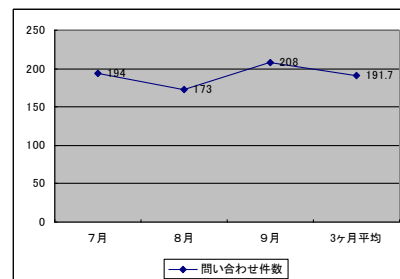
	7月	8月	9月	3ヶ月合計	3ヶ月平均
開館日数	21	19	21	61	20.3
来館者数	164	89	143	396	132.0
1 日平均来館者数	7.8	4.6	6.8	19.2	6.4
問い合わせ件数	194	173	208	575	191.7
1 日当たりの出勤者数	3.5	3.4	3.3	10.2	3.4



来館者数



1日平均の来館者数・出勤者数



問合せ数

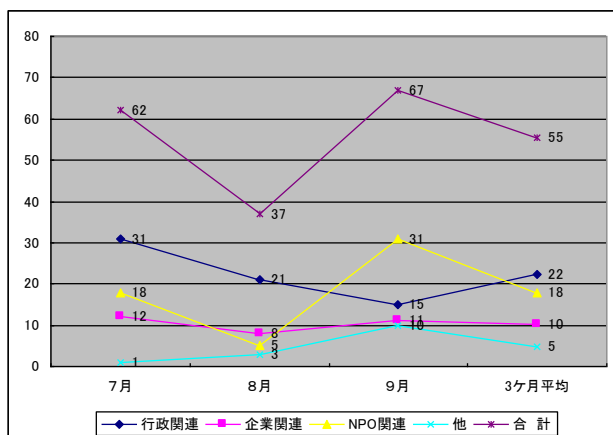
（2）EPO 中部広報業務/環境情報の受発信

①情報収集

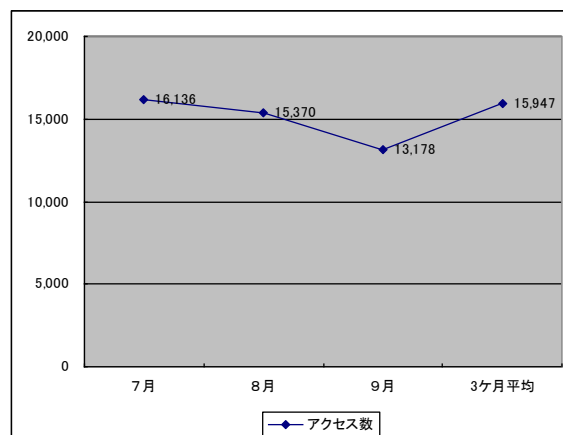
	7月	8月	9月	3ヶ月合計	3ヶ月平均
行政関連	31	21	15	67	22
企業関連	12	8	11	31	10
NPO 関連	18	5	31	54	18
他	1	3	10	14	5
合 計	62	37	67	166	55

（3）ホームページアクセス数

	7月	8月	9月	3ヶ月合計	3ヶ月平均
アクセス数	16,136	15,370	13,178	44,684	14,895



資料収集数



ホームページアクセス数